

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集

しら いし
白 石 遺 跡

1993年3月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集

しら いし
白 石 遺 跡

1993年3月

豊橋市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成2年度に豊川用水揚水槽設置事業に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査事業の報告書である。
2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行った。調査担当は贊元洋（豊橋市美術博物館）である。
3. 本書の執筆は第5章1縄文土器・2土製品を岩瀬彰利が、第6章3石器の石質同定を豊橋市自然史博物館学芸員家田健吾氏、他の執筆と編集を贊元洋が行った。
4. 本書に使用した方位は磁北である。また、遺構・遺物の縮尺はそれぞれについて明示した。写真の縮尺は明示したもの以外は任意である。実測図版と写真図版の遺物番号は対応している。
5. 本調査にあたって製作した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市埋蔵文化財調査事務所において保管・管理している。
6. 本報告書作成にあたり、以下の方々から資料の提供、御教示等をいただいた。
秋山浩三（向日市教育委員会）、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、伊藤久嗣（三重県教育委員会）、伊藤裕偉（三重県教育委員会）、島田哲夫（大町市教育委員会）、鈴木克彦（桑名西高校）、高橋龍三郎（近畿大学）、中沢道彦（長野県埋蔵文化財センター）、新田洋（三重県教育委員会）、野口哲也（貝殻山貝塚資料館）、野澤則幸（名古屋市博物館）、服部信博（愛知県埋蔵文化財センター）、家根祥多（立命館大学）、中村友博（山口大学）、前田清彦（豊川市教育委員会）、宮腰健司（愛知県埋蔵文化財センター）、向坂鋼二（浜松市博物館）、百瀬長秀（長野県埋蔵文化財センター）（敬称略、所属は当時のものである。）

目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地	2
第3章 歴史的環境	5
第4章 遺構	
1. 溝	8
2. 壺穴住居	8
3. 土壙	8
第5章 遺物	
1. 繩文土器	13
2. 土製品	27
3. 弥生土器	29
4. 土師器	35
5. 須恵器	38
6. 石器・石製品	39
第6章 考察	
1. 調査以前に採集された資料	45
2. 白石遺跡の遠賀川集団	64
3. 石器の石質同定	68

挿 図 目 次

第1図	白石遺跡周辺地形図-1 (1/20,000 1911年)	大日本帝国陸地測量部「石巻山」	3
第2図	白石遺跡周辺地形図-2 (1/25,000 1980年)	豊橋市全図	3
第3図	白石遺跡周辺地形図-3 (1/2,500 1980年)	豊橋市都市計画基本図	4
第4図	白石遺跡周辺地形復元図 (1/2,500 1980年)	豊橋市都市計画基本図より作成)	4
第5図	白石遺跡周辺遺跡分布図 (1/20,000 1980年)	豊橋市-3 1/10,000より作成)	7
第6図	調査区平面図 (1/50)		9
第7図	調査区断面図 (1/50)		10
第8図	S D-1 出土遺物状況図 (1/30)		11
第9図	S B-1 出土遺物状況図 (1/30)		12
第10図	縄文土器実測図-1 (1/3)		19
第11図	縄文土器実測図-2 (1/3)		20
第12図	縄文土器実測図-3 (1/3)		21
第13図	縄文土器実測図-4 (1/3)		22
第14図	縄文土器実測図-5 (1/3)		23
第15図	縄文土器実測図-6 (1/3)		24
第16図	縄文土器実測図-7 (1/3)		25
第17図	縄文土器実測図-8 (1/3)		26
第18図	土製品実測図-1 (1/2)		27
第19図	弥生土器実測図-1 (1/3)		30
第20図	弥生土器実測図-2 (1/3)		32
第21図	弥生土器実測図-3 (1/3)		34
第22図	須恵器・土師器実測図-1 (1/3)		36
第23図	出土石器実測図-1 (1/1)		40
第24図	出土石器実測図-2 (1/1,2/3)		41
第25図	出土石器実測図-3 (1/3)		42
第26図	出土石器実測図-4 (1/1,1/2,1/3)		43
第27図	採集石器実測図-1 (1/1)		46
第28図	採集石器実測図-2 (1/1)		47
第29図	採集石器実測図-3 (1/1)		48
第30図	採集石器実測図-4 (1/1)		49
第31図	採集石器実測図-5 (1/2)		50
第32図	採集石器実測図-6 (1/2)		51
第33図	採集石器実測図-7 (1/2)		52

第34図 採集石器実測図－8 (1/2)	53
第35図 採集石器実測図－9 (1/2)	54
第36図 採集石器実測図－10 (1/2)	56
第37図 採集石器実測図－11 (1/1, 1/2)	57
第38図 有段口縁の壺・甕 (1/4)	65
第39図 遺跡分布図	66
第40図 豊橋周辺の地質略図 (20万分の1 地質図「豊橋」(1977) より)	69

表 目 次

第1表 石器計測表 1	59
第2表 石器計測表 2	60
第3表 石器計測表 3	61
第4表 石器計測表 4	62
第5表 石器計測表 5	63

写 真 図 版 目 次

写真図版 1－1 遺跡遠景（南西から） 2 発掘調査前（北から）	
写真図版 2－1 発掘区遠景（北東から） 2 発掘区近景（北から）	
写真図版 3－1 SD－1 全景（北から） 2 SD－1 全景（西から）	
写真図版 4－1 SD－1 遺物出土状況 1（西から） 2 SD－1 遺物出土状況 2（東側）	
写真図版 5－1 SD－1 遺物出土状況 3（東壁付近） 2 SD－1 遺物出土状況 4（中央）	
写真図版 6－1 SD－1 遺物出土状況 5（西側） 2 SD－1 東壁断面	
写真図版 7 繩文土器 1	
写真図版 8 繩文土器 2	
写真図版 9 繩文土器 3	
写真図版 10 繩文土器 4	
写真図版 11 繩文土器 5	
写真図版 12 繩文土器 6	
写真図版 13 繩文土器 7	
写真図版 14 繩文土器 8	
写真図版 15 土製品・弥生土器 1	
写真図版 16 弥生土器 2	

- 写真図版17 弥生土器 3
写真図版18 弥生土器 4
写真図版19 弥生土器 5・土師器 1
写真図版20 土師器 2・須恵器 1
写真図版21 出土石器 1 (1/1)
写真図版22 出土石器 2 (1/1)
写真図版23 出土石器 3
写真図版24 出土石器 4
写真図版25 採集石器 1 石鎚 (1/1)
写真図版26 採集石器 2 石鎚 (1/1)
写真図版27 採集石器 3 石鎚 (1/1)
写真図版28 採集石器 4 石錐 (1/1)
写真図版29 採集石器 5 石鎚 (1/1)
写真図版30 採集石器 6 石鎚・石錐 (1/1)
写真図版31 採集石器 7 石鎚 (1/1)
写真図版32 採集石器 8 石鎚 (1/1)
写真図版33 採集石器 9 石鎚 (1/1)
写真図版34 採集石器 10 石鎚 (1/1)
写真図版35 採集石器 11 石鎚 (1/1)
写真図版36 採集石器 12 石鎚 (1/1)
写真図版37 採集石器 13 石鎚 (1/1)
写真図版38 採集石器 14 石鎚 (1/1)
写真図版39 採集石器 15 石鎚 (1/1)
写真図版40 採集石器 16 石鎚 (1/1)
写真図版41 採集石器 17 磨製石斧 (1/1)
写真図版42 採集石器 18 磨製石斧 (2/3)
写真図版43 採集石器 19 磨製石斧 (2/3)
写真図版44 採集石器 20 磨製石斧 (2/3)
写真図版45 採集石器 21 磨製石斧・石錐・石棒等 (2/3)
写真図版46 採集石器 22 石棒・玉類 (1/1)
写真図版47 採集石器 23 磨製石斧 (2/3)
写真図版48 岩石薄片偏光顕微鏡写真 (すべて直行ニコル、×40)

第1章 調査の経過

白石遺跡は愛知県豊橋市石巻本町字樋割98に所在する。発掘調査は豊川用水の分水槽設置に伴い行われた記録保存のための調査である。調査期間は1990年9月6日から10月18日まで、調査面積は60m²である（第3図 白石遺跡周辺地形図-3）。

発掘区は分水槽の建設予定地の測量杭にあわせて、南北9m、東西7mの区画を設置した。白石遺跡周辺はすでに圃場整備事業が行われた地区であり、今回の発掘地点はある程度の盛土が予想されたので、南辺に幅約1mの試掘トレンチを入れた。確認された盛土は表土層の下にわずか存在するだけであったので重機により表土層とともに除去を行った。

遺構精査は南側より順次行ったが、地山は角礫層のため遺構検出が難しかった。また、発掘期間中に台風が連続して3回来襲し、発掘区の一部水没と倒木のため近接した斜面の一部が崩壊した。崩れた崖面の観察からも、発掘区西側の崖面は明らかに人為的に削られたものであることが確認でき、直下にある牟呂用水開削時によるものと考えられる。また、発掘区南側の崖面は圃場整備時に台地先端部が削られていることが確認されており、本来の地形は南側と西側にさらに台地が伸びていたことが確認された。

発掘区内の地形は北東隅が最も高く、南西に向かって低くなっている。この中央から幅約1.5mの溝が検出された。溝の上部は竪穴住居によって一部攪乱を受けていた。確認できた遺構は、この他には土壙26個であるが発掘面積が狭いために掘立柱建物等になるかどうかは確認できていない。



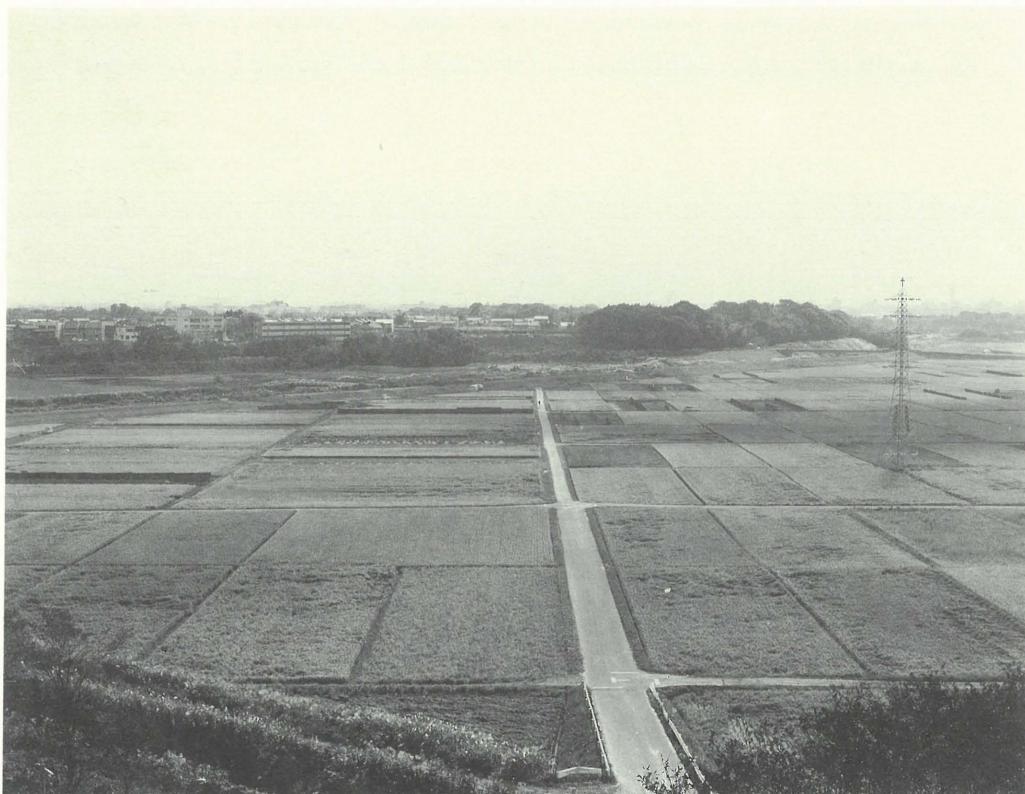
遺跡調査風景

第2章 遺跡の立地

白石遺跡は豊橋平野中流部で豊川とその支流である神田川にはさまれた段丘の南西端に位置している。段丘は豊橋上位面（注1）と呼ばれている中位段丘であり、段丘下の沖積面との比高差は約10mである。対岸の豊川右岸の段丘までは直線距離で北西に約4km、現海岸線までは西に約9km、弥生時代の復原海岸線までは西に約6.5km、豊橋平野の弥生時代の中心的集落である瓜郷遺跡までは西に約4.5kmの距離に位置している。

豊川左岸の段丘端部は沖積地との境に明治時代に造られた牟呂用水の開削時に削られて長距離に渡って改変を受けている。白石遺跡のある段丘も西側は、このために改変を受けており、また南側も圃場整備事業のために台地先端部分が削られている。神田川上流部や豊川左岸でも地形改変を受けていないと考えられるところではもっと緩やかな傾斜であり、白石遺跡周辺の地形も本来は西側と南側に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。この様な点から、地形を復原すると第4図のように復原できる。

注1 水野季彦「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』1987年



白石遺跡遠景写真

第3章 歴史的環境

白石遺跡のある地域は豊橋市の中でも北部にあり、旧八名郡にあたる地域である。遺跡分布の傾向は、豊川左岸の段丘縁に弥生時代を中心とした遺跡が多く、静岡県との県境になる山脈の裾部に古墳時代後期の群集墳を中心とした数多くの古墳が分布している。

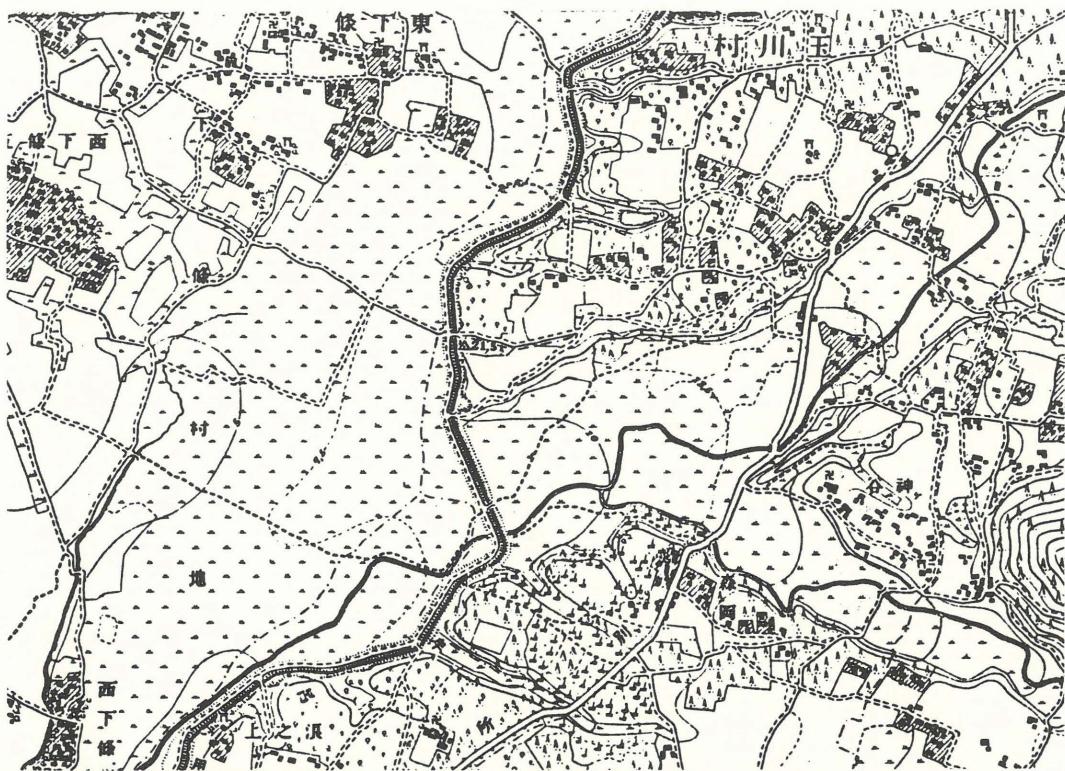
旧石器時代の遺跡としては、白石遺跡より南に約2.5kmのところに洪積世の人骨として知られている牛川人の発見地（第5図31）がある。この他には、尖頭器等が出土したとされる地点がある（注1）が十分に確認されていない。豊川左岸の段丘は表土層の直下にはすぐ基盤の礫層がある場合が多く、旧石器時代の堆積層やクロボクは余り発達していない。今後良好な条件の所に付いては遺跡が確認される可能性もあるが、現状では最も実体が把握できていない時代である。

縄文時代は早期の押型文土器が嵩山蛇穴洞穴遺跡や白石遺跡（第5図8）に近接した大清水遺跡（第5図4）等の数ヶ所の遺跡から出土しているが、いずれも小規模な遺跡と考えられる。前期・中期の遺跡に付いてはほとんど報告がなく実体は不明である。後期になると貝塚をともなったとされる多り畑遺跡等の少數の遺跡が確認されているが、最も数が多いのは晩期以降の突帯紋・条痕紋系の土器を出土する遺跡である。

弥生時代では、今回報告する前期の白石遺跡がある。弥生前期にあたるこれ以外の遺跡はすべて縄文晚期から系譜を引く条痕紋土器の遺跡であり、この時期は両者が並存している。この条痕紋系の土器は弥生中期（畿内第II様式平行期）まで存続しているが、この時期の遺跡は前期と比較して、かなりその数が減少する。次の時期（畿内第III様式平行期）には尾張地方からの影響のもとに成立した瓜郷様式の遺跡が沖積地に出現する。豊橋平野ではこれ以後急速に遺跡数が拡大していく。白石遺跡においても、近接する高井遺跡（第5図6）が長床・高蔵様式（畿内第IV様式平行期）から始まり、寄道・山中様式（畿内第V様式平行期前半）になると同時に段丘上の北約1.5kmに城ノ内遺跡、神田川の対岸には多くの竪穴住居と方形周溝墓が出土したとされる浪ノ上遺跡（第5図18）や森岡遺跡（第5図14）（注2）等の多くの遺跡が出現し、古墳時代はじめまで存続する。

古墳時代前期では、弥生時代後期から継続している浪ノ上遺跡等があるが、これ以後は集落遺跡は弥生時代と比較して数が少なく、その規模も小さく、遺構密度も低くなる。白石遺跡の東約2kmには白山II遺跡、竪穴住居跡が確認された青木II遺跡、西屋敷I遺跡等（注3）がある。これらの竪穴住居は遺跡内でまばらに分布しており、平面形は一辺6~8mの方形で主柱穴は4本、壁溝を持ち、北辺中央にかまどを有しているものが一般的である。

古墳は白石遺跡より北に約3kmの馬越地区を中心に権現山2号墳、勝山1号墳、茶臼山1号墳等の前期の前方後方墳が集中して築かれている。白石遺跡周辺の段丘端部には、10~20mの方墳を中心とした高井古墳群-1（第5図2）があり、5世紀後半から6世紀初頭のものと考えられる。また、小円墳を主体とした高井古墳群-2（第5図3）もあり、いずれも内部主体



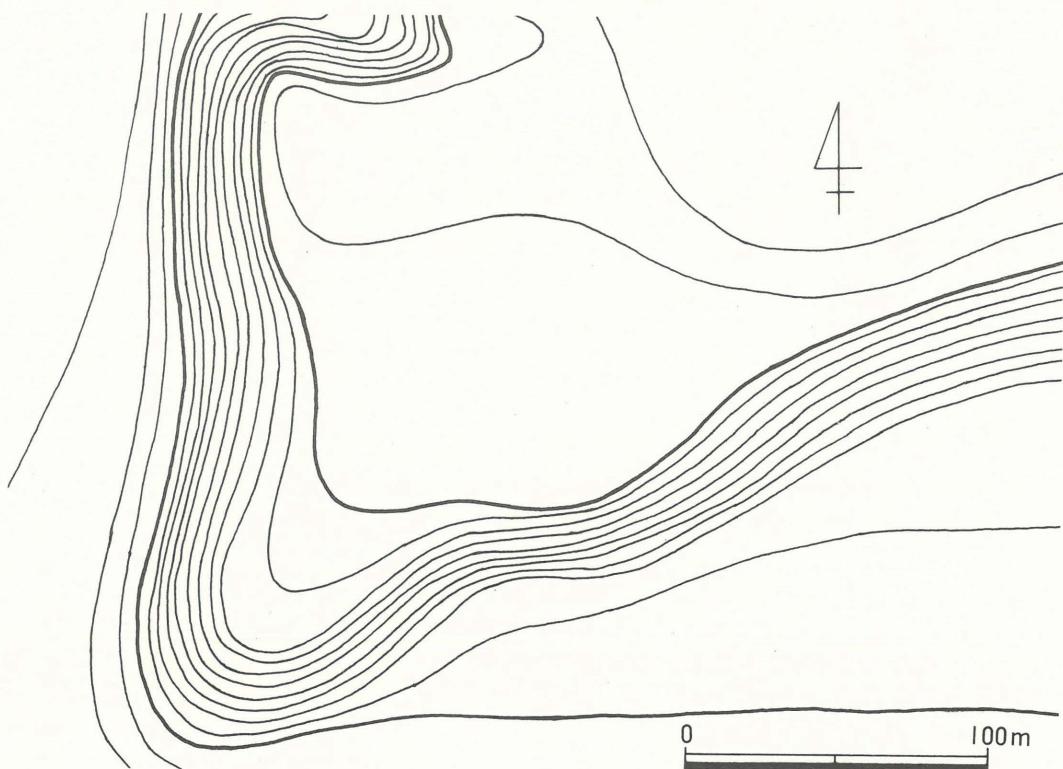
第1図 白石遺跡周辺地形図－1 (1/20,000 1911年 大日本帝国陸地測量部「石巻山」)



第2図 白石遺跡周辺地形図－2 (1/25,000 1980年 豊橋市全図)



第3図 白石遺跡周辺地形図-3 (1/2,500 1980年 豊橋市都市計画基本図)



第4図 白石遺跡周辺地形復元図 (1/2,500 1980年 豊橋市都市計画基本図より作成)



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 高井城跡 | 2. 高井古墳群－1 | 3. 高井古墳群－2 | 4. 大清水遺跡 | 5. 西砂原遺跡 |
| 6. 高井遺跡 | 7. 庄司ヶ下遺跡 | 8. 白石遺跡 | 9. 桑原遺跡 | 10. 神ヶ谷遺跡 |
| 11. 石神遺跡 | 12. 東屋敷遺跡 | 13. 森岡古墳群 | 14. 森岡遺跡 | 15. 狹間1号墳 |
| 16. 狹間2号墳 | 17. 中野遺跡 | 18. 浪ノ上遺跡 | 19. 浪ノ上1号墳 | 20. 稲荷山1号墳 |
| 21. 稲荷山2号墳 | 22. 稲荷前遺跡 | 23. 熊野遺跡 | 24. 東側遺跡 | 25. 西側古墓群 |
| 26. 西側遺跡 | 27. 中郷遺跡 | 28. 洗島遺跡 | 29. 牛川焼窯跡 | 30. おいほて遺跡 |
| 31. 牛川人出土地 | | | | |

第5図 白石遺跡周辺遺跡分布図 (1/20,000 1980年 豊橋市-3 1/10,000より)

は横穴式石室ではないと考えられる。後期になると横穴式石室を持った全長約62mの前方後円墳である馬越長火塚古墳があり、東側の山脈裾部には馬越北山古墳群、瀬戸古墳群等の横穴式石室を持った後期群集墳が数多く築かれている。神田川の対岸には森岡古墳群（第5図13）があり、方墳と考えられる周溝から多くの土師器・須恵器が出土した森岡第2号墳がある（注4）。また、この近くには方墳と考えられる稻荷山1・2号墳（第5図20・21）や5世紀後半と考えられる浪ノ上1号墳（第5図19）があり、5世紀から6世紀にかけて方墳が多く築かれた地域である。

奈良から平安時代では、白石遺跡のある段丘の下に墨書き土器を出土している西砂原遺跡（第5図5）がある。遺物の散布は台地の上の広範な地域についても認められるので、かなり規模が大きくなると考えられる。

中世以降は12から13世紀のものと考えられる長大な溝が確認された白山I遺跡があり、同時期の遺物は白石遺跡、高井遺跡、城ノ内遺跡等の多くの遺跡で出土している。また、中世城館とされる石巻山城、高井城（第5図1）があり、豪族屋敷と推定されている土塁が残っている馬場遺跡がある（注5）。

この様に白石遺跡周辺は旧石器時代から各時代の遺跡が存在しているが、弥生時代は遺跡規模が大きく、数も多い。

注1 木下克己『八名郡の先史遺跡』1975年

注2 北村和宏「森岡遺跡発掘調査報告第4章遺構」『森岡遺跡 淡州神社北遺跡』1991年

注3 貢元洋・鈴木敏則『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 石巻神郷地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1986年

注4 北村和宏「森岡遺跡発掘調査報告第4章遺構」『森岡遺跡 淡州神社北遺跡』1991年

注5 遺跡分布図は、愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布地図（III）—東三河地区—』1990
より作成した。

第4章 遺構

今回報告する発掘区からは弥生時代の溝1条、古墳時代の竪穴住居址1棟、時期不明の土壙26基が確認されている。発掘区の基本層位は第1層が約25cmの耕作土、第2層が約20cmの造成土、第3層が約15cmの遺物包含層、第4層が地山である（第7図）。

1. 溝（SD-1）

今回の発掘調査で確認された溝は、検出面での幅約1.5m、深さ約1mで底面は約1mの幅で、断面形は逆台形をしている。地表面では幅約2m、深さ約1.5m程と推定される。現状で確認できる長さは約10mで、発掘区の中心を弧状に伸びているが、さらに続くことは確実である。

この溝は舌状に張り出した段丘の先端近くにあるが、段丘を切り放すように段丘内部に向かって弧状に伸びている（第6図）。形状、規模等は三重県大谷遺跡、永井遺跡、愛知県高蔵遺跡で確認されている弥生前期の溝との強い共通性が指摘でき、これらと同様に環濠と考えて差し支えないであろう。今回の発掘で確認された溝は一条であるが、他遺跡の例と同じように、数条が弧状にめぐるものと考えられる。

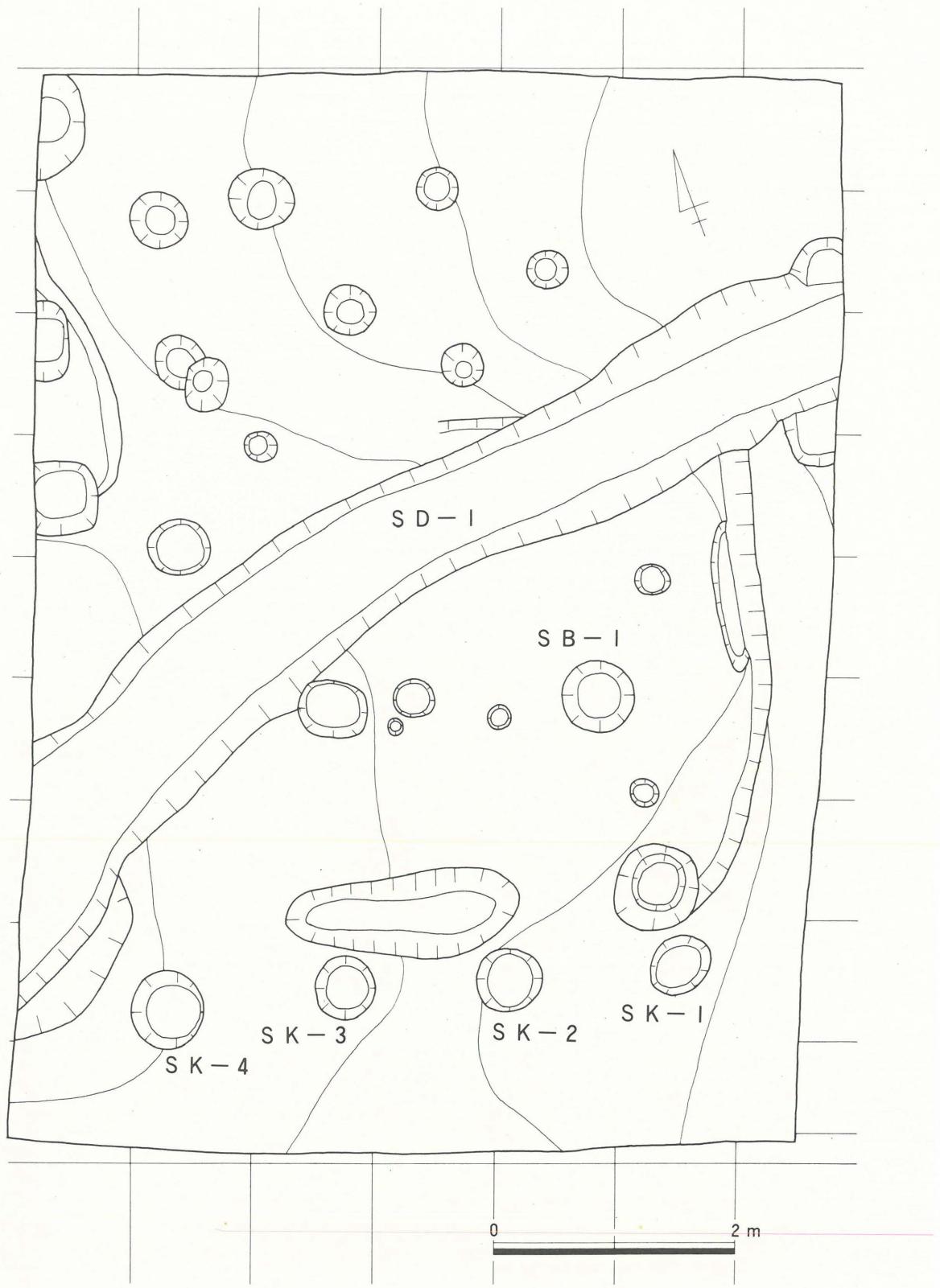
溝内部の埋土は自然層位としては明確に分層できないが、遺物の出土状況からは環濠内部から土器、獸骨等が投棄されていることが確認できた（写真図版5）。溝の上層は竪穴住居等によって一部が攪乱を受け、六世紀後半ごろの土師器甕等が出土しているが、下層においては縄文時代後期から弥生時代前期にかけての遺物が出土している。特に弥生前期の遠賀川様式の土器が投棄された状況で出土しているが、在地の条痕紋系土器である樫王・水神平様式の土器は7点の小片が出土しただけであり、この溝が遠賀川様式のものであることを示している。

2. 竪穴住居（SB-1）

竪穴住居は1棟が確認されている。SD-1の上に重なるように造られており、平面形は方形で南北4.2m、東西3.0m以上と考えられる。深さは最も深いところで0.1mである。SB-1は大半が流失しており、全体の規模は不明である。主柱穴は四本柱と考えられるが、西側の二本は確認できていない。柱穴間の長さは1.75mである。壁溝は一部で確認できるが全体形は不明である。この時期の竪穴住居では北壁際の中央にカマドの存在が推定できるが、すでに流失している可能性が高く、確認できていない。出土遺物は六世紀後半と考えられる土師器甕等が出土している（第9図）。

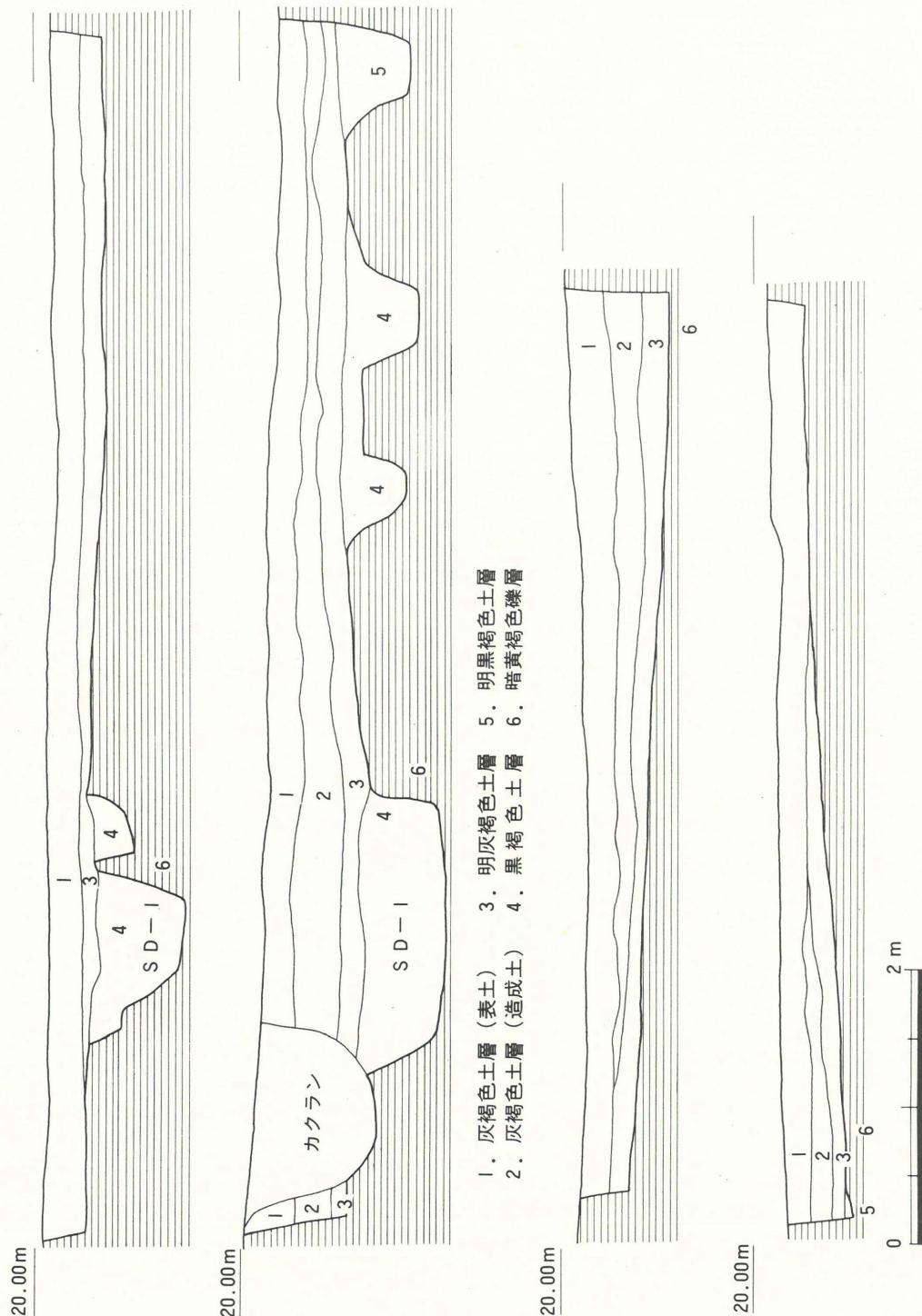
3. 土壙（SK-1～4）

白石遺跡では総数26基の土壙が確認されている。出土遺物は微量であり、時期を確定できる

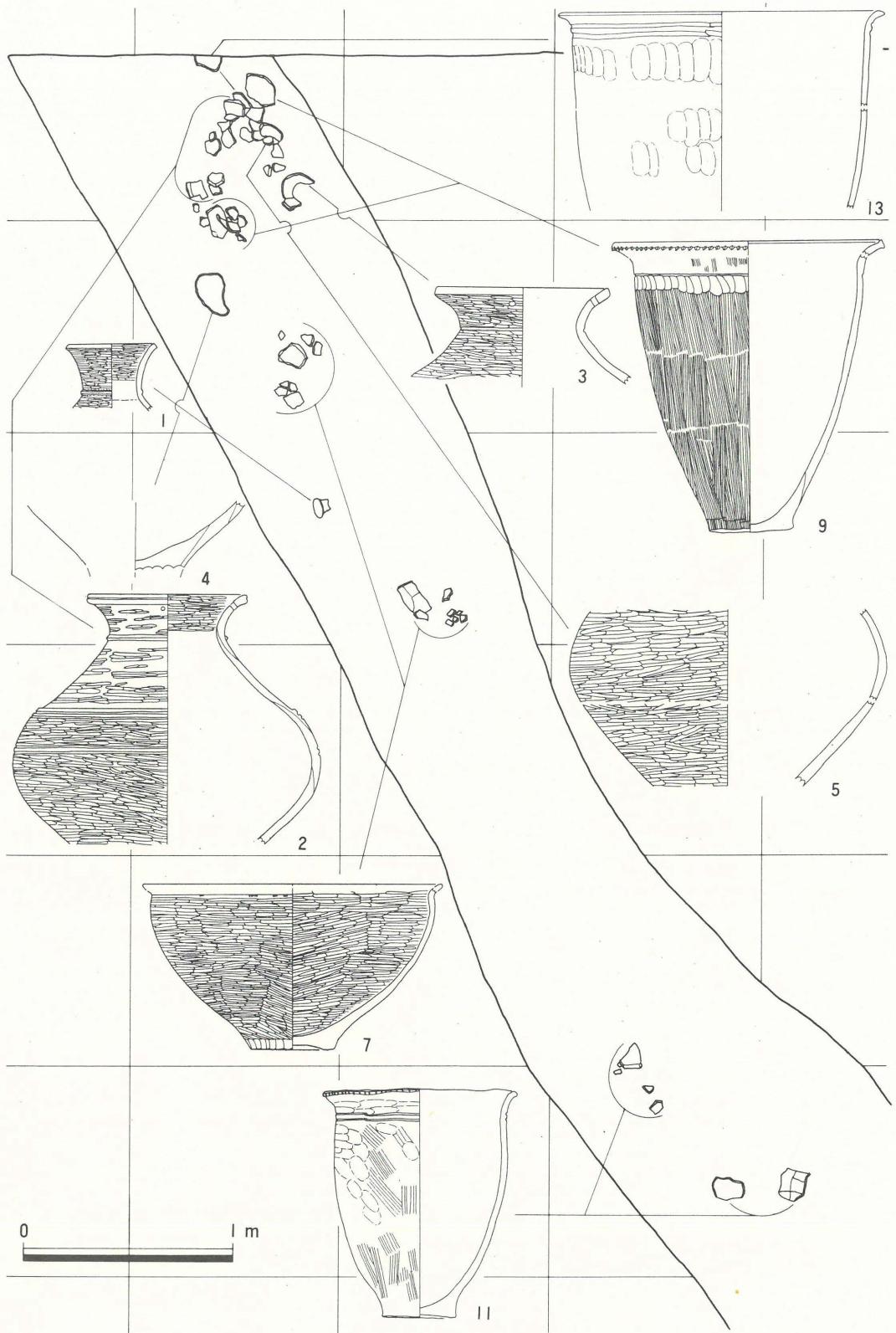


第6図 調査区平面図 (1/50)

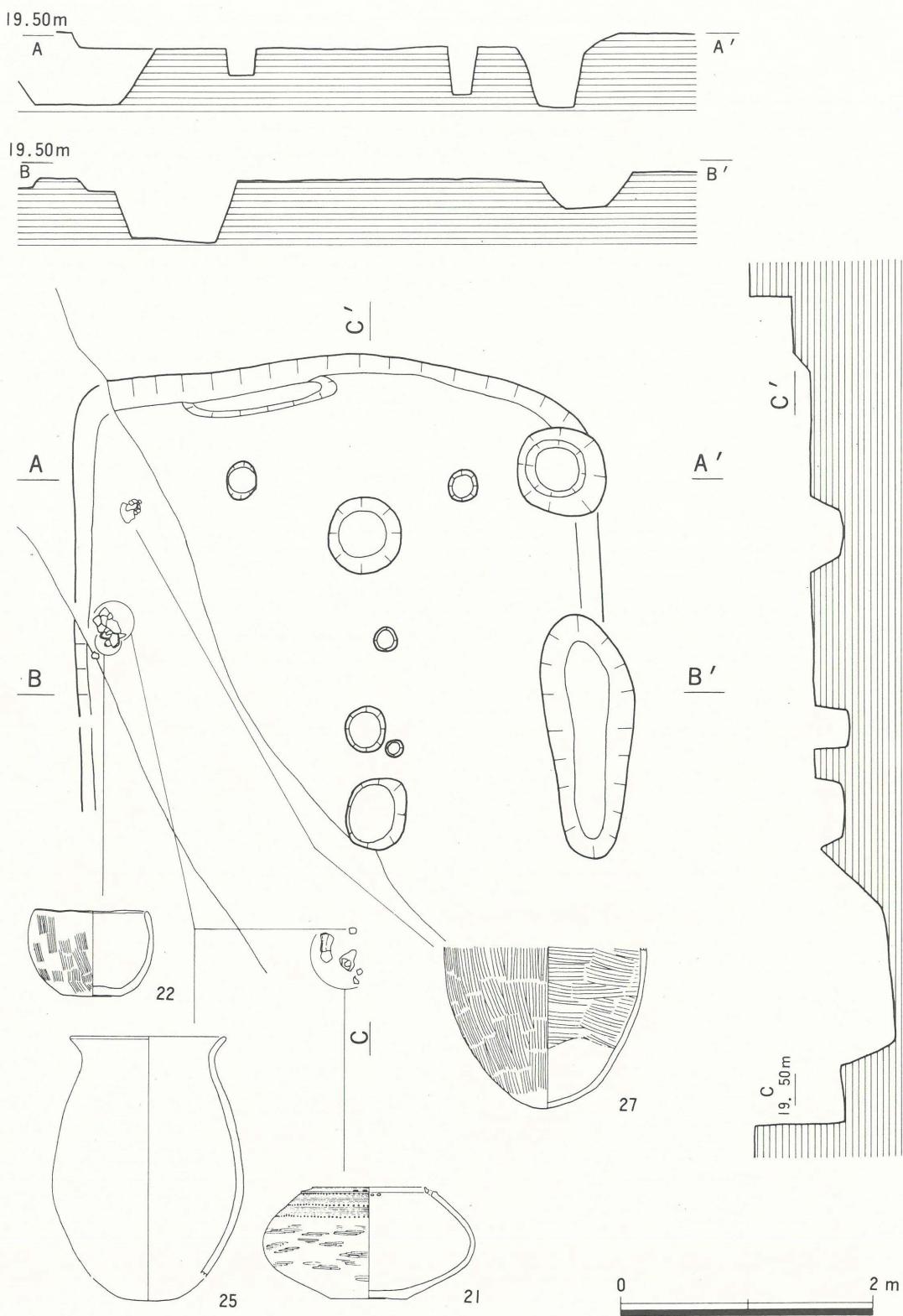
ものは少ないが、大半は六世紀以降のものと考えられる。SK-1～4は直線状に並び、埠状遺構あるいは掘立柱建物になる可能性がある。



第7図 調査区断面図 (1/50)



第8図 SD-1出土遺物状況図 (1/30)



第9図 SB-1出土遺物状況図 (1/30)

第5章 遺物

1. 縄文土器 (第10~17図)

縄文土器は、大半が遠賀川式土器の出土したSD-1及び表土より出土している。遠賀川式土器に伴う条痕文土器以外は遺構一括資料、層位別等の有効なデータは得られていない。また、出土土器は大半が細片であり、時期も中期末～晚期末（弥生早・前期）のものを含んでいる。ここでは、従来の知見を基に大きく時期別に分類し、更に土器の型式学的特徴から可能な限り現在認識されている各型式にあてはめ説明する。なお、SD-1に伴う条痕文土器のみは別に明示したが、その他の土器の出土地は図版に記した。

第I群土器 (第10図1~38)

第I群は中期末～後期初頭の土器であり、3類に細分した。後期初頭のものが比較的まとまって出土している。

1類 (1・2)

1類は中期末の土器である。1・2は棒状工具により約1cm間隔で縦位に沈線が施文されている。南知多町林ノ峰貝塚より良好な資料が出土している。

2類 (3~5)

2類は中期末～後期初頭に位置すると思われる土器である。3は内湾した口縁部の破片であり、RLの縄文地に弧状の沈線が施されている。4も口縁部破片であり、RLの縄文が施されている。5はRLの縄文地にV字状の沈線が施された磨消縄文の破片である。

この地域の中期末は山ノ神II式（注1）と仮称林ノ峰I式（注2）が提唱されている。今回出土した資料は1類については林ノ峰I式のH層出土1類の土器と類似しているが、2類については前述の2型式よりは後期初頭に近いのかも知れない。

3類 (6~38)

3類は後期初頭の称名寺式及びこれに併行する土器である。6~12は口縁部の破片で、端部が強く内側に折れるもの（6~8）、内面が肥厚されたもの（9~11）、端部に面をもつもの（12）がみられ、そのうち磨消縄文の施されたものはLR（7・9）、RL（10・11）である。13~16は胴部破片であり、LR（13・14）、RL（15・16）の磨消縄文が施されている。6~16は称名寺式である。17は波状口縁部の破片で、端部を肥厚させ波頂部に刺突を加え磨消縄文（摩滅して原体は不明）を施している。18も口縁部の破片で端部が丸く、RLの縄文が施されている。19~28は胴部破片であり、LR（20~22）、RL（19）の磨消縄文が施されているものと沈線のみのもの（23~28）がみられる。17~28は称名寺式もしくは併行する別型式と思われる。29~35は櫛描文の施されたものであり、口縁に沿ってV字状に施されたもの（29・30）、横位に口縁に沿い、そこから斜めに下がるもの（31）、曲がるもの（32）、縦位のもの（33~35）

がみられる。29～35はこの地域で称名寺式に伴う櫛描文の土器群である。36～38は口縁部の破片であり、櫛描文が施されている。口縁端部が強く肥厚するもの（36）、端部に刻みを有するもの（37）、ゆるやかに内湾するもの（38）がみられる。36～38は称名寺式よりは併行する中津式に近いものと思われる。

第II群土器（第11図39～74、第12図75～90）

第II群は後期前葉の土器であり、5類に細分した。

1類（39～50）

1類は堀之内I式に比定されるものである。39～45は口縁部の破片であり、端部を丸め折り曲げ屈曲部に沈線を施したもの（39）、更に二条の沈線を施したもの（41）、口縁端部に沈線を施すもの（40）、口縁に突帯を貼付けたもの（42）、端部を肥厚させ口唇面に沈線を施すもの（43）、波状口縁のもの（44・45）である。46・48は磨消繩文で、RLの繩文が施されている。47は沈線であり、49は弧状の櫛描文、50は注口土器の注口部根元である。

2類（51～73）

2類は堀之内II式に比定されるものである。51・52は口縁部の突起部分である。51は円形の突起を付け、端面に棒状工具で渦巻を描く。器面には粘土紐を貼付け、その上を刺突している。突起部には内面から外面に向けての孔を有す。52は口唇部に粘土紐を貼付け加飾している。53～59は深鉢の口縁部破片である。53は口縁に1条の粘土紐を貼付け刺突しており、その下にはLRの磨消繩文を施す。口縁内面には1条の沈線がある。54もRLの磨消繩文、内面に1条の沈線を施す。55・56も内面に1条の沈線を有す。57・58はLRの繩文が施されている。59は端部を押しナデ、膨らませ、棒状工具によって弧状と直線の沈線が施されている。60～62は鉢・浅鉢の口縁部破片である。60はゆるやかに内湾する口縁部に1条の有刻突帯を貼付け、その上に1条の沈線を加えている。器面は丁寧に磨かれている。61は口縁が屈曲し、磨消繩文が施されているようである。62は口縁部が折れ曲がり、その下に1条の有刻突帯を貼付けている。63～63はRLの磨消繩文が施されている。68～73は沈線の施されたもので、69・70のように渦巻文もみられる。

3類（74）

3類は北白川上層II式の粗製深鉢と思われるもの（注3）である。74は胴部が膨らみ口縁部が外反する器形をなすものである。器面調整は摩滅のため不明である。

4類（75～83）

4類は八王寺式に比定されるものである。75は口縁部の破片であり、4波頂の波状をなす。口縁部はくの字状に折れ、波頂部に5単位の縦位の沈線、波底部に2単位の縦位の沈線を施し、その間を2条の沈線で結んでいる。76～78も口縁部の破片で、横位の2条沈線の下に蛇行沈線、更にLの繩文が認められる。77はLRの磨消繩文、78は沈線が施されている。79～81は胴部破片であり、RL（79・80）とLR（81）の磨消繩文がみられる。82・83は注口土器の破片であり、RL（82）とLR（83）の磨消繩文が施されている。

5類 (84~90)

5類は縁帶文土器である。84・85は口唇部を肥厚させ、その端面に刻みを施す。86・87は口縁外面を肥厚させ、LRの縄文を転がし横位の2条沈線を施している。88は端部を肥厚させ、口唇面にLRの縄文を施している。89・90は波状口縁をなすものと思われ、口唇端部及び器面に縄文を施しているが、摩滅のため原体は不明である。84・85・88~90は彦崎K I式、86・87は津雲A式に対比されると思われる。

第III群土器 (第12図91~103)

第III群は後期中葉～後葉の土器であり、3類に細分した。中葉のものは極めて少ない。

1類 (91~93)

1類は近畿地方の元住吉山I式に比定されるものである。91~93は口縁部の破片である。91は1条の沈線下を半截竹管によって横列の連続爪形文が施されている。92・93は内側に僅かに屈曲し、その屈曲部に1条の沈線を巡らせている。

2類 (94~96)

2類は近畿地方の元住吉山II式に比定されるものである。94は口縁部破片であり、横位の2条沈線の線上に巻貝の殻頂による刺突が加えられている。95も沈線と刺突がみられる。96も横位の4条の沈線が施されている。

3類 (97~103)

3類は近畿地方の宮滝式に比定されるものである。97~99は屈曲した口縁部に2条以上の巻貝による沈線が施されている。100~103は粗製土器である。100はゆるやかに外反する深鉢で、内外面共に巻貝による条痕調整がされている。101~103も巻貝による条痕調整がなされている。

第IV群土器 (第13図104~121)

第IV群は後期末～晚期前葉の土器であり、4類に細分した。

1類 (104~106)

1類は後期末または晚期初頭の土器である。104~106は口縁部の破片である。104は口縁部を肥厚させ、1条の突帯を巡らす。端部は外側に折曲げられ、端部と突帯に突起を有している。105・106は口縁に2条の沈線を施し縦位の突起を付け、沈線下に刻みを入れている。東三河地域には後期末の段階では伊川津式が設定されているが、104~106の土器は伊川津式の範疇には含まれない。中ノ沢式により類似しているが在地の土器と思われる。三重県の森添遺跡（注4）でまとまって出土している。

2類 (107~119)

2類は晚期前葉の土器であり、遠江の蜆塚B式（注5）に対比されるものである。107~109は口縁部に2~3条の沈線（108・109）を横位に施し、刻みを入れるもの（107）である。110~113は櫛描波状文が施されている。114は口縁部破片で、口縁端部付近を横位に強くナデしている。115~119は粗製深鉢の破片であり、纖維束のような工具で条痕調整がされている。このう

ち115は口縁部破片であり、口縁はゆるやかに内湾し、端部に面をもっている。これら2類の土器の色調は全体的に赤味が強く、それが晚期前葉の特徴とされている。ところが東三河地域では櫛描波状文の一群のみ茶褐色のものが多く赤味の強いものは殆どない。この点は遠江と若干趣を異にするところである。

3類 (120)

3類は西三河の寺津式に比定されるものである。120はくの字形の口縁部破片と思われ、R Lの縄文地に半截竹管による横位の半隆起線文が3条施されている。近年西三河地域及び知多において寺津下層式と寺津式の間に下別所式土器（注6）が提唱されており、もしかすると下別所式土器に当たるかも知れない。

4類 (121)

4類は静岡県を中心に分布する清水天王山式に比定されるものである。121は台付鉢の脚部接続部である。鉢部と脚部の接続部には幅2cmほどの刺突を加え、脚部にはスカシを入れる。接続部及びスカシ周辺には連続して刻みをつけ加飾している。台付鉢は東三河地域では稻荷山式の段階のみに認められ、胎土からみても搬入品であると考えられる。

第V群土器（第13図122～145、第14図146～172）

第V群は晩期中葉～末葉（弥生早・前期）の土器であり、5類に細分した。

1類 (122～125)

1類は晩期中・後葉の刻目文土器である。122～125は口縁部破片であり、アナグラ属の二枚貝によって口縁部には横位の条痕が、口唇部には刻目文が施されている。123・124は口縁端部に面取りがなされ、122・125は端部が外側に若干曲げられている。刻目文土器は稻荷山式土器～五貫森式まで存在し、すべてを西之山式とするのは困難である。

2類 (126～144)

2類は突帶文土器を一括した。126～137は突帶の付いた口縁部の破片である。126は貝による刻み、127・128は範による刻みであり、136・137は低突帶である。口縁部に貝条痕（126・130・134）のあるものや内面に沈線（134～136）のあるものもみられる。138～142は肩部破片であり、口縁部は貝条痕で胴部は削痕のもの（138・139）、口縁部はナデで胴部は削痕のもの（140・142）、胴部はミガキのもの（141）がみられる。143・144は逆「く」の字状浅鉢の口縁部破片であり、端部が外反するもの（143）と端部を外側に肥厚させ口唇内面と肩部に沈線を施すものがみられる。これらのうち126は口唇の面取り及び突帶の細さから西之山式に、136・137は低突帶であることから馬見塚式に、その他の突帶及び浅鉢については五貫森式である可能性が指摘できる。最近1・2類の土器については東三河において資料が増加し、次第に内容が明きらか（注7）になってきている。

3類 (145)

3類は浮線網状文土器である。145は口縁部の破片であり、口縁に粘土紐を貼付け棒状工具で幅1cm程に押引くレンズ状付帯文を有し、口唇内面には浅い沈線を有す。冰式より2段階古

い女鳥羽川段階（注8）に比定できよう。

4類（146～172）

4類はいわゆる条痕文土器を一括した。遠賀川式土器の出土したSD-1下層中に含まれている最も新しい時期の遺物が条痕文土器であるため、区別し記述する。146～152はSD-1下層より出土したものである。146は深鉢の口縁部破片であり、端部は丸い。器面には半截竹管による单斜条痕が施されている。147・148も半截竹管による条痕が施されている。149～152は棒束による条痕である。これらの土器は半截竹管・棒束の施文具及び条痕が单斜である点より樺王式に比定される。但し、146は樺王式の典型である口唇面の指によるナデ窪みを有さず、器形も砲弾形よりはやや口縁部が開くような差異が認められる。現段階では樺王式のバリエーションの一つと考えておこう。SD-1下層の条痕文土器には水神平式は認められず、樺王式が最も新しい土器である。

153～172はSD-1以外出土の条痕文土器ある。153は深鉢の口縁部破片であり、口唇面を指によってナデ窪め、器面には半截竹管による条痕が施されている。154も深鉢の口縁部破片で、外反する口縁部の内外面に棒束による条痕が施してある。155・156は壺の口縁部破片であり、貼付けられた突帯を指頭で押圧するもの（155）と押圧後に膨らんだ部分を摘むもの（156）である。157は櫛による波状文が施されている。158～165は半截竹管、166～172は棒束によって条痕が施されている。

第VI群土器（第15図173～213、第16図214～246、第17図247～279）

第VI群は各型式にあてはめるのが困難な無文・削痕文・縄文等の施されたもの及び土器底部であり、便宜上7類に細分した。

1類（173～213）

1類は無文土器の口縁部である。無文土器は大半が後期のものと思われるが、晚期のものも混ざっている。口縁部の形態には様々なものが認められ、波状口縁のもの（173・174）、強く内屈するもの（175～180）、内湾するもの（181・182）、強く外反するもの（183～186）がある。また口縁端部が外側に張り出すもの（187～190）、肥厚するもの（191～197）、面を持つもの（198～201）、丸いもの（202～210）がみられる。また口縁端部近くの内外面に沈線をもつものの（211～213）もある。

2類（214～246）

2類は器面に削痕の施されたもので、晚期中・後葉のものである。214～223は口縁部の破片であり、端部が比較的平面なもの（214～218）、丸いもの（219～221）、外に膨らむもの（222）、先端が細いもの（223）がみられる。224～246は胴部破片であり、削痕調整されている。

3類（247～256）

3類は縄文の施されているものである。247は口縁部の破片であり、やや端部を肥厚している。施文されている縄文はRL（247～253）、LR（254～256）である。

4類（257・258）

4類は器面にナデ調整がされているものである。257・258は横位にナデられており、器面の凹凸が激しい。この地域では稻荷山式の段階で粘土紐の接合痕が目立ち、器面の凹凸が激しい例がみられる。257・258は稻荷山式の可能性もあるが断言はできない。

5類 (259・260)

5類は擬縄文の施されたものである。259・260は巻貝の回転による擬縄文が施されている。後期中葉～晚期初頭のものであろう。

6類 (261)

6類は隆帯のある土器である。261は幅1.5cmの貼付隆帯があり、中期の可能性もある。

7類 (262～279)

7類は土器の底部を一括した。262～267は後期の土器の底部と思われ、底部からの立ち上がりが急であり、器面が磨かれたもの(262～264・266)もある。268～270は晚期のものと思われ、網代痕のみられるもの(268)や削痕調整されたもの(269・270)がみられている。271～279は時期不明である。

注1 増子康真 「東海地方西部の縄文中期末葉土器型式一山の神式土器の細別一」 『古代人』38 1981

注2 山下勝年 「第4章第1節4. 仮称林ノ峰I～IV式の提唱」 『林ノ峰貝塚』 南知多町教育委員会 1983

注3 北白川上層式と堀之内式を破片資料で明確に分離するのは困難であるが、74の粗製深鉢は北白川上層II式に比定できるため別類にした。

北山村教育委員会 『和歌山県北山村下尾井遺跡発掘調査概報』 1978

注4 度会町遺跡調査会 『森添遺跡発掘調査概報II』 1988

注5 市杵嶋神社貝塚の報告時には、東三河は遠江と別型式に分離できる可能性を示したが、今だ不明瞭な部分も多いため蜆塚B式として扱うこととした。

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第13集 市杵嶋神社遺跡(I)』

注6 山下勝年 「下別所遺跡採集の縄文土器」 『古代人』39 1982

増子康真 「刈谷市本刈谷貝塚報告の縄文土器の分析一下別所式土器の検討一」 『古代人』49 1988

注7 近年、この地域において突帶文土器についての研究会が開催されている。その結果馬見塚式段階では尾張地域と様相が異なり無刻目の低突帶が中心であり、また無突帶の土器が突帶文の終末まで存続することが確認された。

愛知考古学談話会・三河考古刊行会 『突帶文土器の終末』 1990

愛知考古学談話会・三河考古刊行会 『突帶文土器の始まり』 1991

注8 浮線網状文土器について1991年長野県においてシンポジウムが開催され、女鳥羽川段階は「式」に相当するとして女鳥羽川式が提唱されている。中沢道彦 「中部高地」 『第一回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稻作の受容』 1991



SD-I上層(5~7・13・14・16・20~24・27・30・32・35・36)、SD-I下層(1~4・9・11・12・15・17~19・25・26・28・31・33・34・38)、表土(10・29・37)
第10図 縄文土器実測図-1 (1/3)



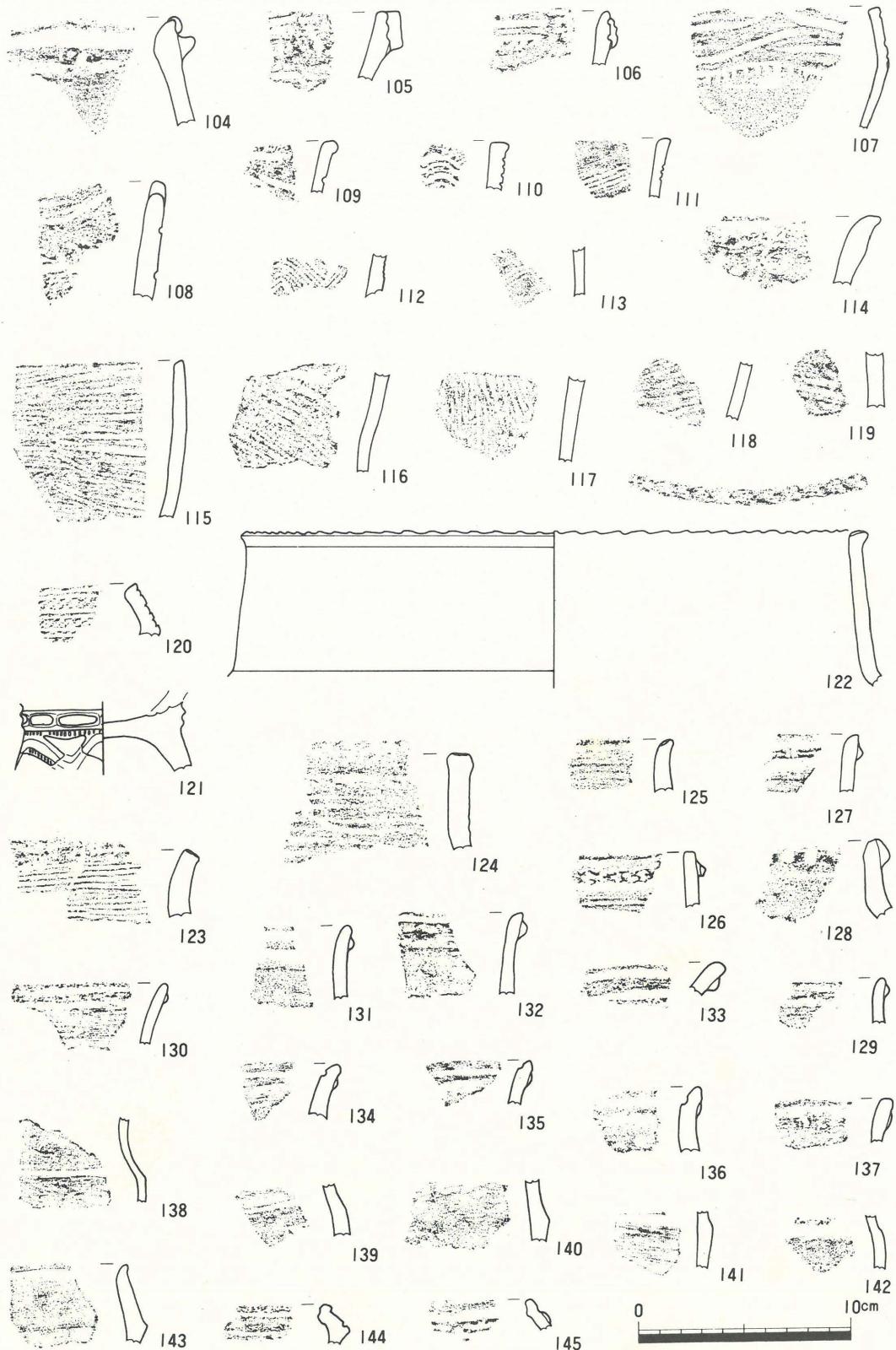
SD-1上層(43~45・47・51・58・60・62・68・69・72・74)、SD-1下層(39~42・44・46・48・49・52~57・59・61・63~67・70・71・73)、表土(50)

第11図 繩文土器実測図－2 (1/3)



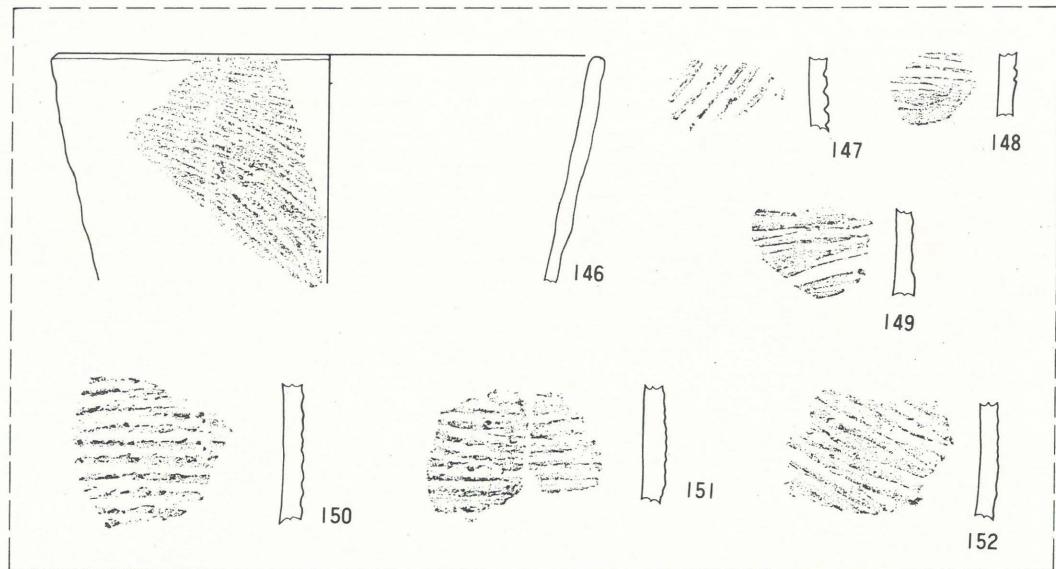
SD-I上層(75・76・78・81~84・87・89・93・96・99)、SD-I下層(77・79・80・85・86・88・90~92・95・97・98・100~103)、表土(94)

第12図 繩文土器実測図-3 (1/3)

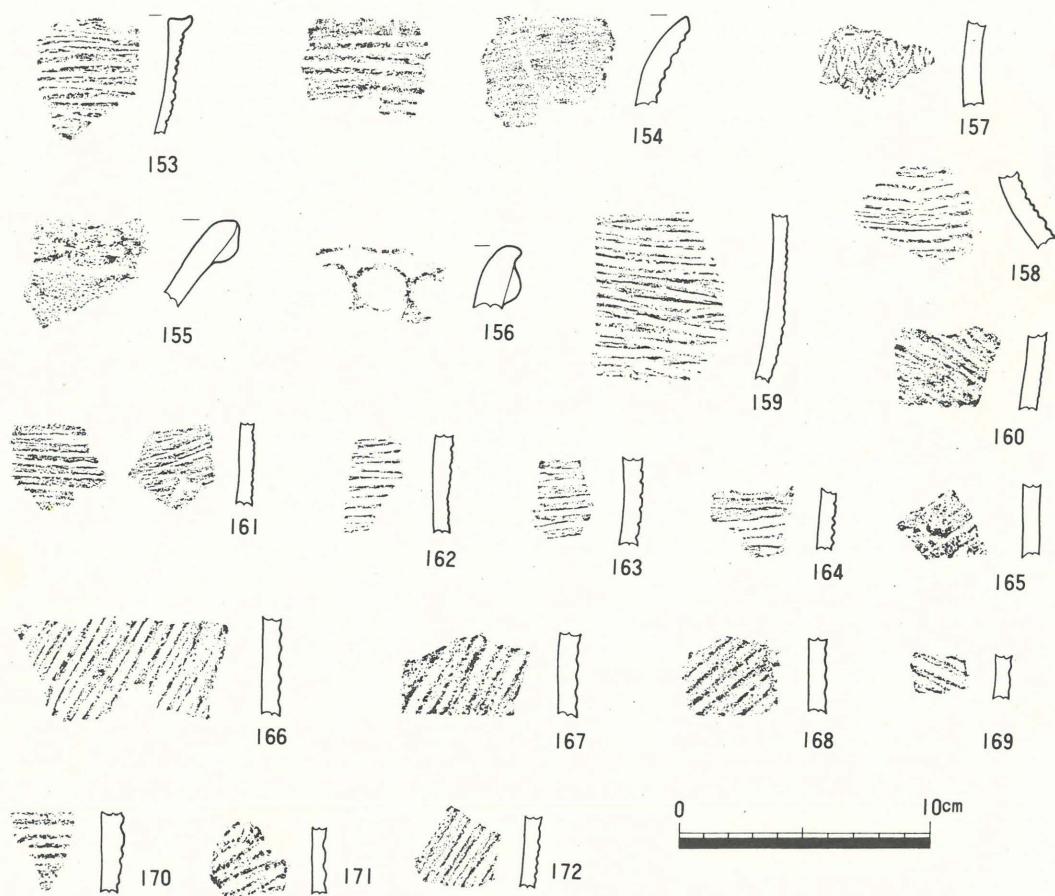


SD-1上層(104・105・107・109~112・114・116・125・128・132・133・135・137・141・142・144)
SD-1下層(106・108・113・115・117~123・126・127・129~131・134・136・138~140・143)、表土(124・145)

第13図 繩文土器実測図-4 (1/3)



※ SD-I 下層出土条痕文土器



SD-I 上層(153・154・156~166・168・170・172)、SD-I 下層(146~152)、表土(155・162・167・169・171)

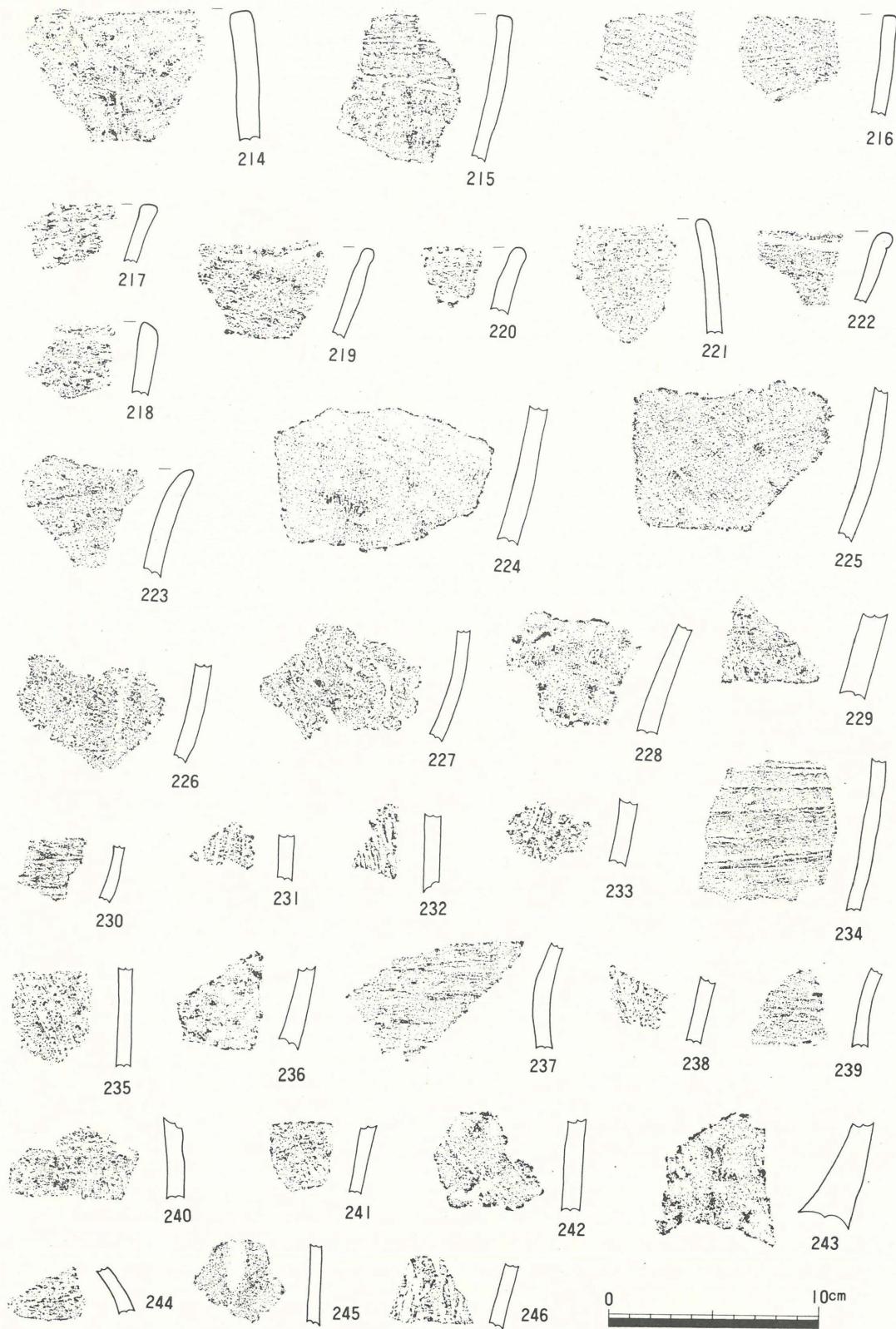
第14図 繩文土器実測図-5 (1/3)



SD-I上層(175・176・178・181・183・185・192・193・195・196・211・213)

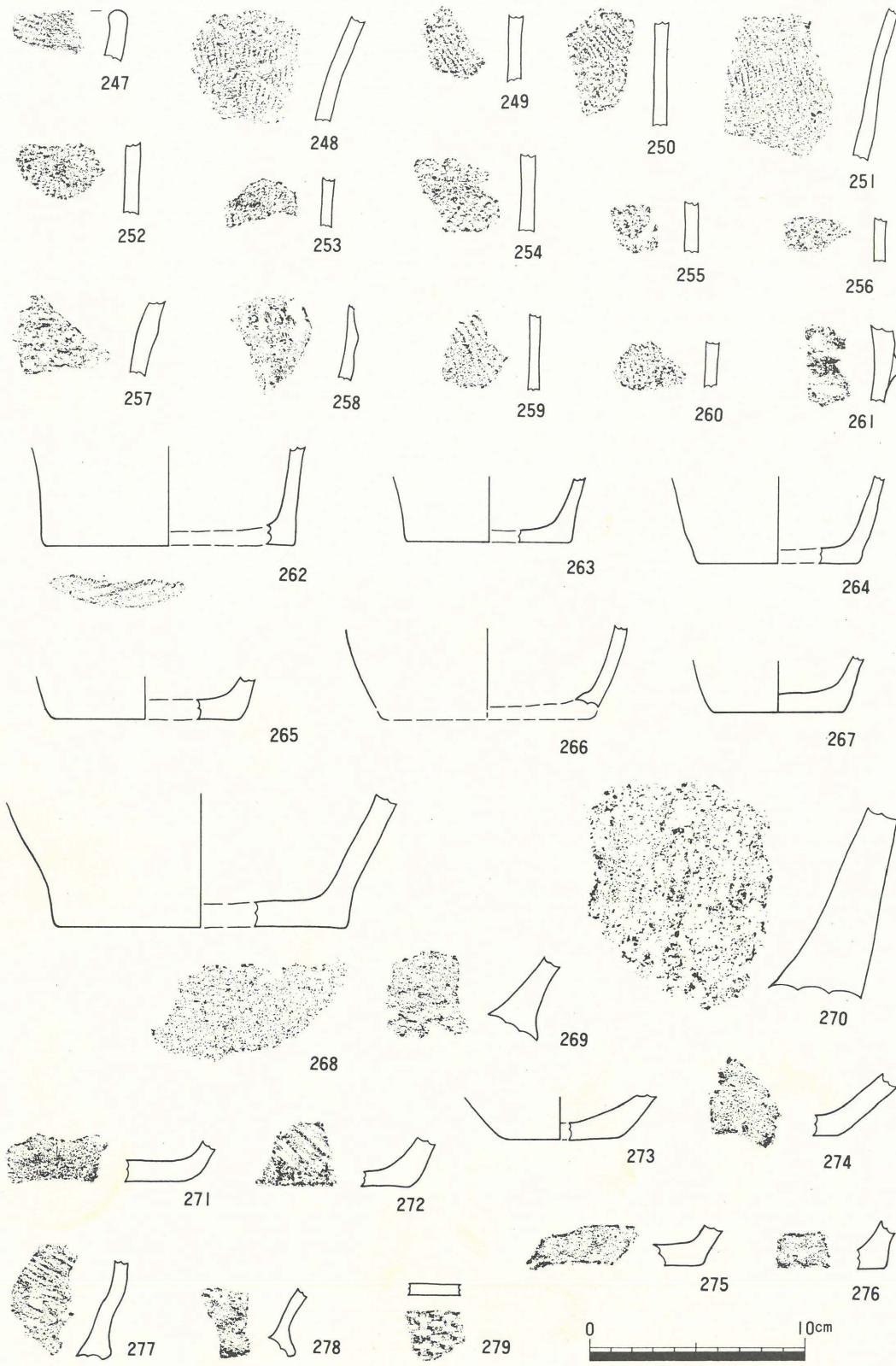
SD-I下層(173・174・177・179・180・182・184・186～191・194・197～207・209・210・212)、表土(208)

第15図 繩文土器実測図-6 (1/3)



SD-I上層(215・224・228・232・236・242)、SD-I下層(214・216~223・225~227・229~231・233~235・237・238・240・241・243・244・246)
表土(239~245)

第16図 繩文土器実測図-7 (1/3)



SD-I上層(247~250・252~255・257・259・261・267~269・277)、SD-I下層(251・258・262~266・270~276・278・279)
表土(256・260)

第17図 繩文土器実測図-8 (1/3)

2. 土製品（第18図）

発掘調査及び表採による土製品は、管状土製品、耳飾、土器片錐、土偶形容器の4点が出土している。以下種類ごとに述べる。

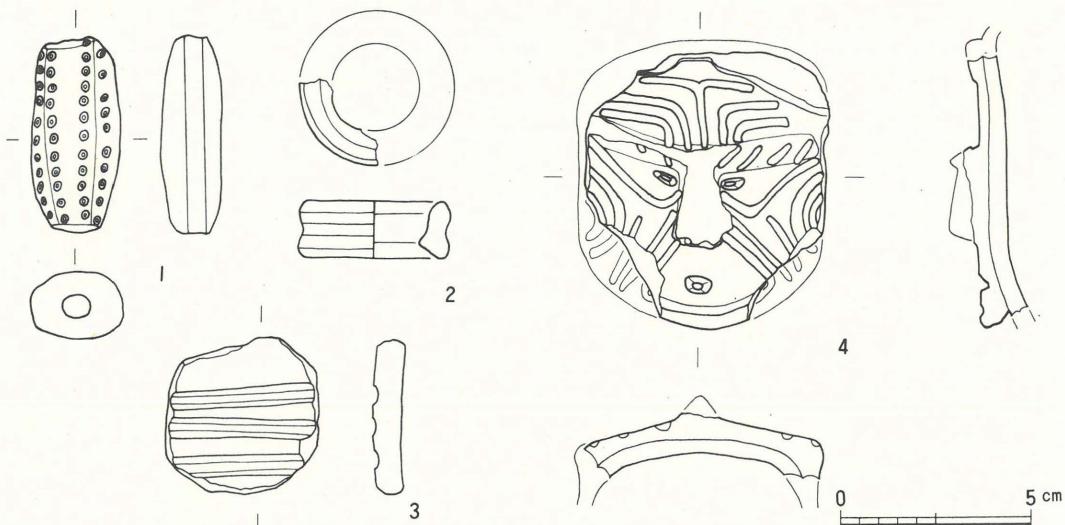
管状土製品（第18図1）

1はSD-1下層より出土した完形品で、断面は橢円形に近い管状の形態をしている。長さは5.3cm、断面の長径2.5cm、短径1.8cm、重さ23gを測る。直径6mmの孔を真直ぐに通しているが、同径ではなく端部の孔は偏平になっている。これは棒に粘土を巻き付け整形し、後から棒を抜く段階になって両端の孔が若干崩れたと考える。表面に施された模様は3mm大の竹管による刺突文が施されている。刺突文は10~12個単位で列状をなすものである。時期は竹管による刺突という施文方法より晩期前葉の可能性が考えられるが断定はできない。

1のようなものは有孔球状土製品（注1）と呼ばれているものに類似するが、断面が円形でないため有孔球状土製品とは区別する必要があり、管状土製品として扱った。性格についても装身具説、紡錘車説、土錐説と様々な見解があるが、断面が円形でない点より紡錘車とは思えず、白石遺跡には土器片錐・石錐が出土しており、また加飾がある点より土錐とも考えにくい。刺突による全面的な装飾から装身具としての可能性が高いのではないだろうか。

土製耳飾（第18図2）

2は土製耳飾の破片であり、約1/4の部分が出土している。環状で比較的厚手に作られている。断面形は内外面で僅かに窪み、内面に微かな抉りを入れ、最も厚い所で9mmである。規模は最大径約4cm、耳朶孔に着装される部分の直径は約3.8cm、内孔径は2.3cmを測るものと推



第18図 土製品実測図-1 (1/2)

定される。設楽博巳氏の分類（注2）に従えばII2A1類に類似し、後期末～晩期前葉の時期である可能性が指摘される。出土層位はSD-1下層である。

土器片錐（第18図3）

3は、土器片錐であり、土器片の周囲を細かく碎き整形し、円形に近い隅丸方形をなす。最大幅4.6cm、最小幅4cm、厚さ8mm、重さ17gを測る。表面には3条の沈線が施されており、堀之内I式の土器を転用したものである。出土層位はSD-1下層である。

土偶形容器（第18図4）

4は調査区外から表採（注3）された土偶形容器の顔面部破片であり、頭部・頬部・鼻部の一部を欠いている。顔面部は残存長7.3cm、残存幅6.4cmを測り、本来は円形に近い隅丸長方形を呈していたものと思われる。各部をみると、目は棒状工具を押引いて入れられ、いわゆる吊り目になっている。長さは7mm程である。眉と鼻はT字状に貼付けられた隆帯で表現されているが、鼻頭部分が欠損している。眉部は長さ8mmの沈線を4単位で斜位に施し表現している。鼻部は最大幅1.5cmで、鼻孔は棒状工具の刺突によって示されている。口は目と同様に棒状工具を刺突し周囲を広げて作り、いわゆるおちょぼ口である。

顔面部に施された文様は、額・目の周囲・頬・口の周囲に幅の細い沈線により、顔面中央を境にほぼ左右対称に施されている。額にはT字状沈線の左右に鍵状沈線を2条施している。目の周囲には、目の下から眉先端にかけ吊り目に沿って沈線が入れられている。頬には2重の弧状沈線が、口には周囲に1条の沈線が巡らされている。頬と口の間には2条の斜位の沈線が施されている。

さて帰属時期であるが、表採品であるため土器との共伴関係では追えない。他資料との比較で考えると矢作川河床採集の土偶形容器（注4）と形態、文様構成等類似点が多い。しかし、白石例は矢作川河床例に比べ沈線が細く、また顔面部内を沈線で補填する量が少なく古い様相を示している。矢作川河床例は水神平～岩滑式、中期前葉に位置づけられている。しかし、白石遺跡からは波状文の段階の水神平式は出土しているが、市杵鳴式（注5）は現在まで確認されていない。これらの事実を考慮すると、本資料の帰属時期は水神平式に求めるのが妥当であろう。

注1 小島俊彰 「有孔球状土製品」 『縄文文化の研究』第9巻 1983

注2 設楽博巳 「土製耳飾」 『縄文文化の研究』第9巻 1983

注3 賢元洋 「白石遺跡出土の人面土器」 『古代人』32 1976

注4 岡本茂史 「矢作川河床採集の土偶形容器」 『三河考古』第2号

注5 東三河の畿内第II様式併行期は壺の口縁が受口にならず、西三河の岩滑式と異となるため市杵鳴式と呼称して区別している。

豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第13集 市杵鳴神社遺跡（I）』
1991年

3. 弥生土器 (第19~21図)

弥生土器のうち遺構から出土したものは S D - 1 のみであり、その他は包含層からの出土である。そこで、まず S D - 1 出土土器に付いての説明を行い、次に包含層出土土器に付いて説明する。第19~21図 1 ~ 5 ・ 7 ~ 13 は S D - 1 下層、6 ・ 14 ~ 20 は S B - 1 によって乱された S D - 1 上層、及び包含層出土土器である。

S D - 1 下層出土の土器は縄文土器と型式認定のできない小破片を除いて個体別分類を行った結果、少なくとも壺 8 点、甕 5 点、鉢 1 点、蓋 1 点の合計 15 点が確認でき、すべて遠賀川様式のものである。このうち図示したものは壺 5 点、甕 5 点、鉢 1 点、蓋 1 点の合計 12 点である。遠賀川様式の土器に時期的に並行する条痕紋土器は、すべて縄文土器として扱っている。

1 は小型壺であり、頸部から口縁部の部分である。法量は、口径 8.4cm、頸部径 5.5cm、残存高 8.4cm、器厚 0.5cm である。頸部には削出突帯があり、突帯の上下を縦方向に削った痕跡が残っている。口縁端部は面取りがしてある。

器面調整は、外面は横方向のヘラ磨き、内面はナデであり、口縁端部から 3cm 程までは横方向のヘラ磨きである。類例は三重県納所遺跡出土のもの（注 1）があるが、愛知県には少ないようである。

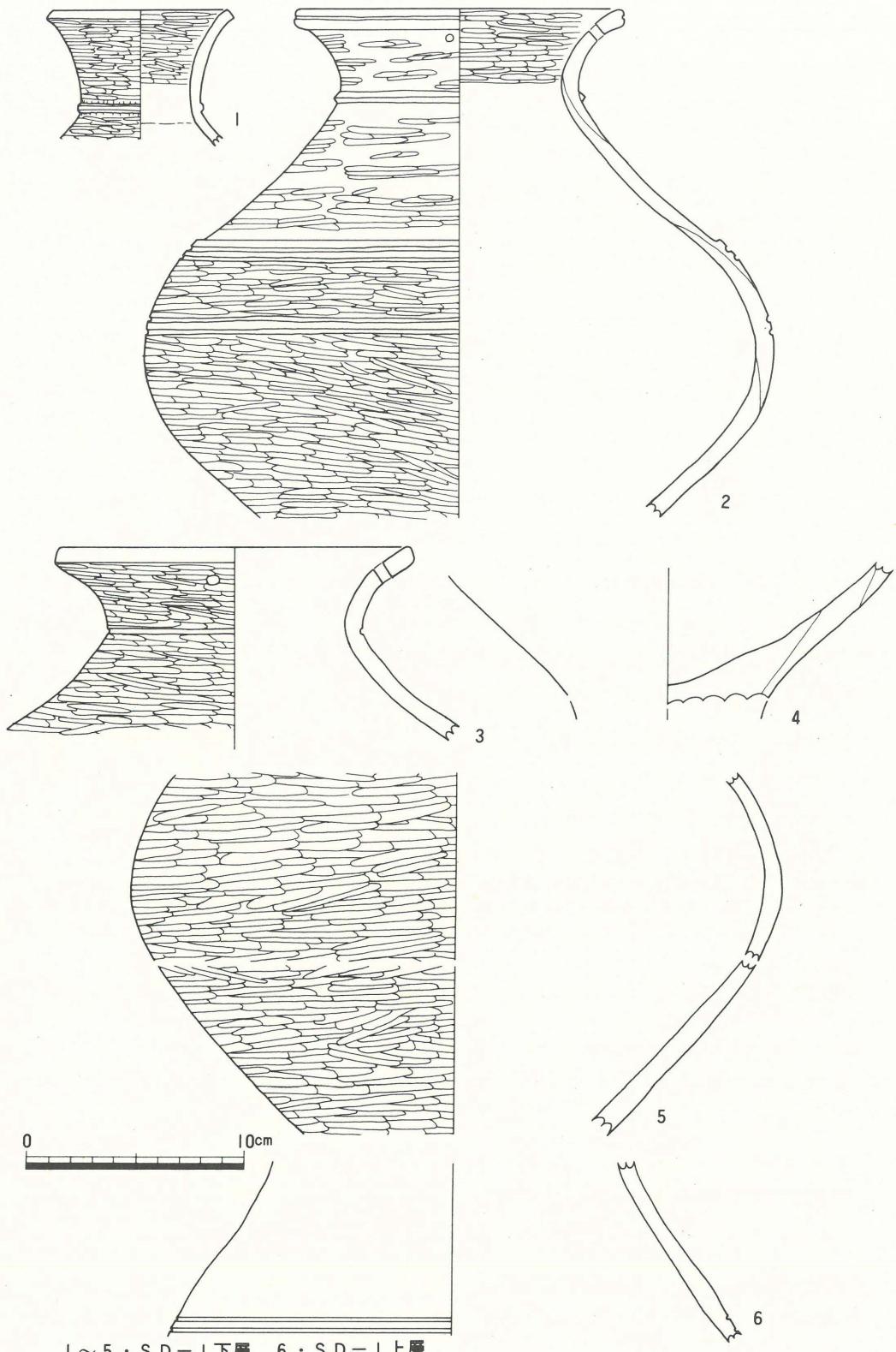
胎土は 1 ~ 2mm の砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。外面の色調は明灰褐色、内面は灰褐色である。

2 は単純口縁の壺である。法量は口径 15.4cm、頸部径 11.0cm、胴部最大径 28.2cm、残存高 23.5cm、器厚 0.8cm である。口縁部は短く、余り開かない。口縁端部はやや丸みを帯び膨らんで 1 条の沈線が施されている。端部から 1.5cm 程下に直径 0.4cm 程の小さな穴が開けられている。この穴は一個一対になり、蓋の穴と対応するものと考えられる。頸部には幅 5mm、高さ 3mm の断面三角形の細い貼付突帯がある。頸部から胴部上半はわずかに外反し、肩部で段になっている。この段は粘土帶の接合部にあたり、段の厚さは胴部側で 8mm、頸部側で 6mm あり、高さ 2mm の段となっている。また、胴部側には 2 条の沈線がある。

外面の器面調整は、段より下の胴部は横方向のヘラ磨き、口縁部から段まではナデのち横方向のヘラ磨きであるが、胴部より荒い磨きである。内面では口縁端部から頸部まではナデのち横方向のヘラ磨き、これより下はナデである。粘土帶の接合は外傾接合である。

胎土は 1 ~ 2mm の砂粒が含まれる。焼成は良好である。色調は外面が明灰褐色、内面は灰黒色の部分が多い。

3 は単純口縁の壺であり、口縁部から頸部の部分である。法量は口径 16.6cm、頸部径 11.8cm、残存高 9.0cm、器厚 0.8cm である。口縁部は短く余り開かず、端部はやや面をなしている。口縁端部から 1.5cm 程下に直径 0.6cm 程の小さな穴が口縁部内面から外面に向かって開けられている。この穴は 2 の壺と同様に一個一対になり、蓋の穴と対応するものと考えられる。頸部には浅い



第19図 弥生土器実測図-1 (1/3)

ヘラ描き沈線が1本施されている。

外面の器面調整は横方向のヘラ磨きである。口縁端部と内面はナデ調整である。

胎土は砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。色調は明灰褐色である。

4は壺の底部である。底部は剝離している。法量は残存高5.7cm、器厚0.9cmである。粘土帶の接合は外傾接合である。

器面調整は内・外面ともかなり荒れているが、外面はヘラ磨き、内面はナデ調整の痕跡を残している。

胎土は1～2mmの砂粒が多く、石英粒が目立つ。焼成は良好である。色調は明灰褐色である。

5は壺の胴部である。法量は胴部径30.4cm、残存高16.6cm、器厚0.8cmである。器形は1とほぼ同じと考えられる。また、観察できる良好な部分が少ないが、粘土帶の接合は外傾接合である可能性が高い。

外面の器面調整は横方向のヘラ磨き、内面は摩滅してはっきりしない。

胎土は1～3mm大の砂粒が多く、石英が目立つ。焼成は良好である。色調は灰褐色でやや白い。

6は壺の胴部上半である。頸部がかなり太くなるところから広口壺と考えられる。法量は残存胴部径26.6cm、残存高8.0cm、器厚0.8cmである。肩部には細い2条のヘラ描き沈線がある。器面調整は荒れているため、内・外面とも不明である。

胎土は1～3mm大の砂粒が多く、石英が目立つ。焼成はやや不良である。色調は淡灰褐色でやや白い。

7は鉢である。法量は残存口径27.4cm、頸部径26.7cm、残存高15.1cm、器厚0.5cmである。口縁部は欠損しているが、外傾しもう少し伸びるものと思われる。器形は2の壺の胴部下半で製作をやめ、口縁部を受けたものであり、壺の製作行程との関連性がある。

器面調整は内・外面とも丁寧に横方向のヘラ磨きで仕上げられている。また、外面の底部付近には縦方向のナデ調整の跡が残っており、この後ヘラ磨きが施されたものと考えられる。底部はやや上げ底になっており、周囲は摩滅している。また、上げ底内部には敷物の痕跡が残っているが、編物ではないようである。

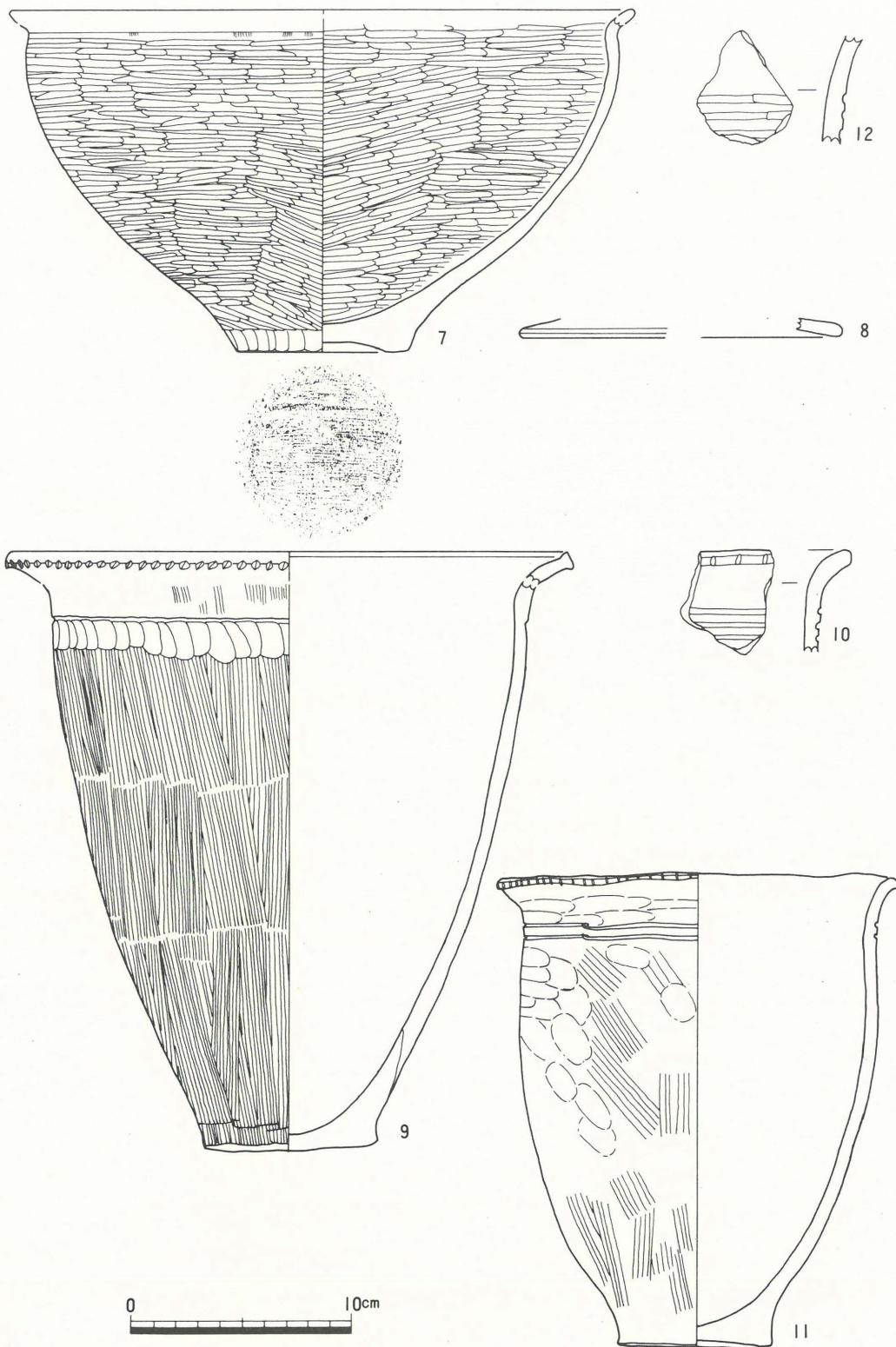
胎土は1～3mm大の砂粒が多く、雲母は少ない。焼成は良好で、色調は外面は明茶褐色、内面は灰褐色で黒色が強い部分がある。

鉢は壺と製作行程が共通であり、底部のみの破片ではどちらであるのかは判別が困難な場合がある。白石遺跡出土土器の所見からは、器壁が壺8mmに対して、鉢5mmと薄く、両者の違いは内面のヘラ磨き調整の有無と共に器壁の薄さがあげられる。

8は小破片で口径が不明であるが蓋と考えられるものである。法量は口径が13～17cm程度と考えられる。器厚は0.6cmである。器面調整は内外面ともナデである。

胎土は1～2mm大の砂粒が多く、石英が目立つ。焼成は良好である。色調は灰褐色でやや白い。

9は甕である。法量は口径26cm、頸部径21.6cm、残存高27.3cm、底径8.0cm、器厚0.7cmであ



7~12・SD-1下層

第20図 弥生土器実測図-2 (1/3)

る。器形は胴部が張らず、口縁部はいわゆる如意形口縁である。口縁端部は強く撫でられ、端部の両端がふくらんで下端に右上がりの刻みが入っている。頸部には器面の上から下、右から左に向かってヘラ状工具によって押さえられた段がある。この段はほぼ直線状になっているところから、まず直線をひいて、これを目安にヘラ状工具で付けられたものと考えられる。

外面の器面調整は下から上、右から左に向かってタテハケ調整がほぼ三段されており、この後ヘラ状工具により段が作られている。段の上は横方向のナデ調整がされているが、一部にタテハケの痕跡が残っている。内面の器面調整は横方向のナデである。粘土帯の接合は外傾接合である。

胎土は1～3mmの砂粒がきわめて多く含まれる。石英の大きな粒が目立つが、金雲母は含まれない。焼成は良好である。色調は黒褐色が主体であり、赤黒色に近い部分もある。

10はいわゆる如意形口縁の甕である。小破片であるため法量は推定できないが口縁部の器厚は0.5cmである。口縁端部はわずかに丸くなってしまっており、下端に右上がりの刻みがある。頸部には三条のヘラによる沈線がある。器面調整は内・外面ともナデである。

胎土は1～2mmの砂粒がきわめて多く含まれる。石英の大きな粒が多く、金雲母の大きな粒もわずかにみられる。焼成は良好である。色調は明灰褐色である。

11は甕である。残存率は約90%であり、最も残りのよい個体である。法量は口径18.6cm、頸部径16.3cm、器高21.5cm、底部径7.1cm、器厚0.6cmである。口縁部は外反し、口縁端部は丸く、やや波うって整っていない。胴部もややふくらんでおり、器面にはわずかに凹凸が見られ、整形は余り丁寧ではない。頸部には半截竹管による二条の沈線が器面に対して右から左に施されている。

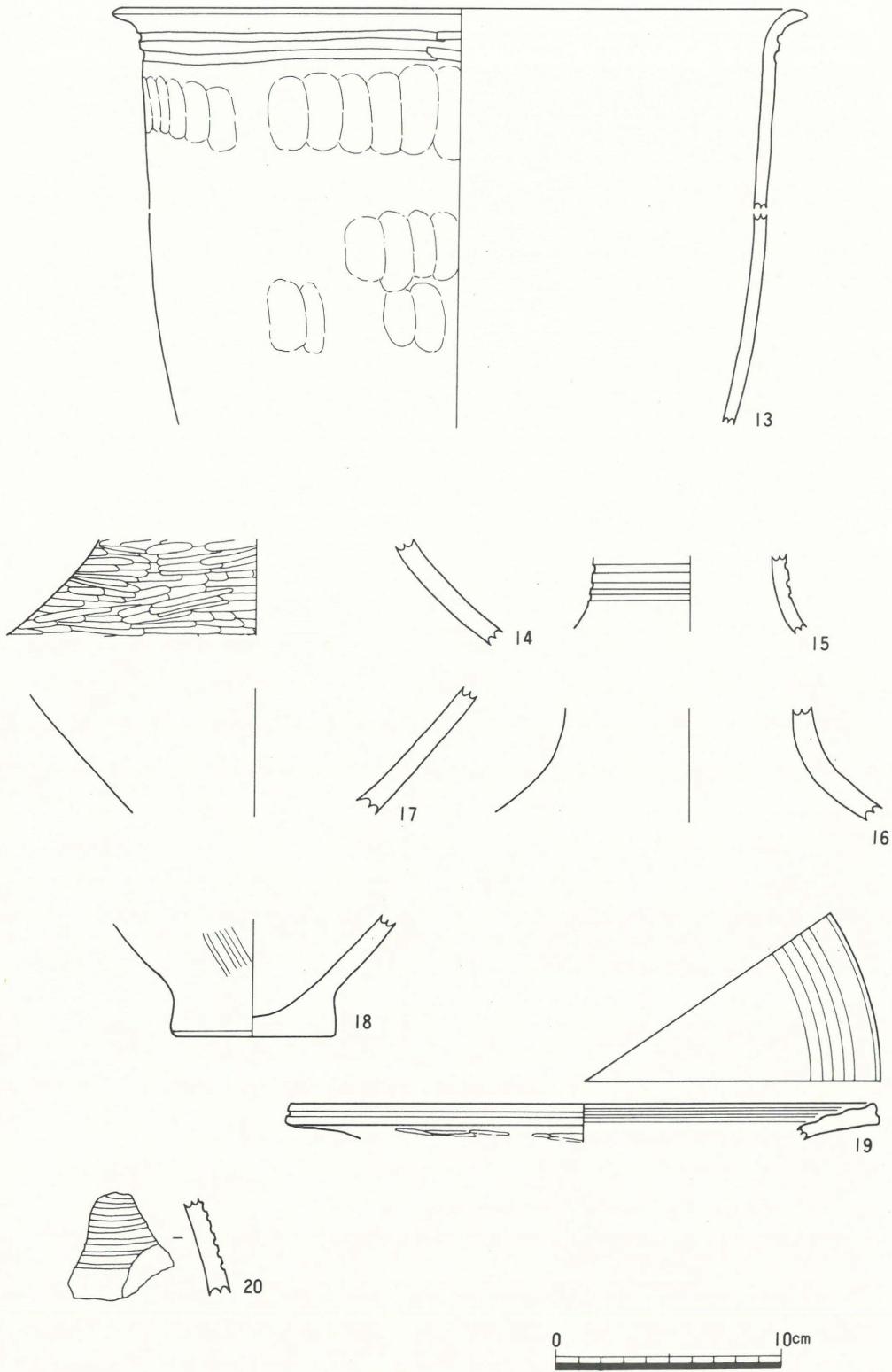
外面の器面調整は荒い縦方向のハケののちナデ調整が行われている。ハケ調整の痕跡は底部付近では顕著であるが胴部ではわずかに痕跡をとどめるのみで全体にナデ調整が目立っている。沈線より上の頸部は横方向のナデがされている。内面はナデ調整である。

胎土は1～3mmの砂粒がきわめて多く含まれる。石英の大きな粒が目立つが、金雲母は含まれない。焼成は良好である。色調は灰茶褐色を基調とし、赤褐色と黒褐色の部分が混じる。

12は甕の頸部付近の破片である。小破片であるため法量は推定できないが口縁部の器厚は0.6cmである。太いヘラ状工具（半截竹管の可能性がある）による沈線が三条ある。器面調整は表面が荒れているためはっきりしないが、ナデ調整と考えられる。

胎土は1～2mmの砂粒をやや含むが、他の甕と比較してかなり少ない。石英粒と金雲母が含まれている。焼成は良好である。色調は灰白褐色である。

13は甕である。口縁部は端部近くで下端がつまみ出されるようにしてわずかに外反している。胴部は接合しないが深鉢形に近い形になると考えられる。法量は口径31cm、頸部径28.8cm、残存高18.5cm、器厚0.6cmである。頸部には二条の沈線が器面に対して右から左に施されている。沈線は幅広で浅く、間隔は余り揃っていないが、端部はほぼ同じ所にあることから、柔らかく平たい棒状の工具を二本束ねて使用したものと考えられる。あるいは12の甕と同じ工具であるかもしれない。



13・SD-I下層 14~20・SD-I上層・包含層

第21図 弥生土器実測図-3 (1/3)

外面の器面調整はナデであるが、縦3.5cm、横2cm程の指押えによる浅いくぼみが器面全体に顕著であり、整形の後十分に器面調整がされていないようである。内面調整はナデである。

胎土は1～2mmの砂粒をやや含むが、他の甕と比較してかなり少ない。石英粒とともに金雲母の大きな粒が同程度含まれており、他の甕と比較して金雲母が多いことが特徴である。焼成は良好である。色調は灰褐色を基調として、赤褐色の部分もわずかにみられる。

14は壺の胴上部の破片であり、口径等は不明であるが、器厚は0.8cmである。外面の器面調整は横方向のヘラ磨き、内面はナデである。胎土は1～2mmの砂粒を多く含む。石英粒とともに金雲母の大きな粒が同程度含まれている。焼成は良好である。色調は外面が淡赤褐色、内面が灰褐色である。

15は壺の頸部の破片である。これまでの壺より頸がやや伸びる形態をしている。法量は頸部径8.7cmであるが他は不明である。頸部にはヘラ描沈線が三条ある。

外面の器面調整はヘラ磨き、内面はナデである。胎土は1～3mmの砂粒を含む。石英の大粒が目立ち、金雲母の小粒が多く含まれている。焼成は良好である。色調は明褐色である。

16は壺の肩部の破片である。頸部が伸び肩部で屈曲した形態をしている。法量はくびれ部径が12cm、器厚が0.7cmである。器面調整は内・外面とも摩滅しているため不明である。胎土は1～3mmの砂粒を多く含む。石英の大粒が目立ち、金雲母の大粒がわずかに含まれている。焼成は不良である。色調は淡赤褐色でピンク色がかっている。

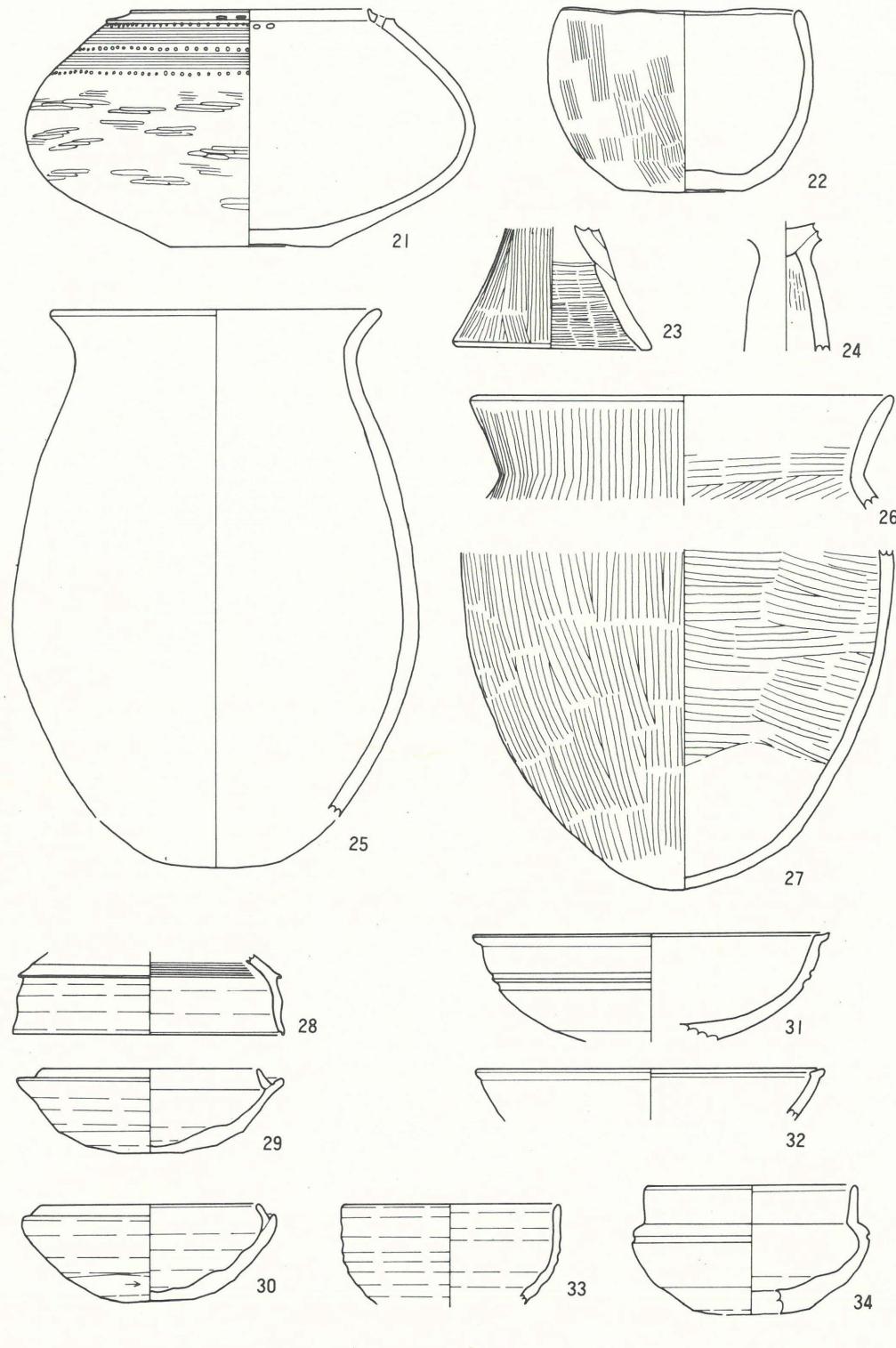
17は壺の胴下半部の破片である。口径等は不明であるが、器厚は0.8cmである。器面はかなり荒れているが、外面の器面調整は横方向のヘラ磨きと考えられる。内面は摩滅のため不明である。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み、石英の大粒が目立つ。焼成は良好である。色調は淡灰褐色であり、やや白い。

18は甕の底部である。法量は底部径7.4cm、残存高5.0cm、器厚0.6cmである。外面の器面調整はタテハケ、内面はナデである。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み、石英の大粒が目立つ。この他には1～2mmの赤褐色粒が含まれており、あるいはシャーモットであるかもしれない。焼成は良好、色調は明灰褐色である。

19は壺の口縁部である。口縁部が水平近くかなり開く形態をしている。口縁端部にはヘラ描沈線が一条あり、口縁部内面には太い棒状工具による凹線が現状で三条見られる。法量は口径26.6cm、残存高1.5cm、器厚0.9cmである。外面調整は横方向の箆磨きであり、内面はナデと考えられる。胎土は1～2mmの砂粒が含まれる。焼成は良好である。色調は明灰褐色である。

20は壺の胴部破片である。小破片であるため器形はよくわからないが、外面に現状で6条の箆描沈線がみられる。表面が摩滅しているため器面調整は不明である。胎土は1～2mmの砂粒がわずかに含まれる。焼成はやや不良である。色調は明灰褐色で、やや赤色を帯びている。

注1 伊藤久嗣他『納所遺跡』1980



21・22・25・27・32・S B - I 23・24・26・28~31・33・34・包含層

0 10cm

第22図 須恵器・土師器実測図-1 (1/3)

4. 土師器（第22図21～27）

土師器はSB-1出土（21・22・25・27）のものと包含層出土（23・24・26）のものである。この他にも包含層からは図示することができない程度の小破片が多く出土している。

SB-1から出土した遺物のうち、21はSB-1の流出した西壁側にやや離れて出土している。これだけが古い時期の無頸壺であり、本来SB-1に伴うものではないと考えられる。他の甕（25・27）と鉢（22）は北壁東側に接するように出土しており本来の位置を保っている可能性が高い（第9図）。

21は無頸壺である。器形は胴部の張ったソロバン玉形をしている。口縁部は先端がわずかに水平になってからやや上がり、受け部を作っている。この部分には二個一対の小穴があり、蓋を縛るためのものと考えられる。胴部上半には三列の列点文と二条の櫛描文が交互に施され、外面全体に赤色顔料の塗布がみられる。

法量は口径10.6cm、胴部最大径20cm、器高10.5cm、底径7.2cm、器厚0.5cmである。

外面の器面調整は、ヨコハケのち横方向のヘラ磨き、口縁部はナデ、内面はナデである。

胎土は1～2mmの砂粒が含まれ、石英粒が目立つ。焼成は良好である。色調は淡赤褐色である。

22は鉢である。器面や口縁部は凹凸が目立ち整っていない。法量は口径10.4cm、器高8.3cm、底径5.3cm、器厚0.7cmである。

外面の器面調整はタテハケ、口縁部および内面はナデである。胎土は1～2mmの砂粒と赤褐色粒がわずかに含まれ、3～4mmの大きな砂粒を所々に含む。焼成は良好である。色調は明赤褐色である。

23は台付甕の脚台である。接合部は欠損している。法量は残存高5.4cm、底径8.8cm、器厚0.8cmである。

外面の器面調整はタテハケ、内面は下部がヨコハケ、中部が荒いヨコハケ、上部がナデである。粘土帶の接合は外傾接合になっているが、台付甕の製作行程では脚台は上下逆に製作された後に甕体部が作られており、製作時には内傾接合であったと考えられる。

胎土は1～2mmの砂粒があり、石英と赤褐色粒が含まれる。焼成は良好である。色調は外面が明灰褐色、内面が灰褐色である。

24は高坏の脚部である。法量はクビレ部径2.2cm、残存高5.4cmである。器面調整は摩減しているためはっきりしないが、内面にはシボリ痕が見られる。胎土は砂粒を含まない。焼成はやや不良である。色調は明灰褐色である。

25は甕である。口縁部はくの字に外反し、胴部はやや長くなっている。底部は欠損しているが、わずかに平らになる平丸底と考えられる。

法量は口径14.9cm、頸部径12.6cm、胴部最大径18.3cm、器高22.5cm（復原高24.7cm）、器厚0.8cmである。

外面の器面調整は、口縁部が横方向のナデ、胴部が縦方向のナデ、内面は横方向のナデである。

胎土は2～3mmの砂粒が多く含まれ、石英粒が目立つ。焼成は良好である。色調は暗赤褐色である。

26は甕の口縁部破片である。口縁部はくの字に外反している。

法量は口径19cm、頸部径16.4cm、残存高5cm、器厚0.8cmである。

外面の器面調整は、縦方向のハケ、内面は口縁上部がナデ、口縁下部が横方向のハケ、頸部より下が斜め方向のハケである。

胎土は2～3mmの砂粒が多く含まれ、石英粒・赤褐色粒を含む。焼成は良好である。色調は暗赤褐色である。

27は甕の胴部である。やや長胴化しており、底部はほぼ丸底である。

法量は胴部最大径20cm、器高15cm、器厚0.6cmである。

外面の器面調整はタテハケ、底部外面はハケのちナデ、内面は横方向のハケ、底部内面はハケのちナデである。

胎土は2～3mmの砂粒が多く含まれ、石英粒・赤褐色粒が目立つ。焼成は良好である。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色である。

5. 須恵器（第22図28～34）

須恵器はSB-1出土のもの（32）と包含層出土のもの（28～31・33・34）である。

28は壺蓋である。天井部は欠損している部分が多いが、やや平坦になるものと考えられる。口縁端部内面には段がみられ、やや外反している。

天井部外面の5分の4程はヘラ削り、天井部内面はカキ目、他は内・外面ともロクロナデである。

法量は、口径12cm、残存高3.6cm、器厚0.4cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は青灰色である。

29は壺身である。受け部の立ち上がりは短く、内傾している。底部の3分の1ほどは時計廻りの回転ヘラ削りであるが、底部付近はヘラ起こしの痕跡がある。他は内・外面ともロクロナデである。

法量は、口径9.6cm、最大径12.2cm、器高3.8cm、器厚0.6cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は灰色である。

30は壺身である。受け部の立ち上がりは短く、内傾している。立ち上がり内面を強くヨコナデし、口縁端部もヨコナデにより丸くなっている。底部の3分の1ほどは時計廻りの回転ヘラ削りであるが、底部付近はヘラ起こしの痕跡がある。他は内・外面ともロクロナデである。

法量は、口径9.6cm、最大径11.4cm、器高4.4cm、胴径11.3cm、器厚0.7cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は灰色である。

31は無蓋高壺の壺部である。口縁部は面を持ち、外側に伸びている。体部中央には2本の沈線がある。内外面ともロクロナデであるが、底部付近には回転ヘラ削りの痕跡がみられる。

法量は、口径15.8cm、残存高4.7cm、器厚0.7cmである。焼成は良好、胎土は密、内面の色調は灰白色、外面は青灰色である。

32は無蓋高壺の壺部である。口縁部は面を持ち、外側に伸びている。法量は、口径15.2cm、残存高2.3cm、器厚0.5cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は灰白色である。

33は壺である。口縁端部は丸く、体部はロクロナデの凹凸が顯著である。内・外面の調整はロクロナデである。法量は、口径9.4cm、残存高4.5cm、器厚0.5cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は灰白色である。

34は短頸壺である。底部近くが欠損しているが、口縁端部は丸く、胴部には1条の沈線がある。底部の3分の1は回転ヘラ削りであるが、他は内・外面ともロクロナデである。

法量は、口径9.2cm、胴部径10.5cm、器高5.7cm、器厚0.5cmである。焼成は良好、胎土は密、色調は青灰色である。

6. 石器・石製品（第23～26図）

白石遺跡出土の石器は時期の判明する遺構に伴うものはSD-1出土のみである。しかし、SD-1では縄文後期から弥生前期までの土器が出土しており、ここから出土した石器がどの時期に所属するものであるかを限定することは困難である。そこで以下ではSD-1出土石器（2～12・14・33・35・36・40・42・44・51）を含め、一括して器種ごとに説明する。白石遺跡出土石器はこれまでも非常に多くの採集資料が示されている（注3）ので、各器種の詳しい説明は「第6章 1. 調査以前に採集された資料」で行う。なお、個々の法量等は第1・2表に示してある。

石鏃（第23図1～11、13～24、第24図25～32）

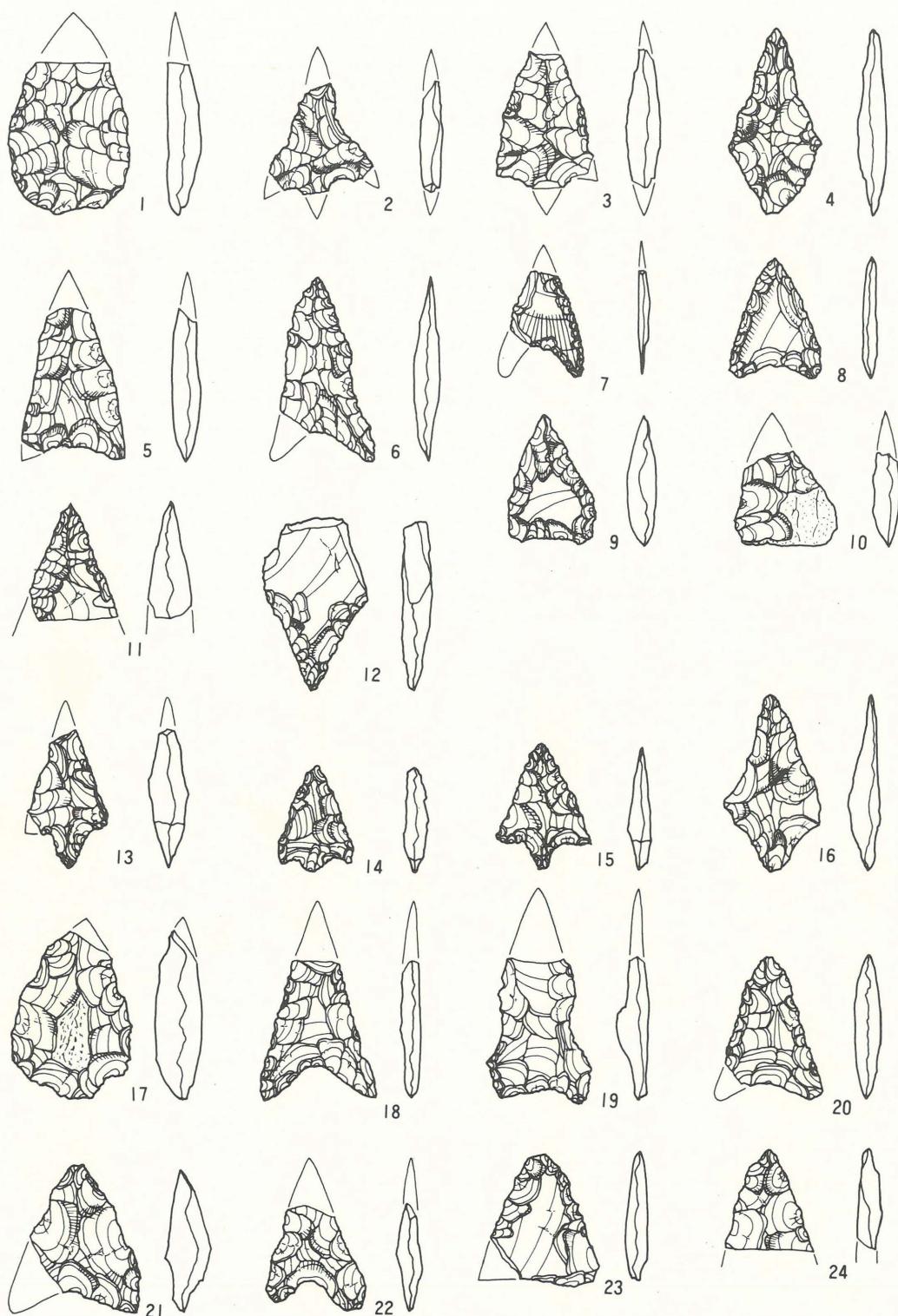
発掘調査で出土した石鏃は31点である。形態や製作技術等の細かな違いによる型式分類は現状では信頼のおける段階にないため、基部の形態により便宜的に有茎（2～3・13～15・25）、凸基（1・4・16・17）、凹基（5～8・18～22・26～28）、平基（9・10・23・29～32）の4類及び不明（11・24）に分類した。各個体の法量等は表1に示してある。身部形態についても個体差は認められるが、これだけでは型式差としては認定できない。

石錐（第23図12、第24図34・35）

石錐はいずれも剥片の一端を加工し、断面四角形に仕上げたものである。

搔器（第24図33・37・38、第25図40、第26図46）

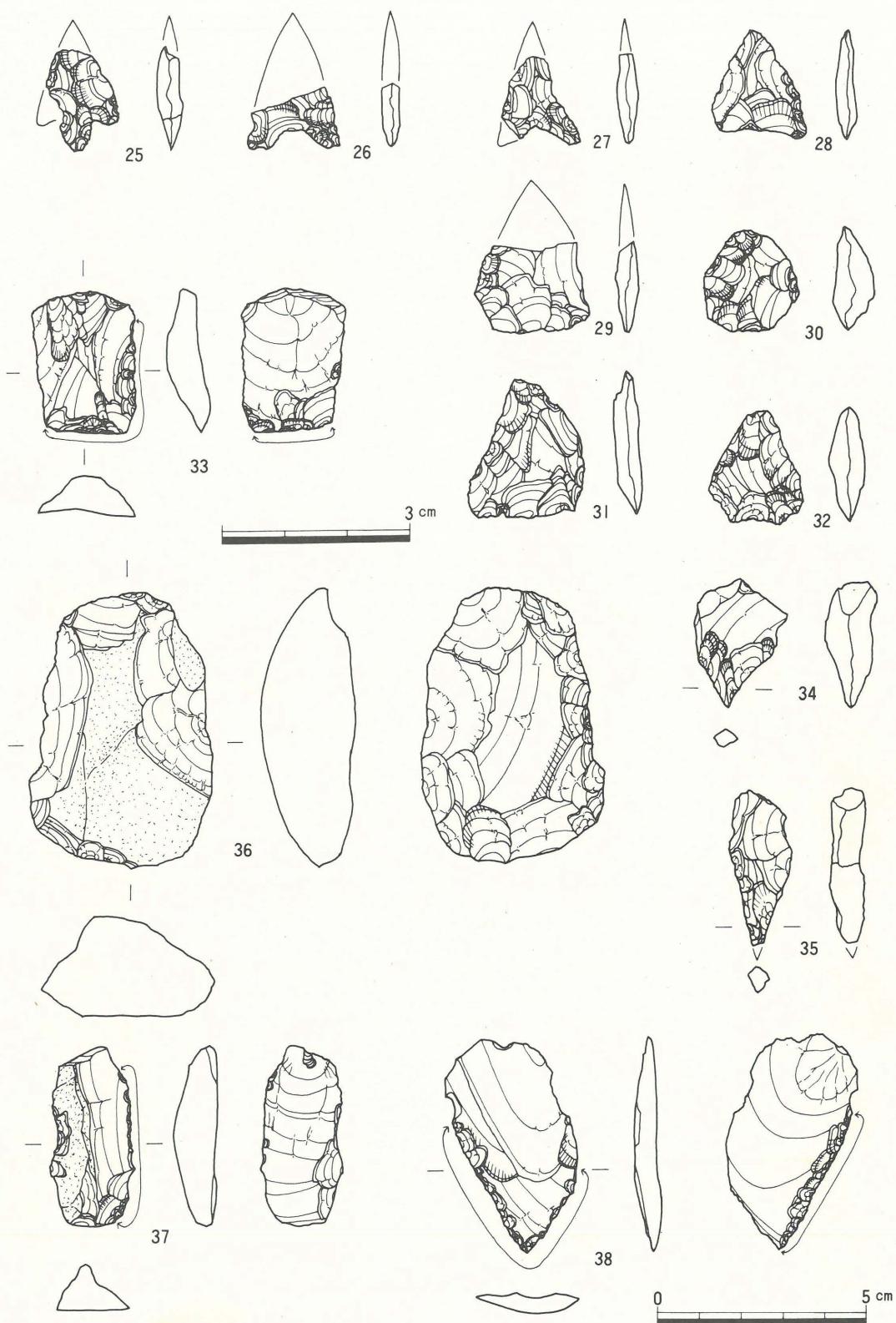
搔器は使用痕あるいは調整剝離と考えられる剝離が縁辺部にみられるものを一括した。



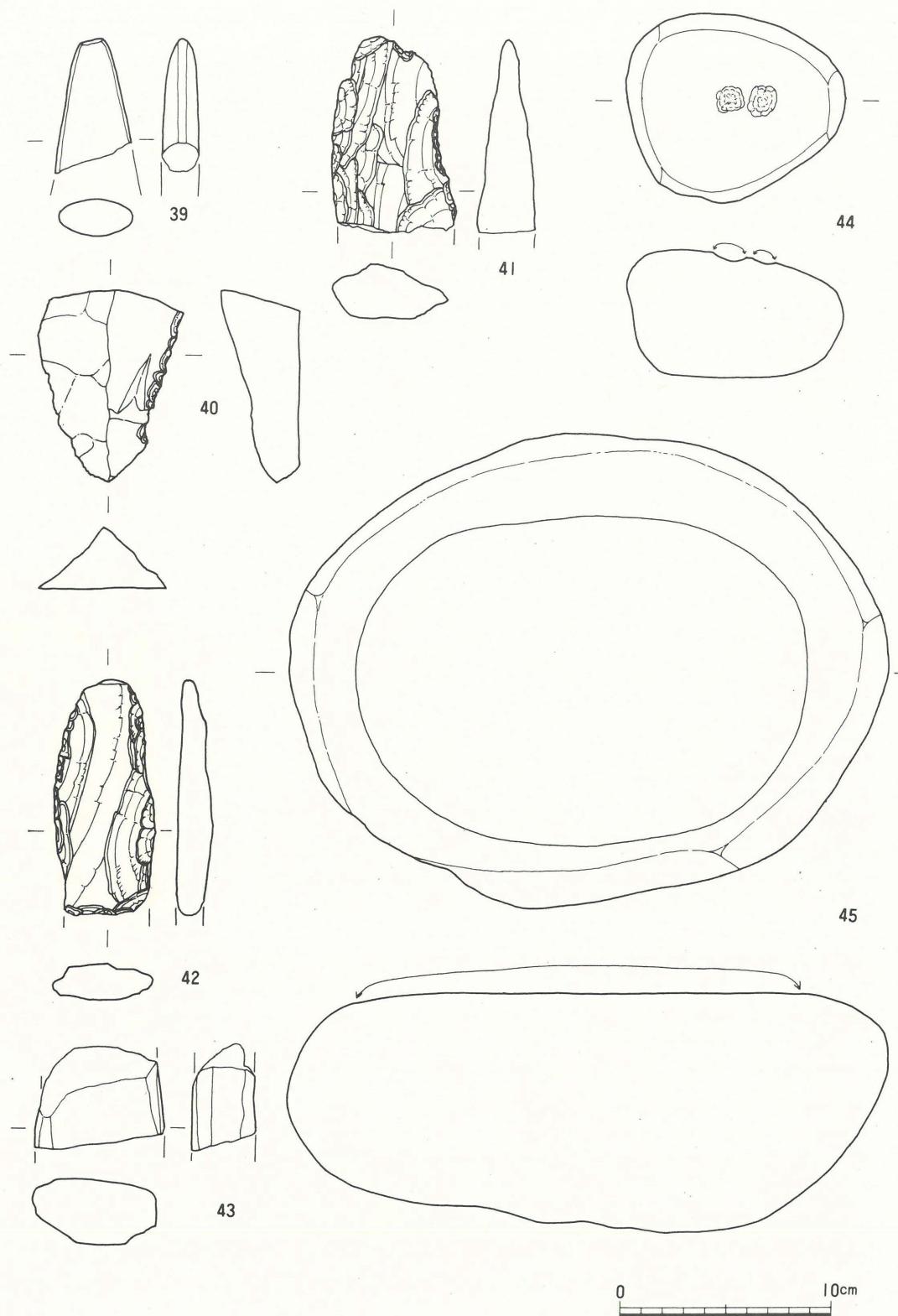
2~12·14·SD-1



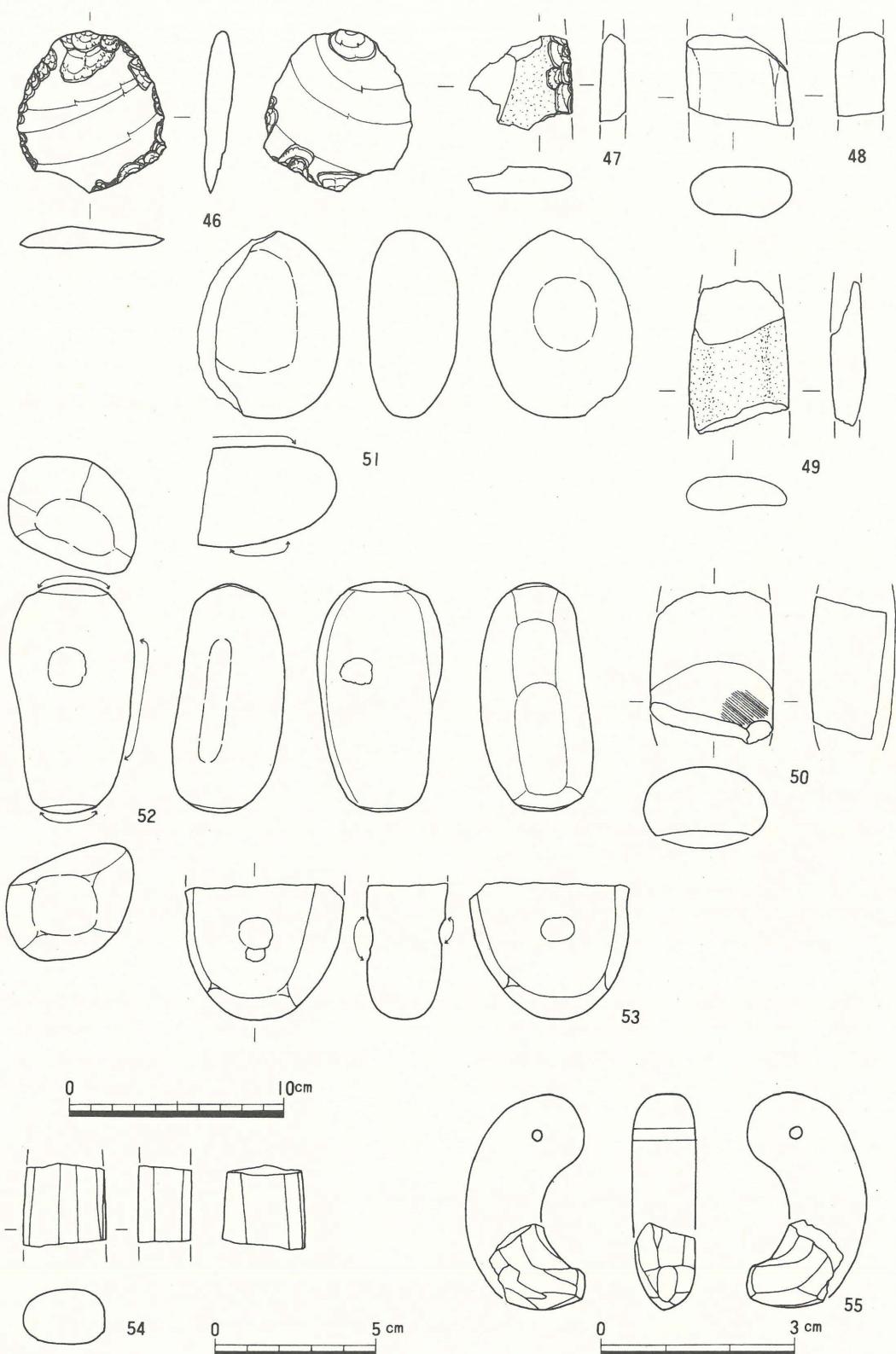
第23図 出土石器実測図-1 (1/1)



第24図 出土石器実測図－2 (1/1, 2/3)



第25図 出土石器実測図一 3 (1/3)



第26図 出土石器実測図－4 (1/1, 1/2, 1/3)

礫器（第24図36）

36は縁辺部に大きな剝離がみられるが、使用痕と考えられるものは認められない。とりあえず礫器としたが、用途については不明である。

石斧（第25図39・41・42、第26図47～50）

石斧には打製石斧（41・42・47）と磨製石斧（39・48～50）とがある。47の表面には自然面が残っている。

磨石（第25図43、第26図51）

43は両端が欠損しているが断面隅丸方形で機能面は正面と側面である。51は楕円形の礫の両面に機能面がみられる。

石皿（第25図45）

石皿は楕円形の大きな礫の表面に機能面がある。機能面は平坦であり、一部に目立ての痕跡はあるが、全体によく使い込まれ平滑になっている。

凹石（第25図44、第26図53）

44は片面に二つのくぼみがある。53は両面にくぼみがある。

敲石（第26図52）

52は円柱形の礫の両端と両側縁に機能面がある。

石棒（第26図54）

54は楕円形の棒状になっており、石棒と考えられる。

勾玉（第26図55）

55は滑石製の勾玉である。頭部は欠損しているが、古墳時代のものと考えられる。

第6章 考 察

1. 調査以前に採集された資料

白石遺跡はこれまで多くの遺物が採集されているが、縄文時代から弥生時代のものとしては他の遺跡と比較して特に石器が多く出土している（注1）。縄文土器から弥生前期の土器はこれまでに報告されている（注2）ので、ここでは石器について紹介する。

今回報告する白石遺跡で採集された石器は、石鏸902（80）点、石錐27（15）点、磨製石錐2点、打製石錐1点、磨製石斧79（49）点、石刀3（3）点、石棒8（8）点、子持ち勾玉1（1）点、勾玉1（1）点、丸玉1（1）点、管玉2（2）点、1027総数（163）点である。括弧内は今回図示したものの数である。個々の法量は第2～5表に示し、以下では器種ごとに説明する。

石鏸（第27図～第29図、56～135）

石鏸は分類のための属性が少なく、変化の幅も小さい。また、所属時期についても十分には明らかに出来ないため、今回使用した資料だけでは型式としての認定は十分に行えない。そこで、基部形態と身部形態を中心に、暫定的にA～G類の7類に分類した。

A類（57～62）は、有茎で身部が稜を持ち五角形のものである。

B類（56・63～77）は、有茎で身部が三角形のものである。

C類（78～83）は、凹基で身部が五角形のものである。

D類（84～95）は、凹基で身部が三角形であり、幅より長さの方が長いものである。

E類（96～101）は、凹基で身部が三角形であり、幅より長さの方が短いものである。

F類（102～121）は、平基で身部が三角形のものである。

G類（122～135）は、凸基のものであるが、身部形態は個体差が大きい。

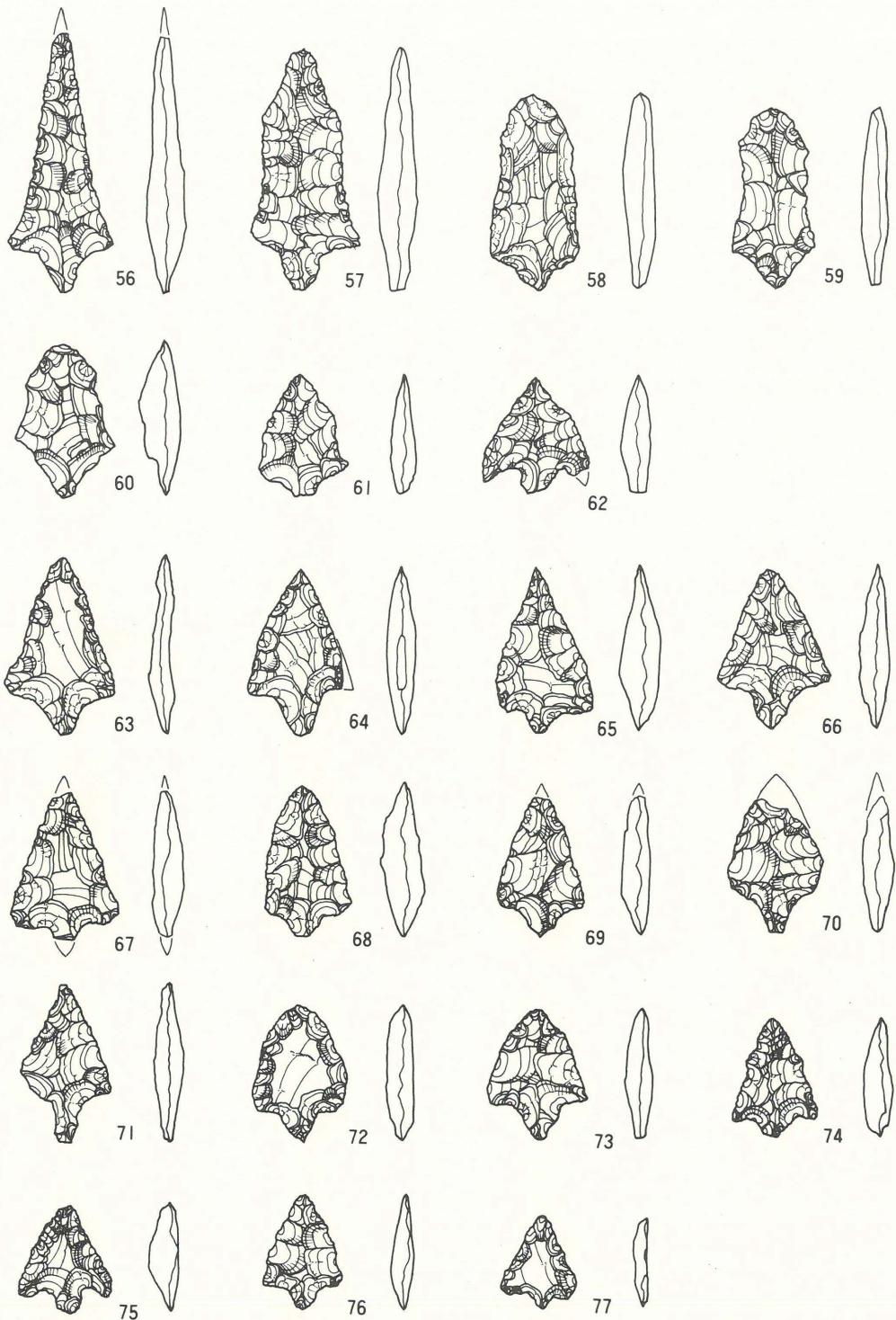
石錐（第30図、136～150）

石錐は細長い棒状のもの（136・139～141）や頭部につまみがあるもの（144・147～149）等があるが型式認定は十分には行えない。

磨製石斧（第31～36図、151～199）

磨製石斧は表面の調整方法、形態の違いからA～E類の5類に分類した。調整方法では、表面に敲打痕を残さない全面研磨のもの（A・B類）と刃部のみ研磨され、他の部分には明瞭に敲打痕が残るもの（C・D・E類）とがある。

A類（151）は、1点のみであり、石材も他のものとは異なっている。刃部付近には欠損した痕跡がみられ、刃部は再生されていることが分かる。



57~62・A類 56・63~77・B類



第27図 採集石器実測図－1 (1/1)

B類 (152~154) は、刃部が最も幅が広く、平面形が三角形になるものである。断面形は橢円形であり、側面には面をもたない。ここに示した3点は全長5cm程であり、法量の点でも共通している。

C類 (155・156・191・192) は、敲打痕が明瞭に残るもので、幅に対して厚さがかなり薄く、偏平なものである。155は敲打痕が明瞭ではなく、全面に剥離痕が残っている。

D類 (157~164) は、敲打痕が明瞭に残るもので、断面が円形に近く、かなり細長いものである。刃部幅は2~3cm、10cm程度のものが多く、法量の点でも共通性が強い。

E類 (165~190・193~199) は、これまで乳棒状敲製石斧あるいは遠州式石斧と称されて来たものである。断面は橢円形で、刃部が余り広がらない棒状をしている。法量の点では、かなり個体差が大きく、いくつかに細分できる可能性はあるが、定量的分析は今後の課題である。

白石遺跡出土の石斧はほとんどが製品の欠損品であり、未製品は含まれていない。北西約10kmにある麻生田大橋遺跡(注3)においては、製品よりも未製品の方が圧倒的に多く、対象的である。

敲石(第36図、200)

敲石は石斧と同一石材であり、石斧を転用したものと考えられる。全面に敲打痕がみられる。

石錘(第36図、201~203)

石錘では磨製石錘1点(201)、打製石錘2点(202・203)が採集されている。

石棒類(第36・37図、204~214)

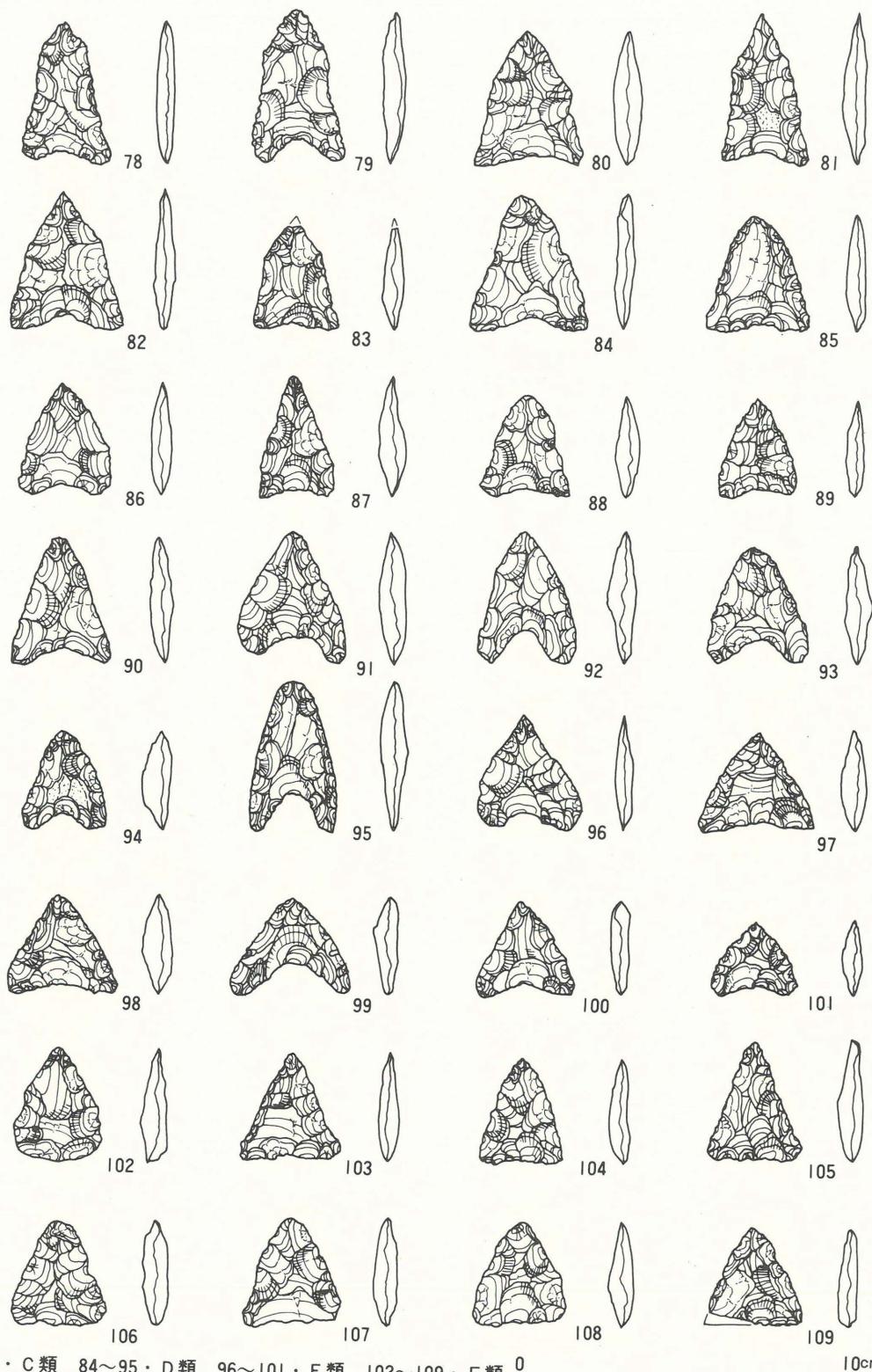
石棒類では石刀3点(204~206)、石棒8点(207~214)が出土している。明瞭に片刃のものを石刀とした。いずれも小破片の欠損品であり、詳細は不明である。206の刃部には一部に敲打痕がみられる。

断面が円形または橢円形になるものを石棒とした。207のように頭部が明瞭なものもあるが209のようにほとんど無頭に近いものもある。210は両端に研磨痕が見られるが、二次的なものと考えられる。また、両側縁と裏面にはほぼ同じ位置に切れ目が入れられている。

玉類(第37図、215~219)

玉類では、子持ち勾玉1点(219)、勾玉1点(215)、丸玉1点(216)、管玉2点(217・218)が出土している。以前報告した際には、丸玉がもう1点含まれていた(注4)が、渥美町保美貝塚出土のものであることが確認されたため、今回再録して訂正する。

子持ち勾玉(219)の腹側と背側の子は、明瞭な二個一対の突起が認められるが、両側の子は対になっておらず、独立した突起が4個ずつ並んでいる。頭部には貫通した穴が1個と未貫通の穴が3個ある。未貫通のものは互いに重なっており、その内の1つには、錐と考えられる鉄製品が刺さったままの状態で残っている。図中の破線の部分が錐と考えられるものであるが、



78~83・C類 84~95・D類 96~101・E類 102~109・F類 0 10cm

第28図 採集石器実測図－2 (1/1)

長さについては推定した図となっている。穿孔は片面穿孔である。

勾玉（215）は頭部が欠損しているが、片側の側縁の中央やや下に大きな切れ込みがあり、その上に2ヶ所、下に4ヶ所の小さな切れ込みがあり、合計7ヶ所の切れ込みがある。頭部の穿孔は両面穿孔である。

丸玉（216）は、両端はかなり広く両面穿孔である。

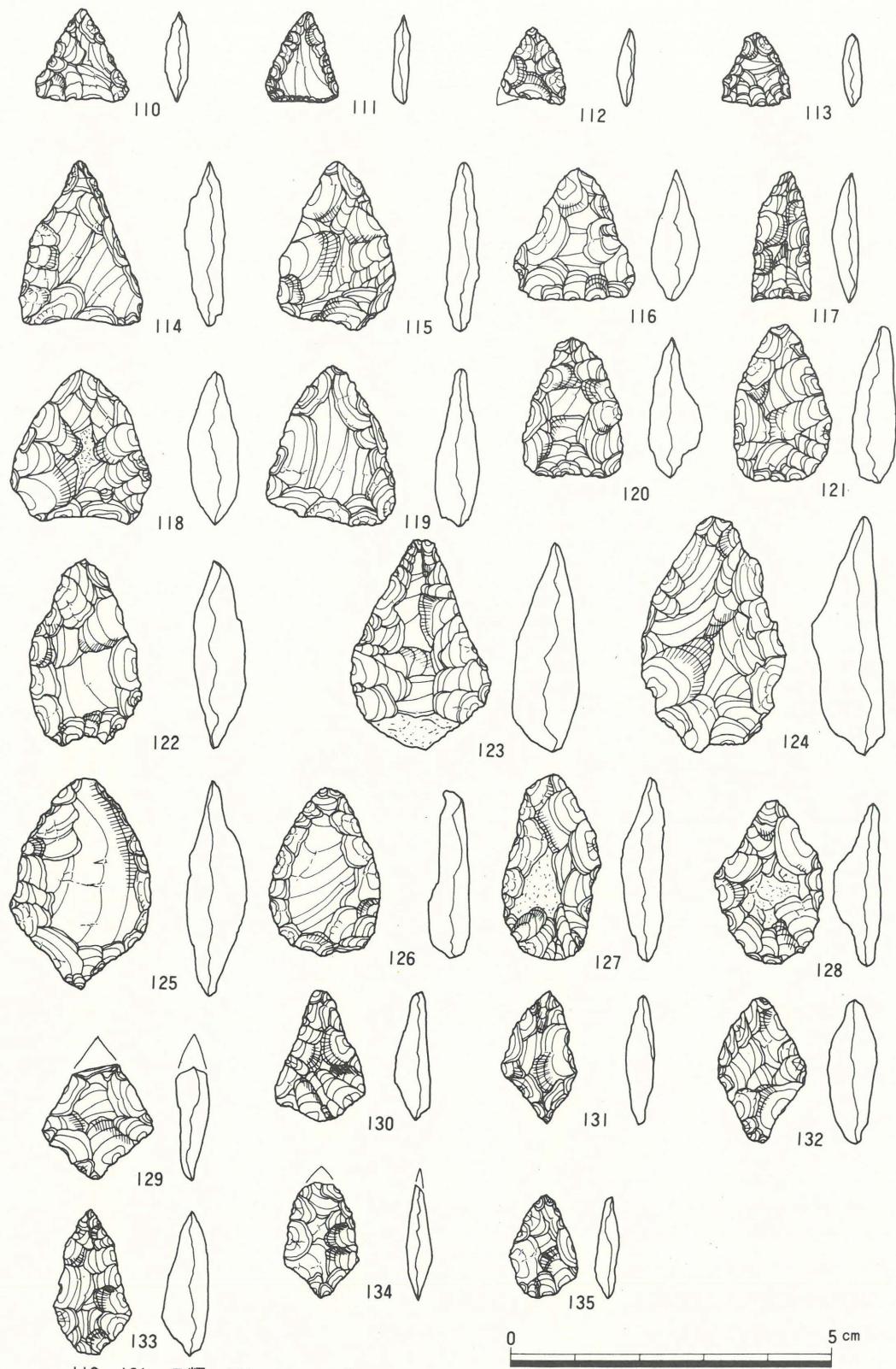
管玉は2点（217・218）あり、217の両端には明瞭な面がみられず、胴部がやや張った形をしている。両面穿孔である。218は端部が欠損しているが、円柱形をしている。両面穿孔である。

注1 木下克己『八名郡の先史遺跡』1975年

注2 貢元洋「白石遺跡出土玉類について」『ホリデー考古』第3号 1985年

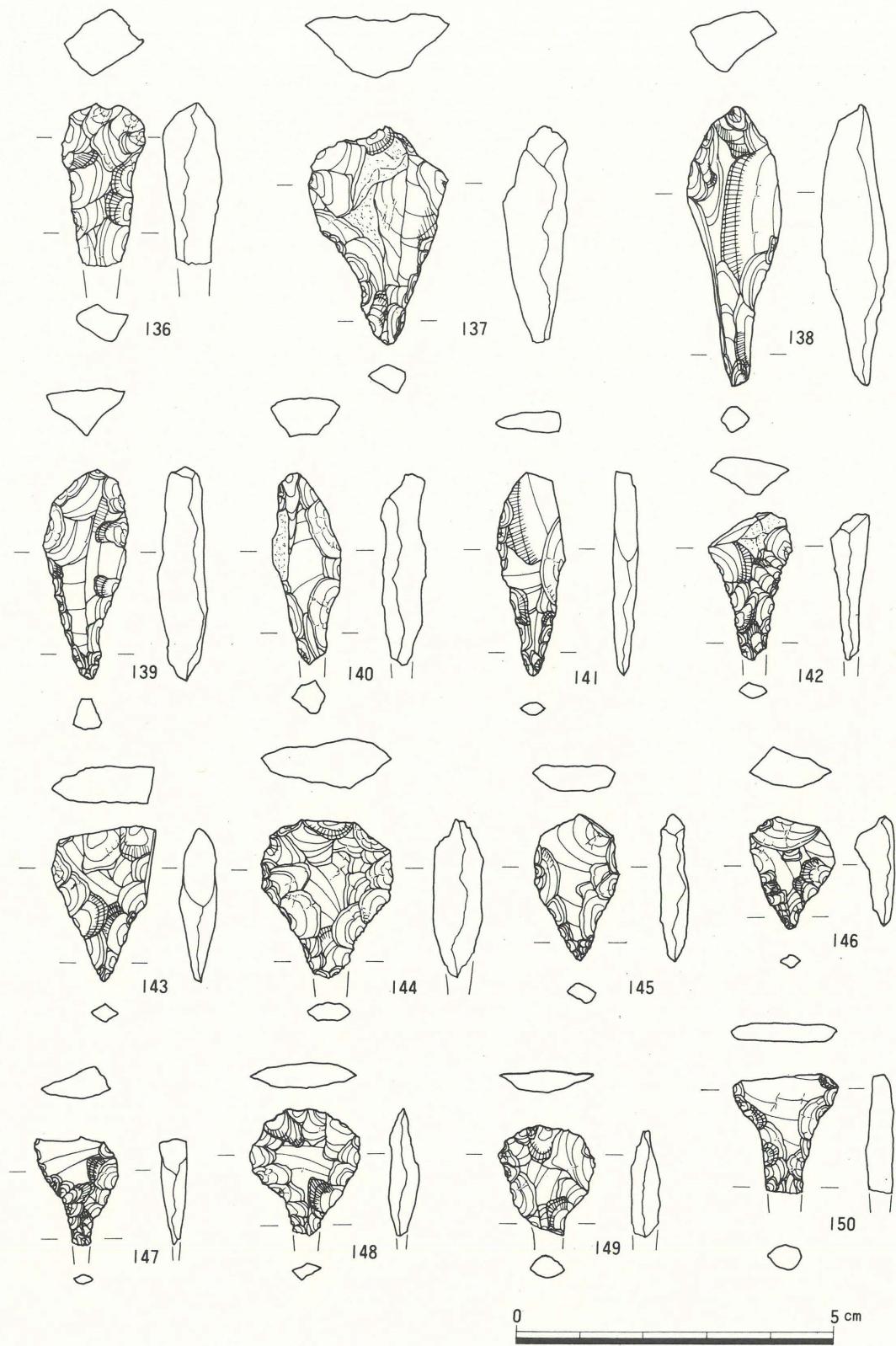
注3 安井俊則他『麻生田大橋遺跡』1991年

注4 貢元洋「白石遺跡出土玉類について」『ホリデー考古』第3号 1985年

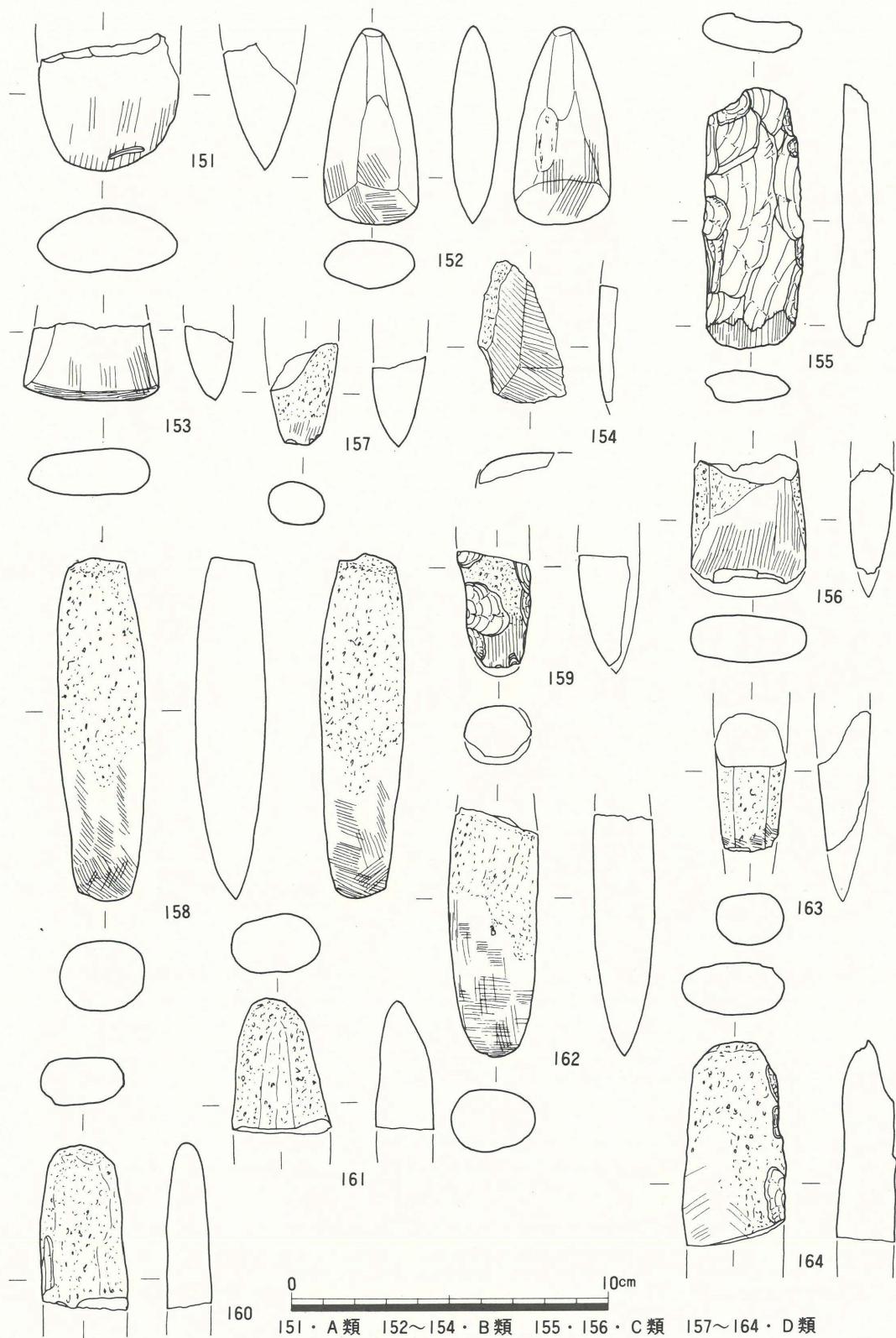


110~121・F類 122~135・G類

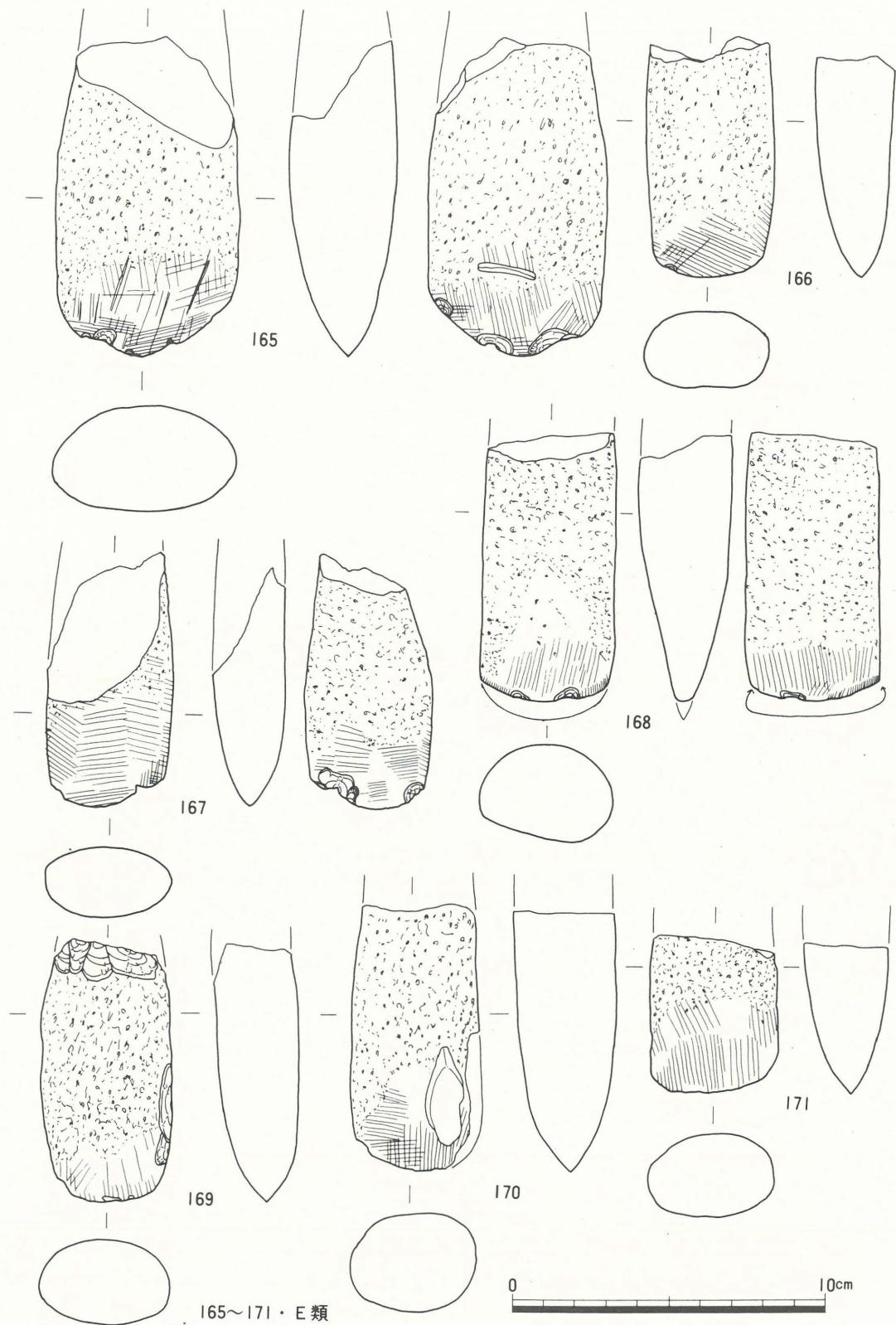
第29図 採集石器実測図-3 (1/1)



第30図 採集石器実測図－4 (1/1)



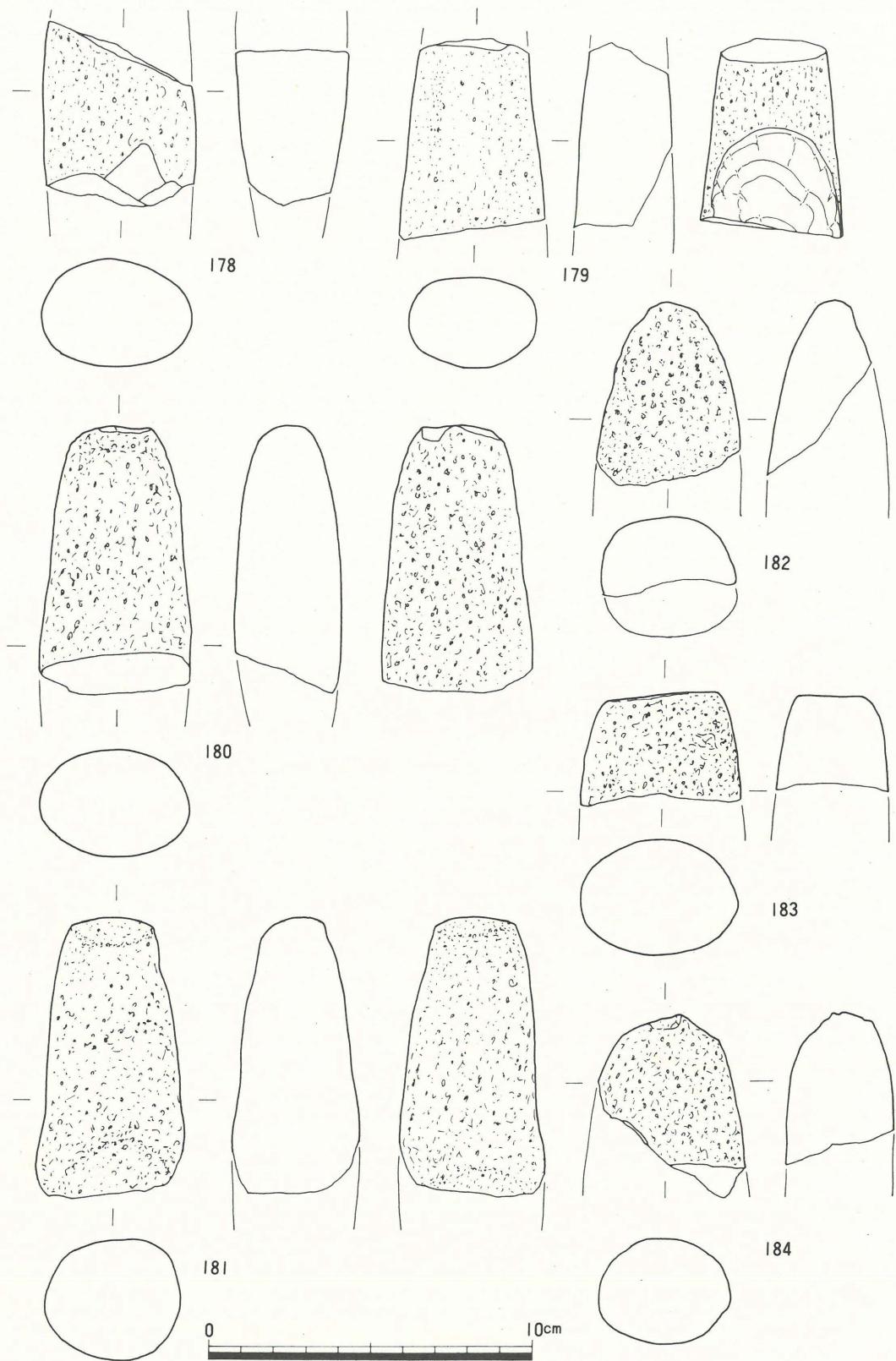
第31図 採集石器実測図－5 (1/2)



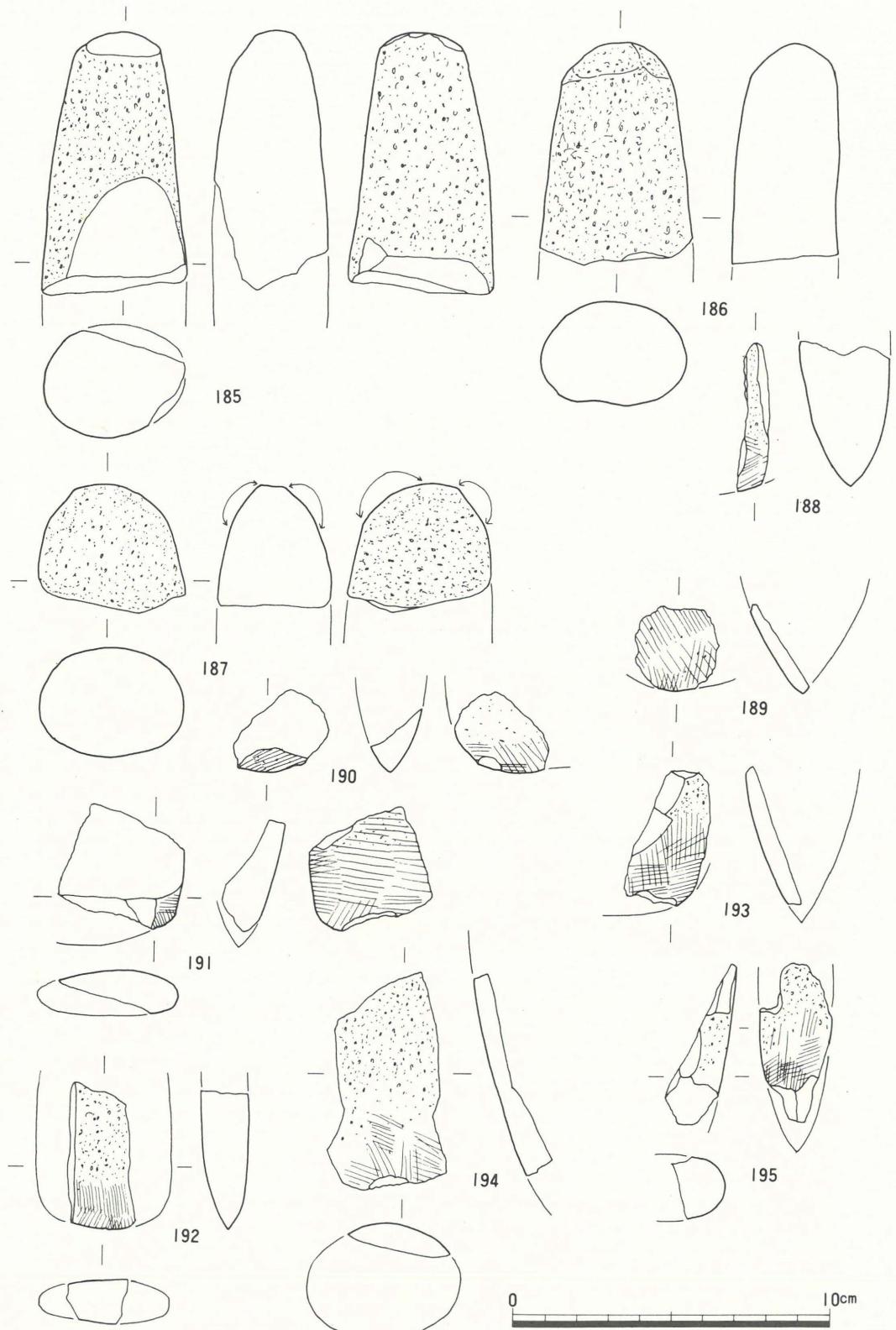
第32図 採集石器実測図－6 (1/2)



第33図 採集石器実測図-7 (1/2)

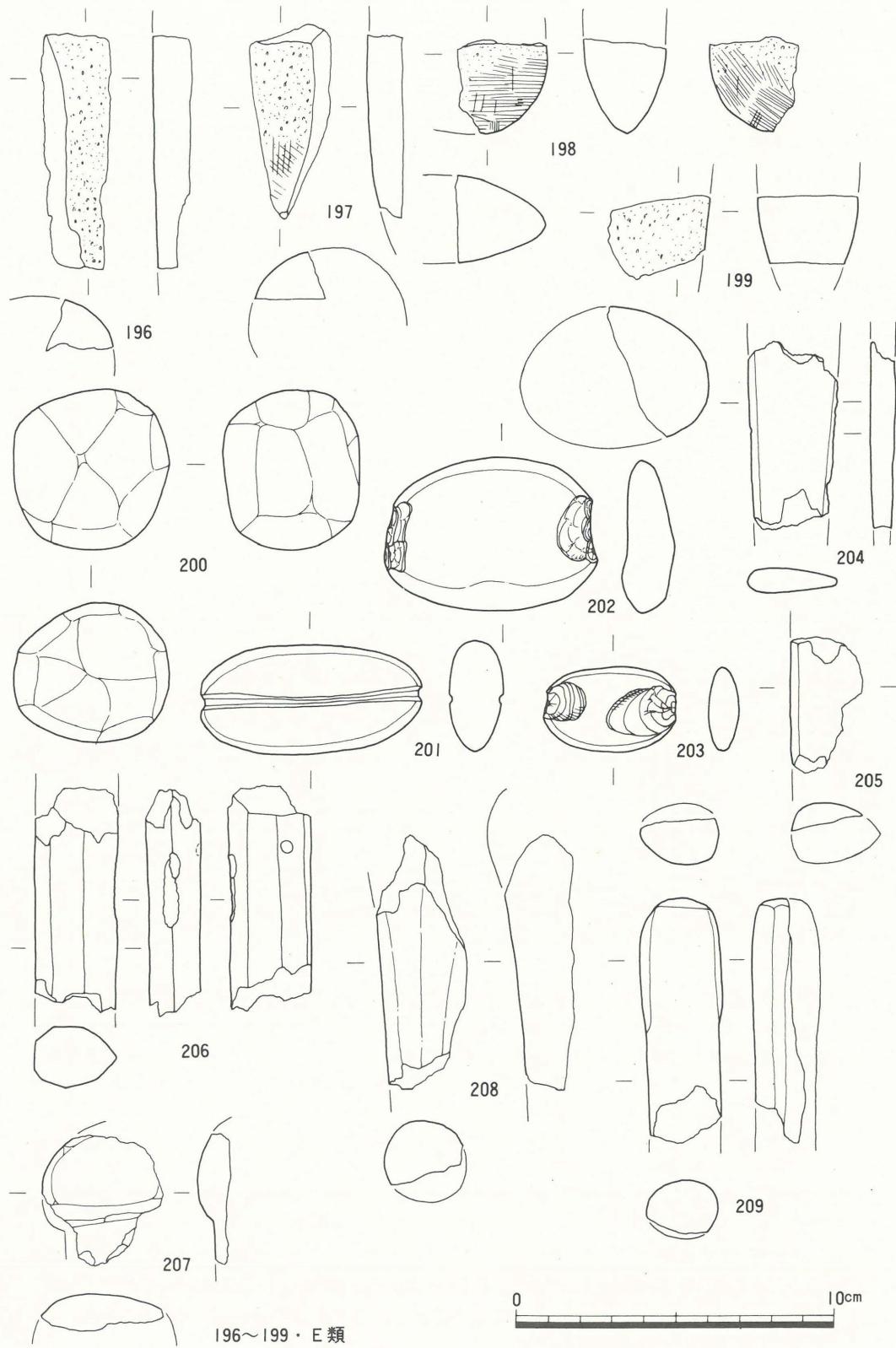


第34図 採集石器実測図-8 (1/2)

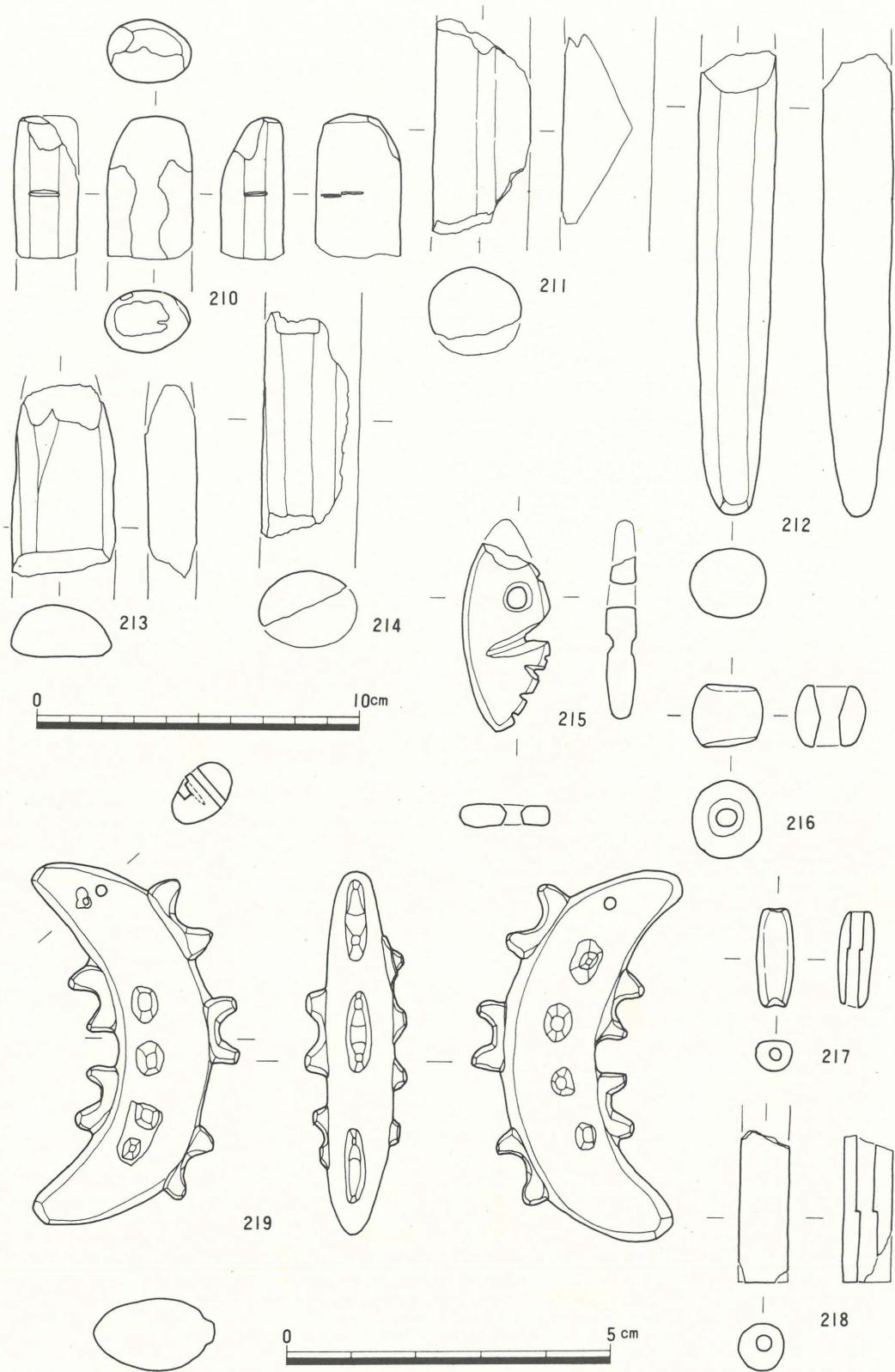


185～190・193～195・E類 191・192・C類

第35図 採集石器実測図-9 (1/2)



第36図 採集石器実測図-10 (1/2)



第37図 採集石器実測図-11 (1/1, 1/2)

計測単位はmm, g () 内は現存値

図版番号	実測番号	器種	石質	全長	身部長	茎部長	幅	厚さ	重さ
1	27	石 鏃	安山岩 1	1.61	1.51	0.23	1.17	0.33	(0.58)
2	37	石 鏃	安山岩 1	(1.69)	(1.47)	(0.14)	(1.57)	0.35	(0.69)
3	43	石 鏃	チャート	(2.06)	(1.92)	(0.18)	(1.50)	0.60	(1.67)
4	44	石 鏃	安山岩 2	2.73			1.40	0.48	1.27
5	35	石 鏃	安山岩 1	(2.30)			(1.57)	0.46	(1.49)
6	21	石 鏃	安山岩 2	2.79			(1.40)	0.41	(1.07)
7	40	石 鏃	火山ガラス	(1.57)			(0.97)	0.16	(0.23)
8	34	石 鏃	玄武岩	1.88			1.38	0.21	0.53
9	41	石 鏃	チャート	2.00			1.35	0.48	1.24
10	36	石 鏃	チャート	(1.40)			1.56	0.40	(0.89)
11	42	石 鏃	チャート	(1.78)			(1.30)	(0.60)	(1.23)
12	45	石 锥	チャート	2.55			1.58	0.42	1.73
13	17	石 鏃	チャート	(2.30)			1.84	0.51	(2.22)
14	28	石 鏃	チャート	(2.07)	(1.52)	0.54	(1.21)	0.63	(1.13)
15	29	石 鏃	チャート	1.91	1.62	0.40	1.44	0.38	0.64
16	32	石 鏃	安山岩 2	2.63	2.09	0.54	1.49	0.48	1.28
17	30	石 鏃	チャート	(2.57)	(2.21)	0.32	1.85	0.73	(3.41)
18	33	石 鏃	玄武岩	(2.08)			1.80	0.31	(0.88)
19	26	石 鏃	安山岩 2	(2.14)			1.56	0.50	(1.32)
20	22	石 鏃	安山岩 1	2.20			(1.51)	0.36	(1.01)
21	31	石 鏃	チャート	2.32			(1.52)	0.60	(1.71)
22	25	石 鏃	安山岩 2	(1.64)			1.56	0.37	(0.66)
23	19	石 鏃	チャート	1.94			(1.62)	0.30	(0.90)
24	20	石 鏃	安山岩 1	(1.51)			(1.35)	0.40	(0.68)
25	49	石 鏃	チャート	(1.61)	(1.36)	0.41	(1.13)	0.41	(0.67)
26	52	石 鏃	黒曜石	(0.96)			1.42	(0.30)	(0.35)
27	46	石 鏃	安山岩 1	(1.38)			(1.19)	0.33	0.44
28	50	石 鏃	安山岩 2	1.70			1.46	0.30	0.70
29	54	石 鏃	安山岩 2	(1.42)			1.85	0.40	(1.20)
30	51	石 鏃	チャート	1.62			1.52	0.72	1.75
31	48	石 鏃	玄武岩	2.20			1.92	0.39	1.60
32	53	石 鏃	チャート	1.80			1.55	0.65	1.69
33	38	U フレ	チャート	3.39			2.47	0.90	8.67
34	55	石 锥	チャート	2.01			1.47	0.75	2.09
35	47	石 锥	チャート	(2.44)			1.05	0.67	(1.52)
36	39	礫器	玄武岩	6.57			4.44	2.30	74.16
37	24	U フレ	チャート	4.28			2.14	1.07	9.32
38	23	U フレ	玄武岩	5.01			2.85	0.55	7.69
39	13	磨製石斧	塩基性岩	(6.39)			(3.47)	(1.76)	(54.7)
40	6	礫器	塩基性岩	9.30			6.97	3.65	193
41	8	打製石斧	塩基性岩	(9.24)			(5.81)	(2.73)	(152.1)
42	7	打製石斧	緑色片岩	(11.19)			4.78	1.74	134.99
43	11	磨製石斧	不明	(4.71)			(6.18)	(3.00)	111.09
44	2	凹石	花コウ岩	9.00			10.45	5.85	770

第1表 石器計測表1

計測単位はmm g () 内は現存値

図版番号	実測番号	器種	石質	全長	身部長	茎部長	幅	厚さ	重さ
45	1	石皿	花コウ岩	30.2			24.1	13.1	9400
46	9	礫器	不明	7.49			6.75	1.35	(71.79)
47	16	磨製石斧	黒色片岩	(4.48)			(4.88)	(1.27)	(35.56)
48	15	磨製石斧	塩基性岩	(4.24)			(4.74)	2.24	(83.26)
49	12	磨製石斧	砂岩	(6.99)			(4.64)	1.52	(66.81)
50	14	磨製石斧	塩基性岩	(6.89)			(5.79)	(3.34)	(245)
51	5	磨石	砂岩	8.76			6.53	4.20	(338)
52	4	磨石	花コウ岩	10.55			6.02	4.98	(455)
53	3	凹石	花コウ岩	(6.52)			(7.59)	(3.94)	(253)
54	10	石棒	凝灰岩	(2.55)			(2.60)	(1.70)	(17.74)
55	18	勾玉	蛇紋石?	(1.51)			(1.01)	(0.93)	(1.84)
56	56	石鎌	チャート	(3.82)	(3.18)	(0.56)	1.53	0.62	(2.14)
57	57	石鎌	チャート	3.58	2.94	0.66	1.62	0.64	2.69
58	60	石鎌	玄武岩	2.85	2.50	0.35	1.31	0.52	2.15
59	59	石鎌	チャート	2.59	2.21	0.38	1.24	0.44	1.34
60	58	石鎌	安山岩1	2.20	1.70	0.50	1.45	0.65	1.45
61	61	石鎌	チャート	1.80	1.57	0.24	1.30	0.41	0.85
62	62	石鎌	安山岩2	1.69	1.51	0.36	(1.61)	0.45	0.97
63	63	石鎌	玄武岩	2.63	2.13	0.50	1.60	0.38	1.28
64	67	石鎌	安山岩1	2.44	1.92	0.59	(1.42)	0.50	1.30
65	68	石鎌	チャート	2.43	2.16	0.30	1.43	0.64	1.65
66	69	石鎌	安山岩1	2.34	1.72	0.52	1.63	0.43	1.21
67	70	石鎌	流紋岩	(2.15)	(1.94)	(0.21)	1.59	0.46	(1.32)
68	71	石鎌	チャート	2.21	1.87	0.34	1.26	0.55	1.55
69	74	石鎌	流紋岩	(2.04)	(1.66)	0.38	1.30	0.43	(1.03)
70	73	石鎌	チャート	(1.97)	(1.43)	0.54	1.45	0.47	(1.13)
71	72	石鎌	チャート	2.26	1.66	0.60	1.32	0.46	1.01
72	66	石鎌	玄武岩	1.98	1.57	0.41	1.42	0.38	1.34
73	65	石鎌	安山岩2	1.88	1.37	0.51	1.48	0.44	0.89
74	75	石鎌	チャート	1.72	1.40	0.31	1.27	0.42	0.76
75	64	石鎌	チャート	1.59	1.35	0.30	1.34	0.44	0.66
76	76	石鎌	安山岩1	1.67	1.35	0.32	1.18	0.35	0.56
77	77	石鎌	チャート	1.33	1.16	0.19	1.13	0.25	0.33
78	78	石鎌	安山岩2	2.11			1.32	0.31	0.79
79	79	石鎌	安山岩2	2.27			1.41	0.30	0.89
80	80	石鎌	チャート	1.99			1.64	0.41	1.14
81	81	石鎌	安山岩2	2.22			1.33	0.36	0.80
82	82	石鎌	安山岩1	2.04			1.71	0.31	0.84
83	83	石鎌	安山岩2	(1.51)			1.30	0.34	(0.60)
84	84	石鎌	安山岩1	2.04			1.77	0.26	0.90
85	85	石鎌	安山岩2	1.76			1.57	0.31	0.82
86	86	石鎌	安山岩2	1.65			1.39	0.31	0.70
87	87	石鎌	玄武岩	1.79			1.17	0.45	0.71
88	88	石鎌	安山岩2	1.53			1.37	0.36	0.59

第2表 石器計測表2

計測単位はmm, g () 内は現存値

図版番号	実測番号	器種	石質	全長	身部長	茎部長	幅	厚さ	重さ
89	89	石 鏃	安山岩 2	1.46			1.20	0.27	0.49
90	90	石 鏃	安山岩 2	1.90			1.49	0.36	0.78
91	91	石 鏃	チャート	1.98			1.70	0.46	1.24
92	92	石 鏃	チャート	1.96			1.51	0.42	0.83
93	93	石 鏃	安山岩 2	1.74			1.52	0.42	0.81
94	94	石 鏃	チャート	1.47			1.27	0.43	0.70
95	95	石 鏃	安山岩 2	2.25			1.34	0.40	0.97
96	96	石 鏃	チャート	1.66			1.57	0.28	0.62
97	97	石 鏃	チャート	1.42			1.76	0.36	0.78
98	98	石 鏃	安山岩 2	1.45			1.64	0.45	0.84
99	99	石 鏃	安山岩 1	1.44			1.83	0.36	0.63
100	100	石 鏃	安山岩 2	1.40			1.49	0.30	0.52
101	101	石 鏃	玄武岩	1.08			1.28	0.27	0.31
102	110	石 鏃	チャート	1.72			1.31	0.42	0.81
103	111	石 鏃	安山岩 2	1.58			1.52	0.33	0.63
104	112	石 鏃	安山岩 2	1.58			1.26	0.35	0.62
105	113	石 鏃	安山岩 2	1.76			1.40	0.42	0.79
106	114	石 鏃	チャート	1.58			1.40	0.38	0.84
107	115	石 鏃	安山岩 2	1.60			1.50	0.32	0.73
108	116	石 鏃	安山岩 2	1.53			1.37	0.41	0.73
109	117	石 鏃	安山岩 2	1.46			(1.42)	0.31	(0.69)
110	118	石 鏃	安山岩 2	1.41			1.44	0.38	0.61
111	119	石 鏃	チャート	1.36			1.10	0.26	0.39
112	121	石 鏃	安山岩 2	1.20			(0.97)	0.25	(0.29)
113	120	石 鏃	安山岩 2	1.13			1.06	0.32	0.42
114	102	石 鏃	チャート	2.52			1.83	0.58	2.38
115	103	石 鏃	チャート	2.57			1.86	0.53	2.55
116	106	石 鏃	安山岩 1	2.05			1.86	0.76	2.23
117	109	石 鏃	チャート	2.00			0.93	0.34	0.68
118	104	石 鏃	チャート	2.28			2.17	0.86	3.90
119	105	石 鏃	玄武岩	2.41			2.04	0.68	3.35
120	107	石 鏃	安山岩 2	2.14			1.53	0.79	2.21
121	108	石 鏃	チャート	2.42			1.49	0.71	2.82
122	124	石 鏃	チャート	2.84			1.79	0.90	4.59
123	123	石 鏃	チャート	3.23			2.21	1.05	6.76
124	122	石 鏃	安山岩 1	3.70			2.31	0.95	7.39
125	125	石 鏃	玄武岩	3.24			2.18	0.93	5.77
126	126	石 鏃	チャート	2.60			1.77	0.70	3.11
127	127	石 鏃	チャート	2.86			1.53	0.75	3.12
128	128	石 鏃	安山岩 2	2.55			1.72	0.76	2.48
129	133	石 鏃	チャート	(1.78)			1.68	0.58	(1.26)
130	135	石 鏃	チャート	1.99			1.44	0.57	1.37
131	134	石 鏃	安山岩 2	2.00			1.19	0.47	0.96
132	129	石 鏃	チャート	2.21			1.38	0.76	2.06

第3表 石器計測表3

計測単位はmm, g () 内は現存値

図版番号	実測番号	器種	石質	全長	身部長	茎部長	幅	厚さ	重さ
133	131	石鏃	チャート	2.24			1.20	0.70	1.72
134	132	石鏃	安山岩2	(1.79)			1.16	0.44	(0.86)
135	130	石鏃	安山岩1	1.58			1.06	0.35	0.52
136	136	石錐	安山岩1	(2.55)			1.32	0.94	(2.97)
137	137	石錐	チャート	3.45			2.26	0.94	6.25
138	139	石錐	玄武岩	4.32			1.51	0.97	5.27
139	138	石錐	チャート	3.25			1.31	0.72	3.26
140	140	石錐	チャート	(2.98)			1.11	0.66	2.31
141	142	石錐	玄武岩	3.21			1.14	0.43	1.83
142	141	石錐	チャート	(2.34)			1.29	0.63	(1.37)
143	144	石錐	玄武岩	2.52			1.70	0.64	2.27
144	143	石錐	チャート	(2.49)			2.06	0.82	(4.53)
145	145	石錐	チャート	2.31			1.33	0.40	1.41
146	150	石錐	チャート	1.76			1.36	0.61	1.14
147	149	石錐	チャート	(1.79)			1.38	0.52	(0.96)
148	146	石錐	チャート	(1.99)			1.73	0.50	(1.43)
149	147	石錐	安山岩2	(1.71)			1.55	0.49	(1.14)
150	148	石錐	玄武岩	(1.84)			1.63	0.41	(1.20)
151	151	磨製石斧	塩基性岩	(4.47)			(4.36)	(1.96)	(45)
152	152	磨製石斧	塩基性岩	6.20			3.10	1.48	41
153	154	磨製石斧	塩基性岩	(2.58)			4.27	(1.58)	(24)
154	153	磨製石斧	塩基性岩	(4.49)			(2.67)	(0.78)	(12)
155	165	磨製石斧	塩基性岩	8.24			3.23	1.28	50
156	155	磨製石斧	塩基性岩	(4.10)			3.74	(1.42)	(37)
157	159	磨製石斧	塩基性岩	(3.36)			(1.98)	(1.62)	(13)
158	156	磨製石斧	塩基性岩	10.09			2.70	2.24	115
159	160	磨製石斧	塩基性岩	(3.80)			(2.47)	(1.61)	(18)
160	163	磨製石斧	塩基性岩	(5.33)			(2.80)	(1.50)	(37)
161	162	磨製石斧	塩基性岩	(4.34)			(3.18)	(1.89)	(38)
162	157	磨製石斧	塩基性岩	(7.71)			(2.87)	(2.05)	(78)
163	158	磨製石斧	塩基性岩	(4.27)			(2.22)	(1.65)	(22)
164	164	磨製石斧	塩基性岩	(6.34)			(3.28)	(1.74)	(67)
165	166	磨製石斧	塩基性岩	(10.17)			(5.82)	3.46	(300)
166	167	磨製石斧	塩基性岩	(7.73)			(4.18)	(2.48)	(140)
167	169	磨製石斧	塩基性岩	(8.09)			(4.09)	(2.32)	(105)
168	174	磨製石斧	塩基性岩	(8.60)			(4.27)	(3.23)	(207)
169	168	磨製石斧	塩基性岩	(8.55)			(4.16)	(2.94)	(169)
170	171	磨製石斧	塩基性岩	(8.60)			(4.20)	(3.23)	(188)
171	170	磨製石斧	塩基性岩	(5.05)			(4.11)	(2.72)	(89)
172	172	磨製石斧	塩基性岩	(9.22)			(4.40)	(2.53)	(173)
173	173	磨製石斧	塩基性岩	(8.16)			(5.01)	(3.60)	(192)
174	175	磨製石斧	塩基性岩	(7.86)			(4.96)	(1.98)	(135)
175	180	磨製石斧	塩基性岩	(5.08)			(6.03)	(3.49)	(161)
176	178	磨製石斧	塩基性岩	(5.29)			(5.59)	(4.28)	(210)

第4表 石器計測表4

計測単位はmm, g () 内は現存値

図版番号	実測番号	器種	石質	全長	身部長	茎部長	幅	厚さ	重さ
177	176	磨製石斧	塩基性岩	(7.93)			(4.27)	(3.05)	(136)
178	177	磨製石斧	塩基性岩	(5.60)			(4.71)	(3.45)	(151)
179	179	磨製石斧	塩基性岩	(6.24)			(4.37)	(2.85)	(129)
180	182	磨製石斧	塩基性岩	(8.27)			(4.77)	(3.34)	(209)
181	184	磨製石斧	塩基性岩	(8.49)			(4.71)	(3.91)	(251)
182	187	磨製石斧	ヒン岩	(5.82)			(4.55)	(2.75)	(84)
183	186	磨製石斧	塩基性岩	(3.37)			(4.96)	(3.62)	(101)
184	185	磨製石斧	塩基性岩	(5.66)			(4.61)	(3.51)	(107)
185	181	磨製石斧	塩基性岩	(8.22)			(4.64)	(3.41)	(200)
186	183	磨製石斧	塩基性岩	(6.74)			(4.88)	(3.41)	(169)
187	188	磨製石斧	塩基性岩	(3.99)			(4.63)	(3.57)	(99)
188	195	磨製石斧	塩基性岩	(4.75)			(0.92)	(2.88)	(14)
189	189	磨製石斧	塩基性岩	(3.20)			(2.67)	(0.51)	(6)
190	194	磨製石斧	塩基性岩	(2.52)			(2.88)	(1.26)	(9)
191	193	磨製石斧	塩基性岩	(4.13)			(4.18)	(1.43)	(21)
192	190	磨製石斧	塩基性岩	(4.75)			(2.38)	(0.71)	(11)
193	191	磨製石斧	塩基性岩	(4.76)			(2.06)	(1.64)	(26)
194	198	磨製石斧	塩基性岩	(6.85)			(3.39)	(1.12)	(39)
195	196	磨製石斧	塩基性岩	(5.24)			(1.80)	(2.34)	(17)
196	199	磨製石斧	泥質岩	(7.46)			(2.22)	(1.51)	(29)
197	200	磨製石斧	不明	(5.94)			(2.54)	(1.46)	(28)
198	192	磨製石斧	塩基性岩	(2.88)			(2.84)	(2.61)	(26)
199	197	磨製石斧	塩基性岩	(2.41)			(2.52)	(4.40)	(38)
200	220	敲石	塩基性岩	5.04			4.95	4.33	(188)
201	217	石錐	塩基性岩	3.52			7.06	1.77	72.41
202	219	石錐	緑色片岩	4.74			6.74	1.61	87.83
203	218	石錐	チャート	2.69			4.23	0.95	16.15
204	216	石剣	不明	(5.83)			(2.79)	(0.84)	(18.5)
205	212	石剣	泥質岩	(4.26)			(2.31)	(0.69)	(8.31)
206	206	石剣	不明	(7.15)			(2.66)	(1.82)	(60.9)
207	213	石棒	黒色片岩	(4.10)			(3.80)	(1.09)	(16.7)
208	214	石棒	泥質岩	(8.96)			(2.96)	(2.28)	(60.6)
209	208	石棒	塩基性岩	(7.75)			(2.50)	(1.64)	(52.6)
210	209	石棒	緑色片岩	(4.47)			(2.70)	(1.86)	(40.5)
211	210	石棒	緑色片岩	(6.75)			(2.97)	(2.15)	(60.1)
212	207	石棒	塩基性岩	(14.2)			(2.41)	(2.12)	(128)
213	215	石棒	泥質岩	(5.94)			(3.15)	(1.58)	(45.1)
214	211	石棒	泥質岩	(6.84)			(2.79)	(1.01)	(31.1)
215	201	勾玉	蛇紋石?	(2.84)			1.28	0.39	(2.62)
216	204	丸玉	長石?	0.90			1.14	1.12	1.69
217	203	管玉	長石?	1.50			0.57	0.50	0.72
218	202	管玉	長石?	(2.31)			(0.70)	(0.70)	(1.66)
219	205	子持勾玉	蛇紋石?	5.66			2.32	1.59	(18.0)
220									

第5表 石器計測表5

2. 白石遺跡の遠賀川集団

A. 遠賀川式土器の分類と編年の再検討

白石遺跡はこれまで弥生前期に並行する条痕紋土器を出土する遺跡として知られ、遠賀川式土器も出土していたが、わずかな量であり、搬入品と考えられてきた（注1）。伊勢湾沿岸地域における遠賀川式土器を主体的に出土する遺跡はこれまで朝日遺跡のように尾張低地部までとされ、愛知県東部の三河においては突帯紋土器の系譜を引く条痕紋土器が主体的に分布する地域として認識してきた。今回白石遺跡が遠賀川式土器を主体的に出土する環濠集落であることが確認されたことによって、従来の見解は訂正されるべきものとなった。そこで、ここでは特に当時の二つの集団の関係の再検討を行い新たな見解を提示する。そのため、まず編年を再検討し、遺跡の構造について言及する。

伊勢湾沿岸地域における遠賀川式土器の編年はこれまで紅村弘、久永春男等によって編年案が提示されているが、いずれも基準資料の提示が十分でなく、検証し難いものであった。紅村の様式構造を5系列で示す方法（注2）や久永の畿内編年を念頭に入れた編年（注3）には見るべき点もあるが、いずれも十分とは言えない。また、近年新たな資料に基づいた見解（注4）も提示されており、特に分類と編年の両方について再検討が加えられている。紙面の都合上、土器の詳細な分析は別稿に譲り、これまでの研究に基づいて、分類と編年のおおまかな枠組みと問題点を提示する。

紅村によって示された5種類の遠賀川式土器の分類のうち、第1類（正統遠賀川）、第2類（亜流遠賀川）、第4類（削痕遠賀川）の3者が当地域の遠賀川集団の内部で生産されたものであり、遠賀川集団の領域外部に分布し、そこで生産されたと考えられる第3類（条痕紋系）と第5類（大洞系）は遠賀川式土器の中からは除外すべきである。しかも、その編年的位置づけでは鈴木（注5）が指摘するように第2類は新段階に当たり、紅村の示した3者は同時存在したものではなく、畿内第1様式の古・中段階には第1類と第4類、新段階には第1類と第2類の両者が存在したとすべきであろう。また、第4類の特徴である削痕調整は甕だけに見られるものであるが、第2類は甕と壺の両者にみられるものであり、器種構成が異なっている。第2類のいわゆる亜流遠賀川のような在地化は伊勢湾以西の各地で普遍的にみられる新段階における遠賀川式土器の在地化と同様の現象であり、伊勢湾沿岸地域の特殊性を示すものではない。

伊勢湾沿岸地域の遠賀川式土器の分類と編年は基本的に畿内の状況と対応するものであり、第I様式古・中段階と新段階の大きく2時期に区分されることは各遺跡の遺構切り合い関係（注6）から明らかである。この2時期はさらに細分される可能性が高く、細分案（注7）も提示されているが遺構の切り合い関係からの検証は資料が少なく困難である。しかし、型式学的特徴からは細分可能であり、将来遺構での出土状況から時期区分の問題は解決されるだろう。

白石遺跡の土器は石黒により評価が与えられており、今回は石黒の提示した編年案をもとに検討を加えることにする。石黒の指摘する壺の器形の変化や文様・調整技法の変化は基本的に

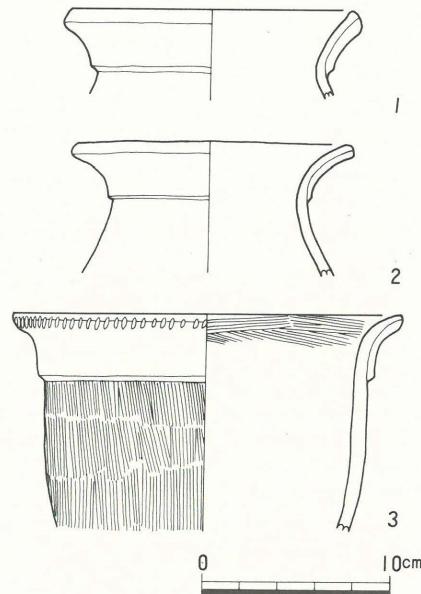
畿内の状況と共通するものであり、I期-1・2は畿内I様式の古・中段階、I期-3・4は新段階にほぼ対応すると考えて差し支えないであろう。そこで以下では大きく2段階に分けて説明する。

白石遺跡の土器はI-2期古にあたる。壺（第19図2）は頸部が断面三角形の細い貼付突帯、肩部が段を有し、肩部と胴部に二条の沈線が施されたものであり、甕（第20図9）は頸部に沈線を引き、そこを起点にして、ヘラ状工具で下方に押え、段を作り出したものである。両者とも技法的には古い要素をもっているが最古のものではない。I期-1とした貝殻山貝塚出土の壺は頸部にも段を有し、白石遺跡のものよりさらに古い要素を示しているが、伊勢湾沿岸地域にはこれらよりもさらに古いと考えられる土器が存在している。

三重県の中ノ庄遺跡と愛知県の西志賀貝塚出土の壺と甕（第38図）（注8）で、口縁部の段が粘土帯の貼付によって形成されているものである。これらは九州では板付遺跡に共通する技法である（注9）。これらの型式の土器は確認できる量がきわめて少なく、単純にこれらの型式だけの時期が設定できるかどうかは確認できないが、型式学的には明確に分離できるものである。伊勢湾沿岸地域に進出してきた遠賀川集団がもっていた古い要素で、石黒のI期-1と時期的に並行するものと考えられる。

伊勢湾沿岸の各地域における遠賀川集団の出現は畿内以西からの移住拡大によるものと考えられるが、一型式の時間幅の中において畿内とほぼ同時と考えて差し支えない程度の時間差しかないであろう。白石遺跡は土器型式の点からは伊勢湾沿岸地域に遠賀川集団が出現してから、さほど時間をおかずにつくられた集団であったと考えられる。白石遺跡の出現時期については以上の土器編年から推定できるが、集団の内部構造については土器型式の分布と遺跡の構造の違いから推定できる。

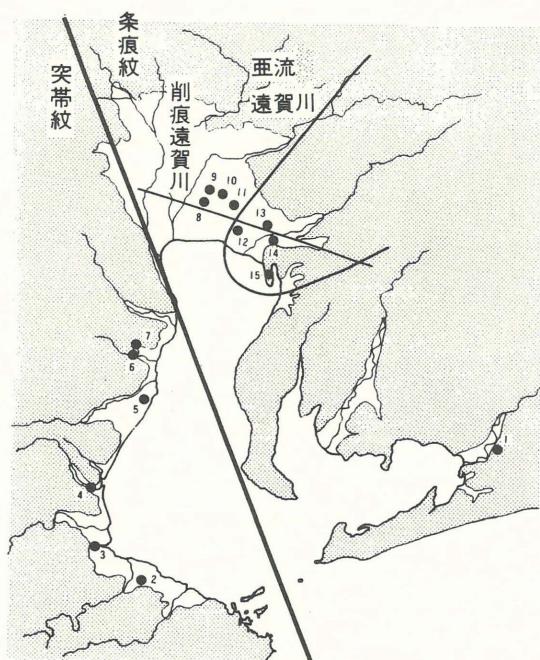
遺跡の構造では、遠賀川の集落は基本的に環濠集落であるが沖積地と段丘上では異なった形態をとっている。沖積地では全形が明らかになったものはないが、近年の発掘調査では環濠と推定される溝が確認されており、一般的な環状のものと考えられる。段丘上では、段丘端部から内部に向かって半円形に広がる特徴的な形をしている（注10）。この段丘上の環濠はこれまで三重県大谷・永井遺跡、愛知県高蔵遺跡（注11）で確認されており、今回確認された白石遺跡が4例目になる。これらはいずれも複数の環濠を持ち、当初小規模だったものが拡大して行ったものと推定されている。これらはほぼ同じ規模をもち、最も内側の環濠の半径は約50m、面積約4000m²、外側の半径は約100m、面積約16000m²であり、半径で2倍、面積で4倍になっている。



第38図 有段口縁の壺・甕 (1/4)

土器型式の分布では、I-1・2期には、紅村の第4類（削痕遠賀川）は尾張平野低地部においても北部の地域にかたよって分布し、分布しない南部と二つの地域が設定できるようである（注12）。伊勢平野においても、鈴木の指摘（注13）のように一部にナデ調整の甕が存在し、白石遺跡においても確認されている（第21図13）。I-3・4期でも、鈴木の設定する亜流遠賀川が分布する地域としない地域が設定でき、弥生前期を通じて、伊勢湾沿岸地域の遠賀川集団の中にも複数の地域が設定できる（第39図）。白石遺跡ではI-3・4期の土器としては亜流遠賀川が確認されており、尾張低地南部および名古屋台地とは異なり、弥生前期を通じて常に伊勢との関係が強い。

以上のような状況の中で集団関係復元のために、その単位をどの様に設定するのかを明らかにする。地域を考える場合の一般的な単位は個々の遺跡であるが、全ての遺跡が同じ様な状況を示すものではなく、規模の点で不均一性を示している。最も小さな遺跡は白石遺跡のように台地上にある環濠集落である。この中には大谷遺跡で確認されているような複数の竪穴住居址があったと考えられるが、いくつの竪穴住居があったかは明らかでない。遺構で確認できる最小の単位はこの台地上の集落が形成された最初の時点である。これらの台地上の集落はいずれも時間と共に拡大する傾向がある。また、永井・大谷遺跡のように確認されている環濠の最も外側を考えても、土器の出土量や遺構の状況から納所遺跡や朝日遺跡のような沖積地の中心集



- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|-----------|
| 1. 白 石 | 2. 金剛坂 | 3. 中ノ庄 | 4. 納 所 | 5. 上箕田 |
| 6. 永 井 | 7. 大 谷 | 8. 河 田 | 9. 山 中 | 10. 馬見塚 D |
| 11. 元屋敷 | 12. 朝 日 | 13. 月繩手 | 14. 西志賀 | 15. 高 蔵 |

第39図 遺跡分布図

落よりも明らかに小規模である。つまり、個々の遺跡での状況からは台地上の環濠の最小段階、最大段階、沖積地の中心集落段階の量的な3段階が想定できる。これらの内、遺跡を単位にすると少なくとも台地状の小規模遺跡と沖積地の大規模遺跡の2者が明確に分離できる。また、遠賀川集団は土器型式の分布から複数の遺跡が何等かの関係のもとに複数の地域を形成していたことが確認でき、伊勢湾沿岸の遠賀川集団全体を最大単位にすると、最小から最大まで少なくとも4段階の集団単位を設定できる。

これに対して、弥生前期の在地の条痕紋土器は樫王式と水神平式が設定され、伊勢湾東岸地域に分布するが、伊勢湾西岸地域には突帶紋土器の系譜の土器が分布している（注14）。当時期の土器は遠賀川式土器のように内部が

細分されることもなく、良好な遺構も確認されていないため十分とは言えないが、土器型式の上では伊勢湾沿岸地域は条痕紋土器の分布する東岸と突帶紋土器の分布する西岸の両地域が設定できる。

以上のような状況から、白石遺跡は伊勢湾沿岸地域に遠賀川集団が進出して以後、早い時期に分派した最小の集団単位であることが明らかとなった。白石遺跡の集団は遠賀川集団の本来の領域を離れ、条痕紋土器の集団領域の中に飛び地を形成しており、入植者集団であったと考えられる。この集団は地理的には周囲の条痕紋集団との関係を保ちながらも、土器型式の上では弥生前期を通じて常に伊勢平野の集団との関係が強く、遠賀川集団としての独自性を保ち、在地化はほとんど認められない。これは当地域において、畿内第III様式並行期に外来系と在地系との折衷により独自の土器様式が成立することと対象的である。白石遺跡の遠賀川集団の中には在地の人間集団の参加は十分には認められず、農業生産のみならず手工業生産をも含めた経済的関係や婚姻関係などの社会的関係は遠賀川集団の枠組みの中で行われていたものと考えられる。

- 注1 費元洋他「白石遺跡」『ホリデー考古』第4号
- 注2 紅村弘・吉田富夫『名古屋市西志賀貝塚』1958年、紅村弘「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』1981年、
- 注3 久永春男「三東海」『日本の考古学III』1966年
- 注4 伊藤久嗣『納所遺跡』1980、鈴木克彦「亜流遠賀川式土器」再考」『Miehistory』vol. 2 1990、石黒立人「遠賀川系土器」『山中遺跡』1992
- 注5 亜流遠賀川式土器の型式学的再定義と編年については鈴木克彦「亜流遠賀川式土器」再考」『Miehistory』vol. 2 1990による。
- 注6 三重県納所遺跡、愛知県西志賀貝塚・貝殻山貝塚において切り合いを持った層位別資料が確認されている。伊藤久嗣『納所遺跡』、杉原莊介、岡本勇「愛知県西志賀貝塚」『日本農耕文化の生成』1981年、愛知県教育委員会『貝殻山貝塚発掘調査報告書』1972年
- 注7 石黒立人「遠賀川系土器」『山中遺跡』1992
- 注8 1・2は中之庄遺跡、三重県教育委員会『中之庄遺跡発掘調査報告』1972年に加筆、3は貝殻山貝塚の名古屋市博物館所蔵資料を実測した。
- 注9 山崎純夫「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『古文化論叢』1980年
- 注10 石黒立人「弥生社会の成立と解体の理解に向けて－1」『考古学の広場』第3号1986年
- 注11 『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題II』1988年
- 注12 紅村弘「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』1981年、
- 注13 鈴木克彦「亜流遠賀川式土器」再考」『Miehistory』vol. 2 1990年
- 注14 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帶文深鉢の様相」『三重県史研究』第6号1990年

3. 石器の石質同定

A. 石材の分類

白石遺跡から出土した219点の石鏃、磨製石斧などの石材について、ルーペによる肉眼観察を行い、石材の組織や表面の特徴から17種類に分類した。また、同遺跡から出土した石器で今回の分類対象としなかった試料の中から、それぞれの岩質を代表すると思われる試料の岩石薄片を製作し、偏光顕微鏡下で観察した。以下、分類した主な岩石の特徴を記す。

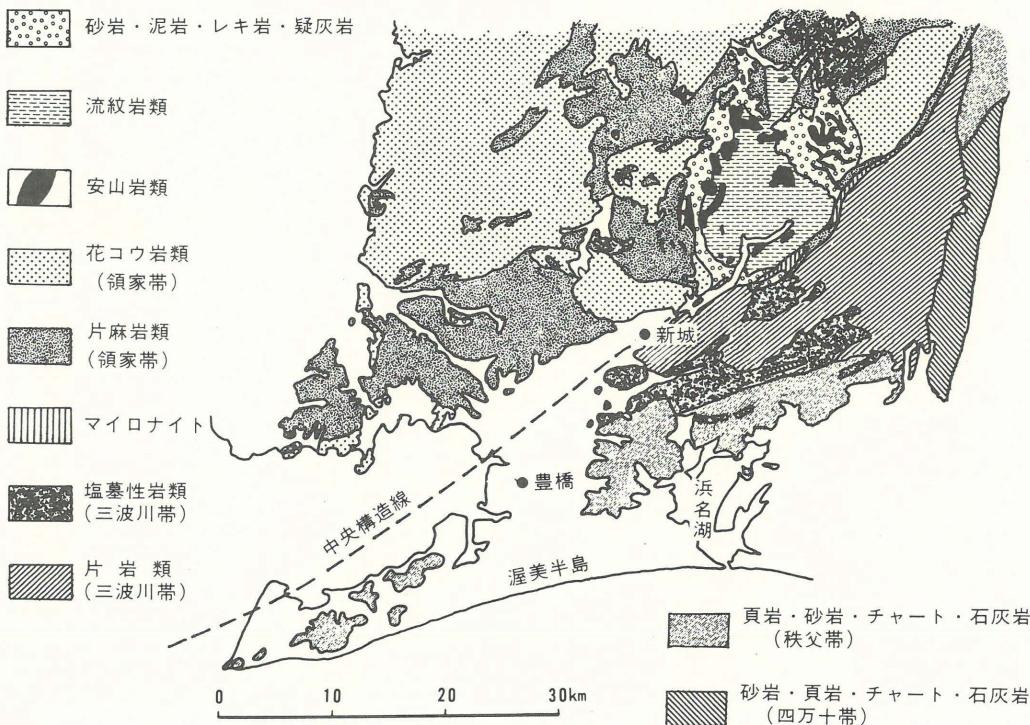
岩石名	外 観	ルーペ観察	偏光顕微鏡下
安山岩 1	全体に暗灰色、表面に白い粉がついたように見える。	緻密で班晶がない。片理構造や鉱物の方向性がない。	大きな班晶はない。方向性がある小さい斜長石・輝石を含む。
安山岩 2	灰黒色で緻密	班晶はきわめて少ない。片理構造や鉱物の方向性がない。	班晶は少ない。石基は非顕晶質で斜長石・輝石を含む。
チャート	黒・暗灰・灰白・灰緑・赤褐色など貝殻状断口、半透明・脂肪光沢があるものが多い。	緻密で班晶がない。片理構造や鉱物の方向性がない。	細粒の石英や玉髓からなる鉱物粒を区別することができない。
玄武岩	緻密だが表面が風化して淡褐色～灰色をしている。	班晶は少ない。片理構造や鉱物の方向性がない。	自形短冊状の斜長石で埋められている。班晶として斜長石・单斜輝石を含む。
ヒン岩	灰緑色、表面のところどころに鉱物が抜け落ちたような円形の穴がある	白い針状の鉱物が無方向にからみあうように詰まっている。	班晶と石基がはっきり区別できない。斜長石の自形短冊状の結晶で埋まっている。

塩基性岩のうち暗青～暗緑色で緻密なものは片理構造や鉱物の方向性はない。淡緑～濃緑色でややもろいものは片理構造がみられる。塩基性岩には、玄武岩、輝緑岩、ハンレイ岩、カン

ラン岩、蛇紋岩やその変質したものが含まれると考えられるが、肉眼観察での識別は困難である。黒色片岩、緑色片岩は三波川変成帯に分布するものと同じ岩質である。泥質岩には弱い片理構造がみられる。勾玉（図版番号55, 215, 219）は、硬度や表面の変質の仕方などから塩基性岩の変質によって生ずる蛇紋石である可能性が高い。また丸玉（図版番号216）と管玉（図版番号217, 218）の石材を肉眼観察から特定することは難しいが、硬度や緻密で班晶がないことなどから長石類、蛇紋岩質で珪酸分の多い岩石部分やチャートなどが考えられる。

B. 石材の産地

豊橋周辺では、ほぼ豊川沿いに走る中央構造線を境にして、北西側（西南日本内帯）と南東側（西南日本外帯）で地質が大きく異なる。チャートは外帯の豊橋東部の弓張山系、浜名湖北部と渥美半島の山地に分布するのみであり、均質で粘りのあるチャートの産地は限られることから、かなり選択・採取されたと考えられる。安山岩1は肉眼観察及び顕微鏡下でも通称“下呂石”と呼ばれる安山岩ときわめてよく似ている。しかし、安山岩類は内帯の設楽層群に产出することもあり、産地を特定するには、さらに多くの試料の採取と詳しい分析を行わなければならない。その他の岩石についても豊川に沿って分布する内帯・外帯に産する岩石であり、白石遺跡近くの豊川の河原（豊橋市下条東町当古橋付近）で、よく似た塩基性岩、花こう岩、流紋岩、玄武岩、ヒン岩の礫を採取することができた。



第40図 豊橋周辺の地質略図 (20万分の1地質図「豊橋」(1977) より)

以上のことから石材の多くは遠隔地から運び込まれたのではなく、豊橋周辺で採取されたものであると考えられる。

参考文献

森勇一、楯真美子「麻生田大橋遺跡出土の磨製石斧の石材について」『麻生田大橋遺跡』1991年 愛知県埋蔵文化財センター

謝 辞

本分類にあたり、愛知教育大学地球環境科学領域三宅明博士には岩石・鉱物の同定について有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表する。

写 真 図 版



遺跡遠景（南西から）

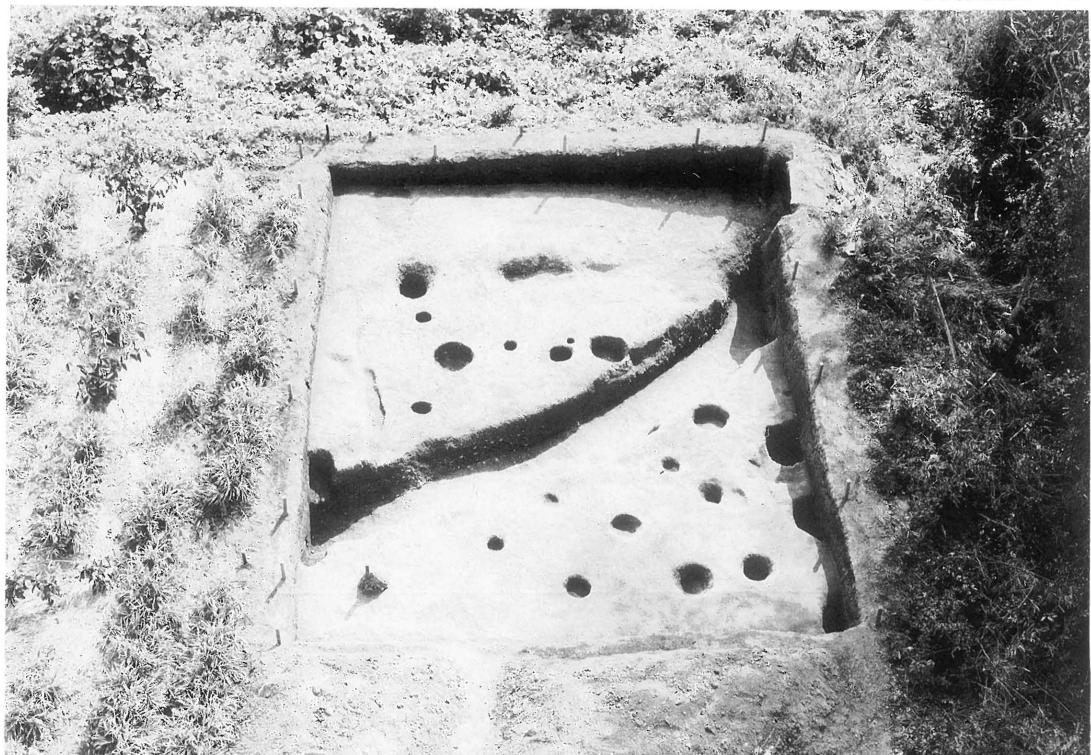
写真図版 1-2



発掘調査前（北から）



発掘区遠景（北東から）



発掘区近景（北から）

写真図版 3-1



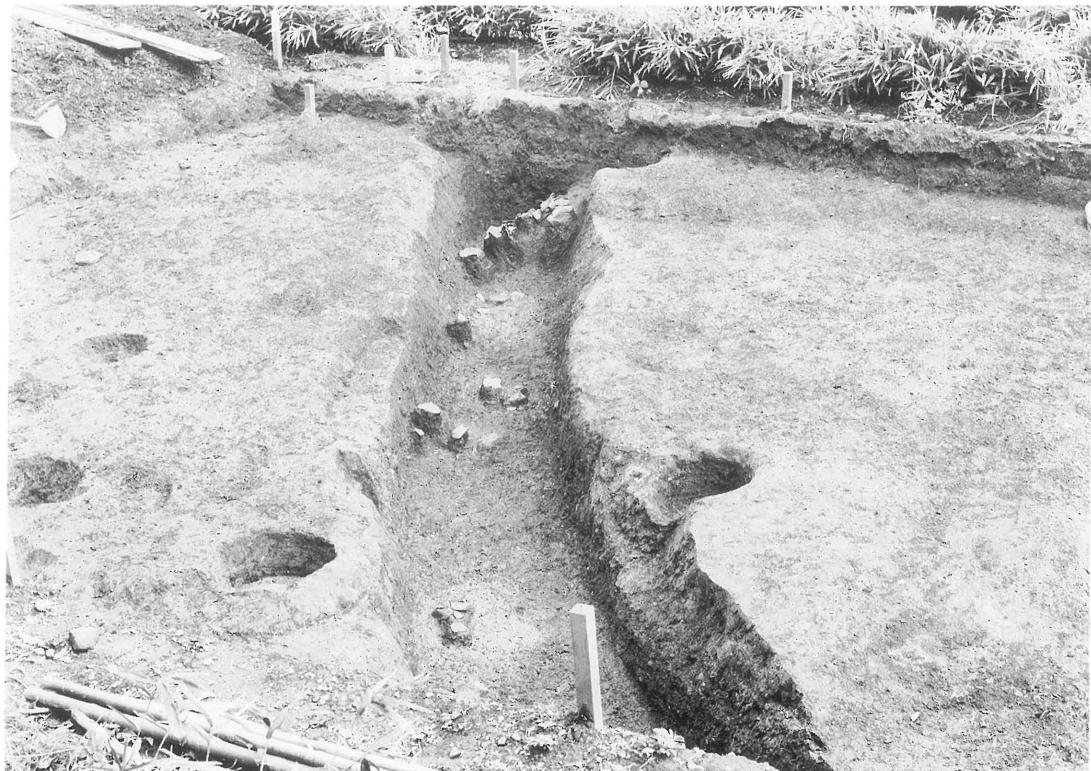
SD-1 全景（北から）

写真図版 3-2



SD-1 全景（西から）

写真図版 4-1



SD-1 遺物出土状況 1 (西から)

写真図版 4-2



SD-1 遺物出土状況 2 (東側)

写真図版 5 - 1



SD-1 遺物出土状況 3 (東壁付近)

写真図版 5 - 2



SD-1 遺物出土状況 4 (中央)

写真図版 6-1

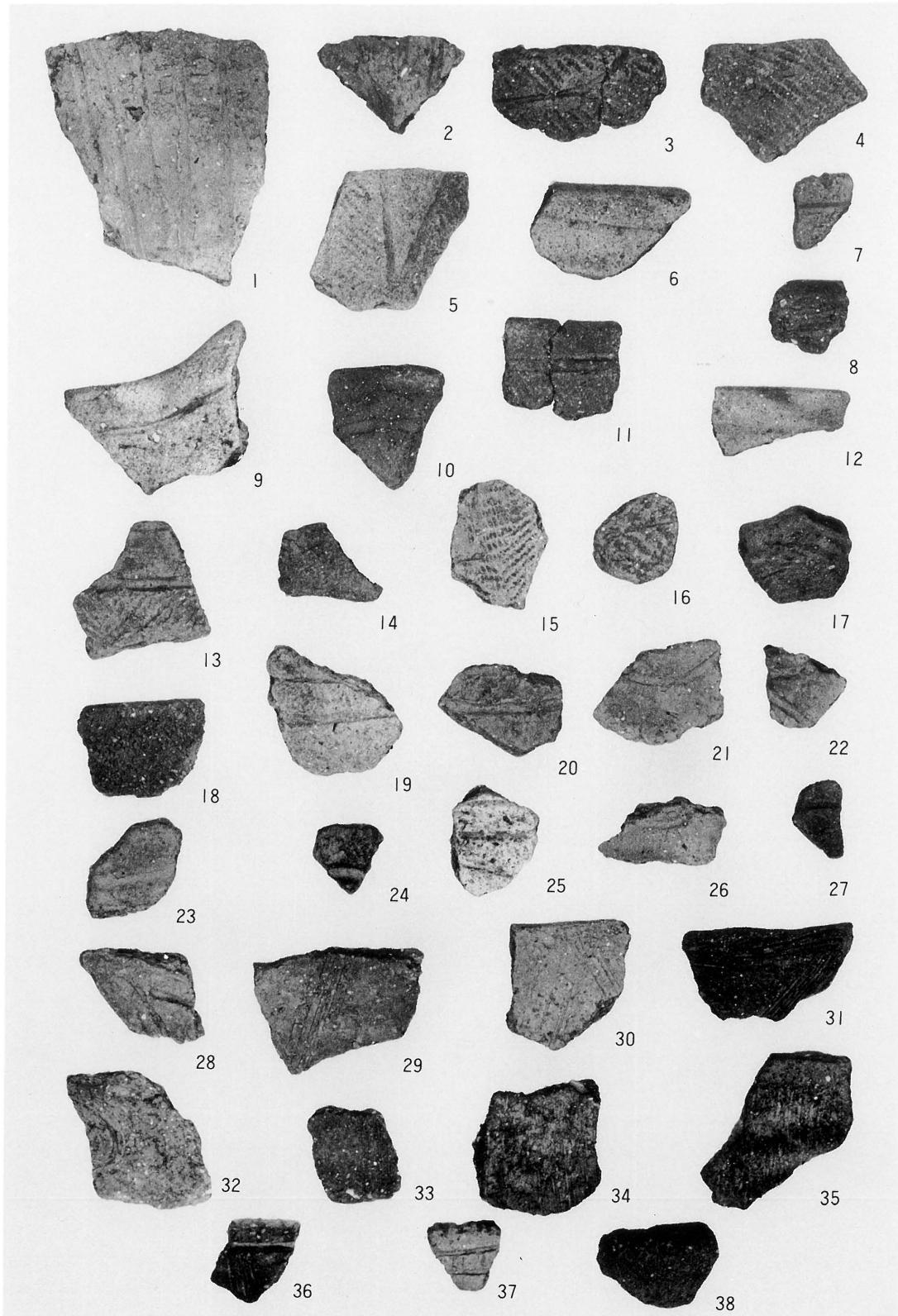


SD-1 遺物出土状況 5 (西側)

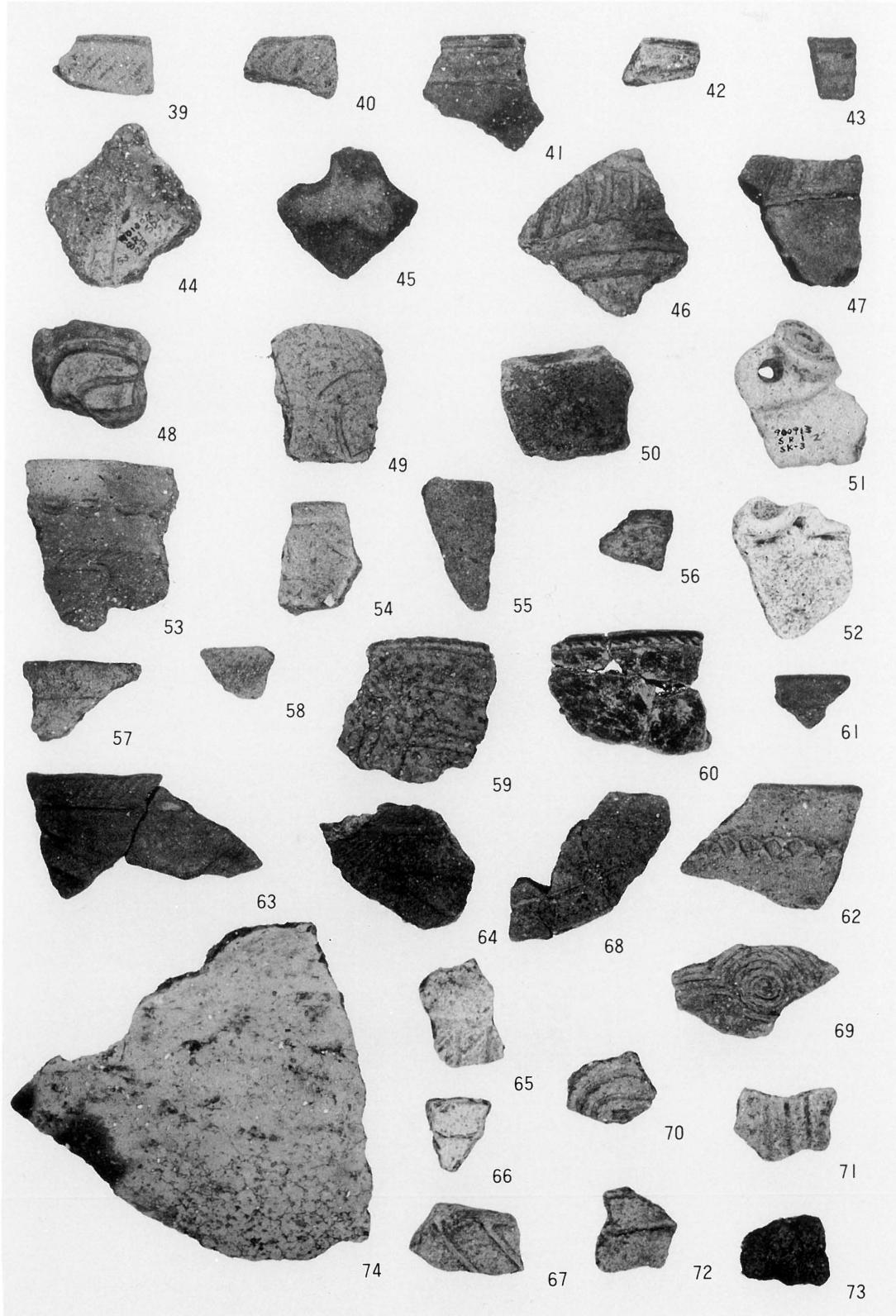
写真図版 6-2

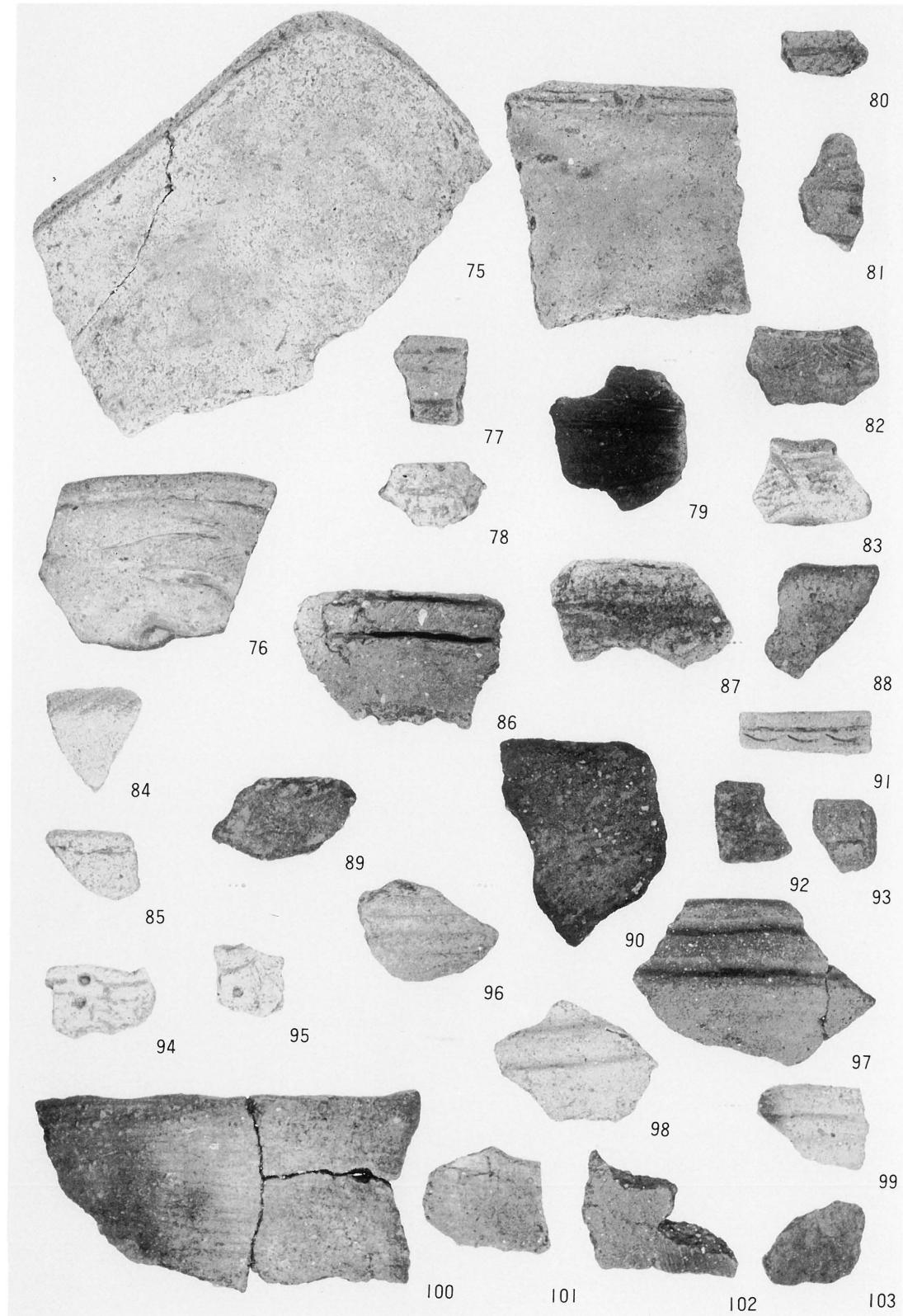


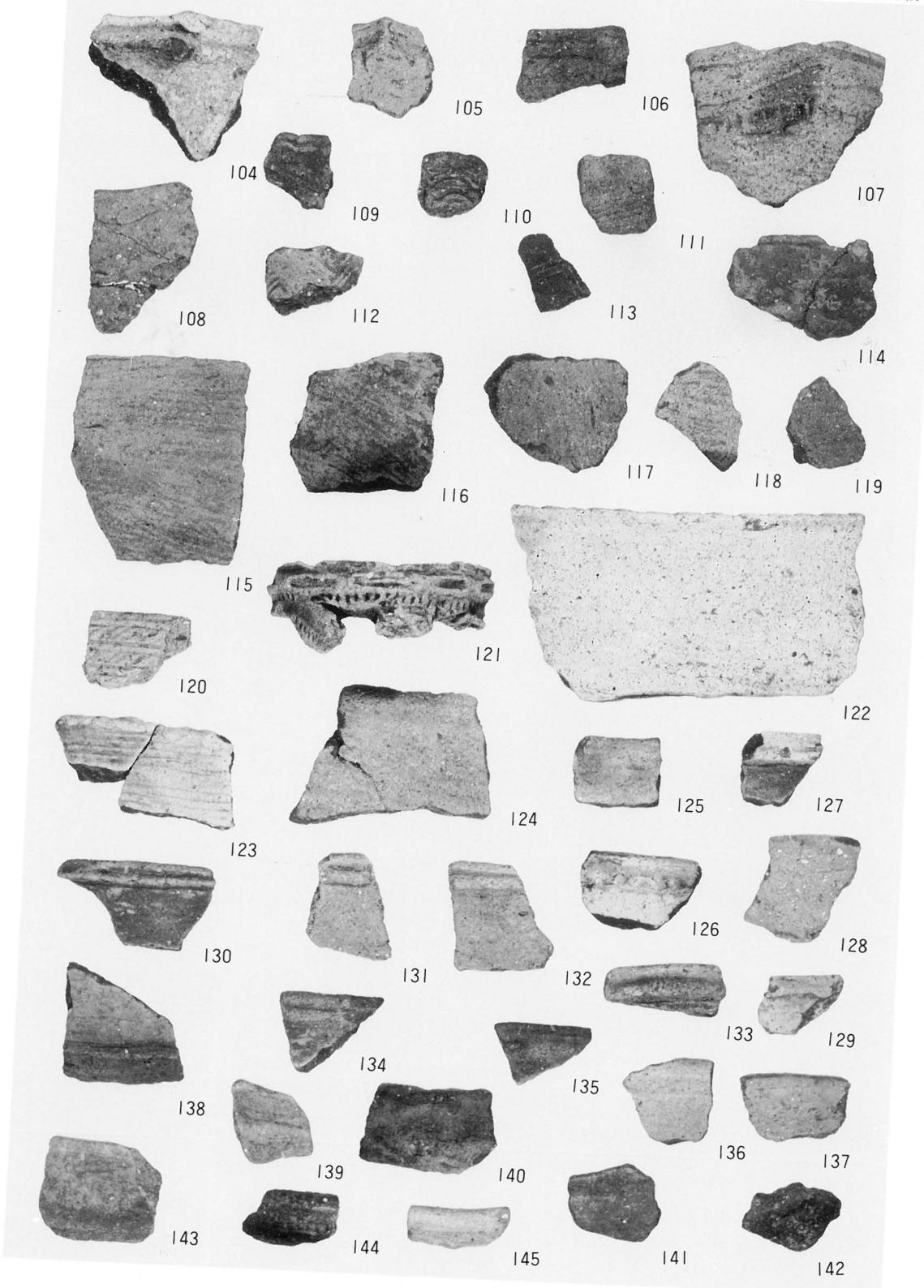
SD-1 東壁断面



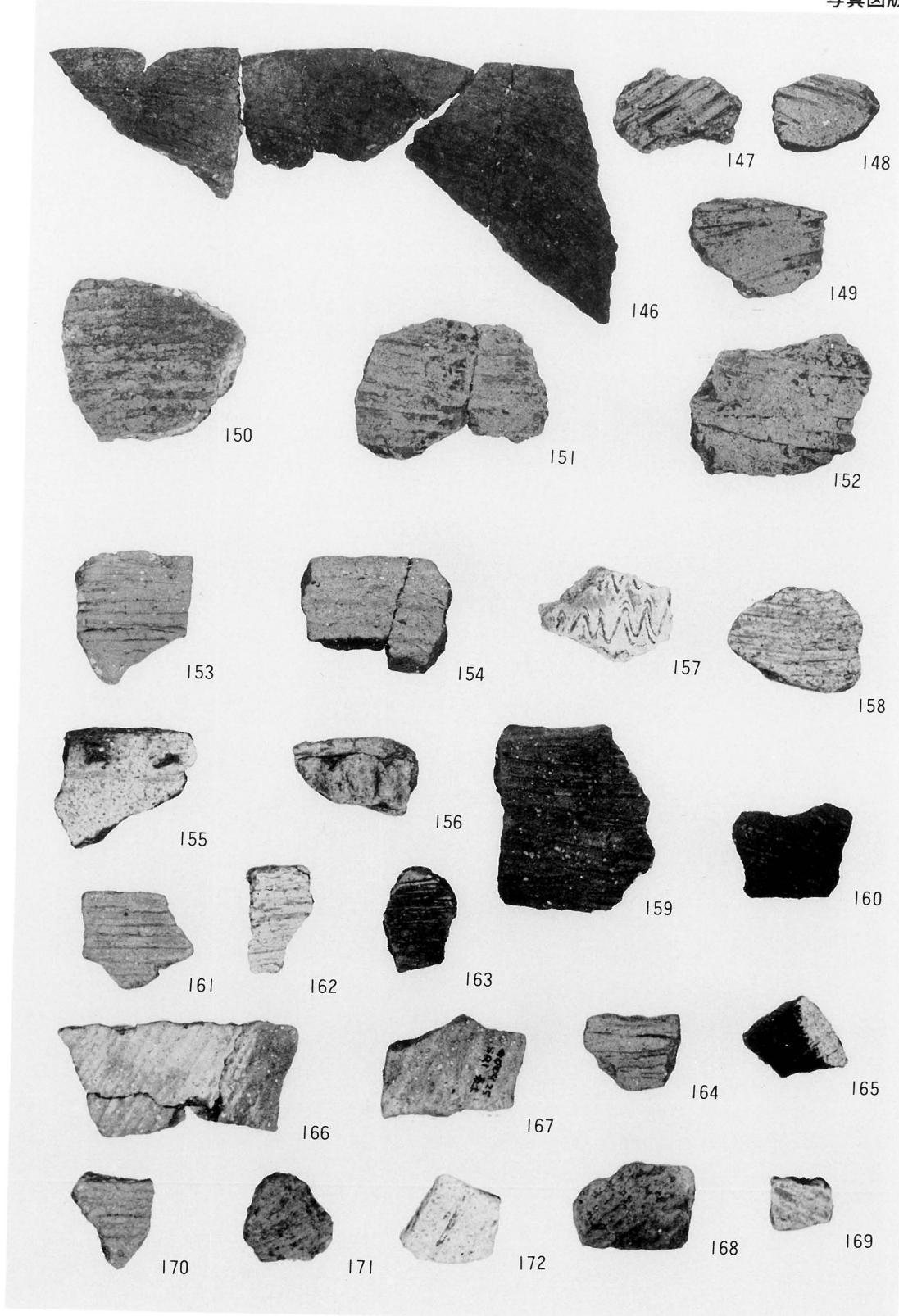
縄文土器 1



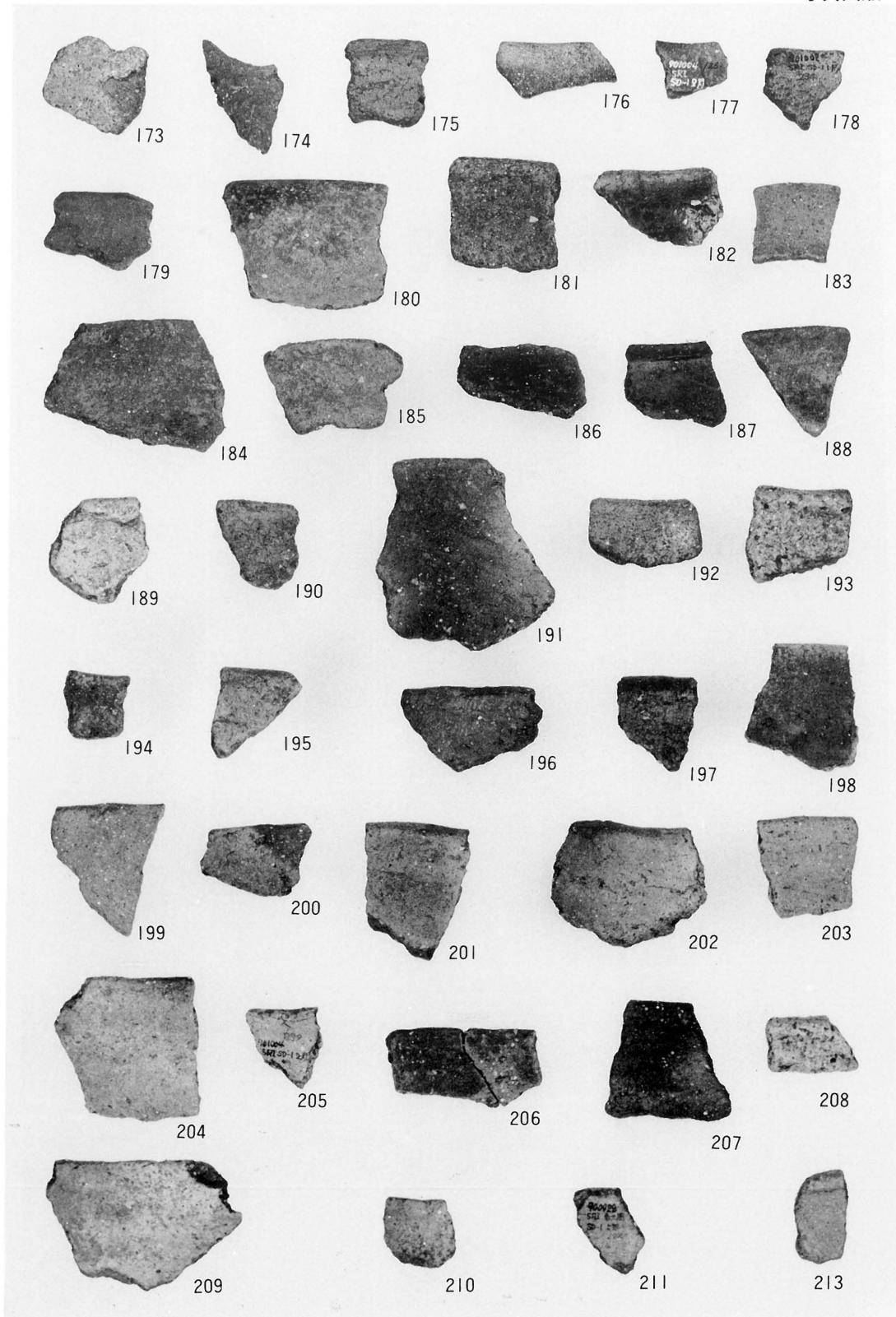


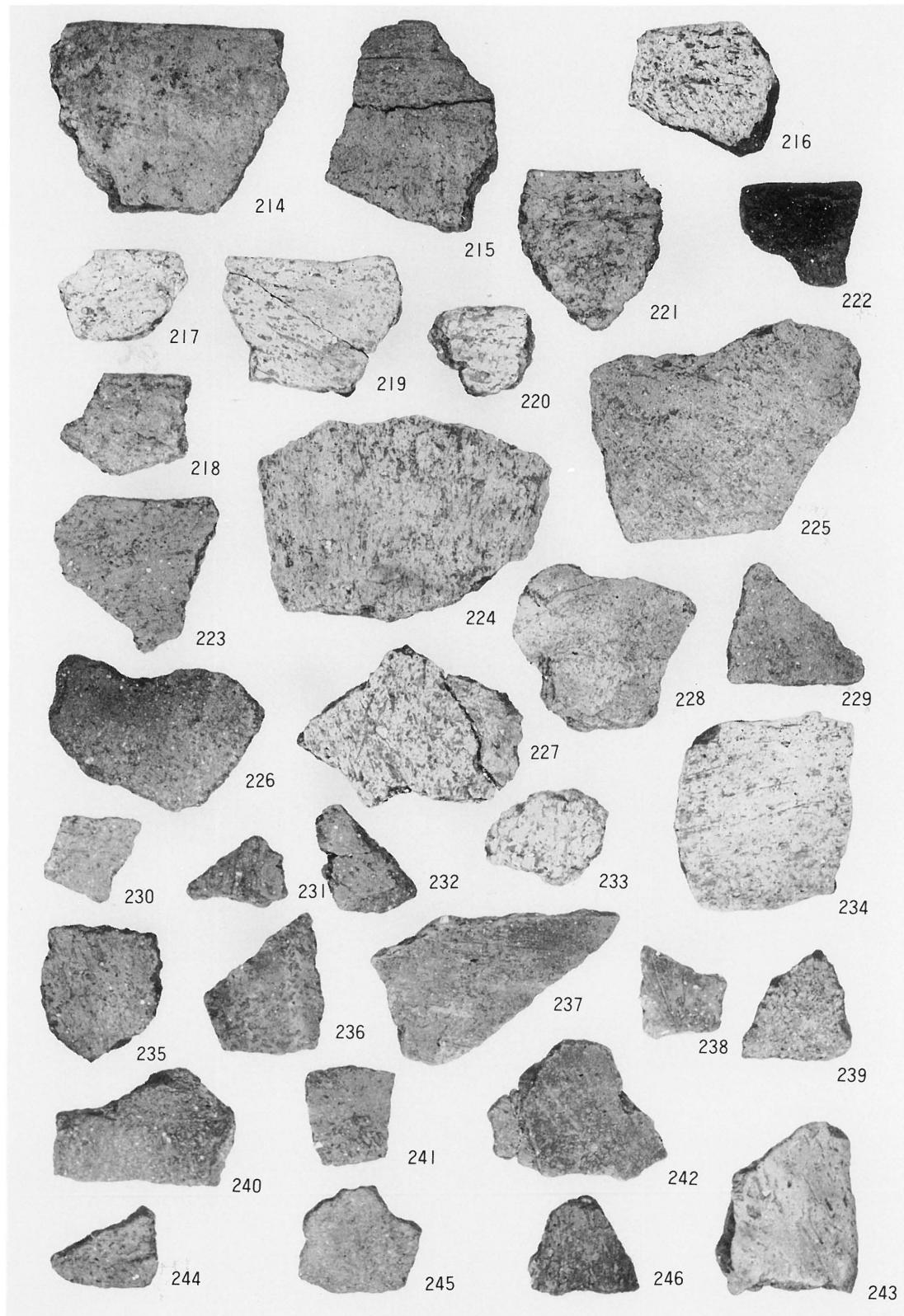


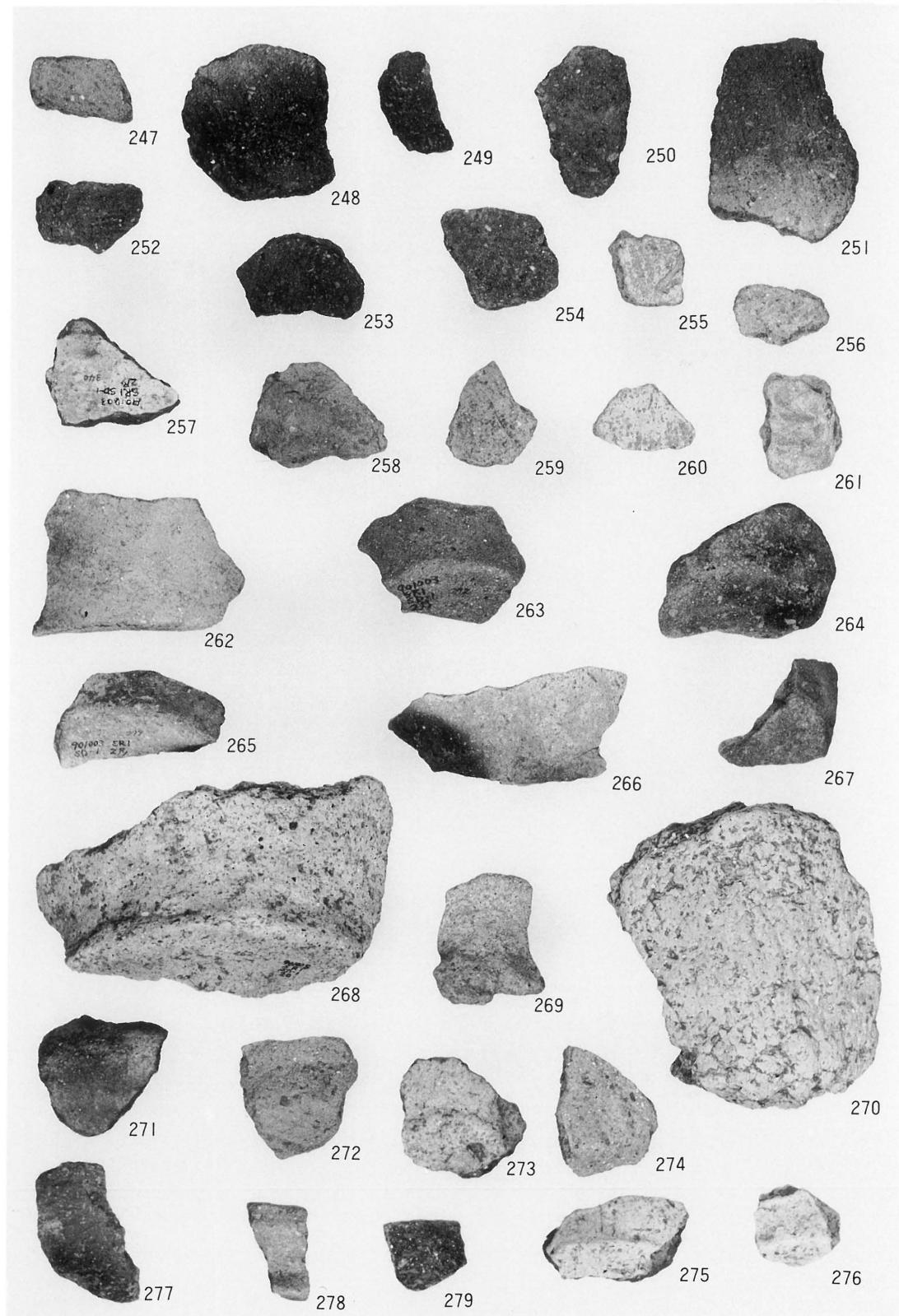
縄文土器 4



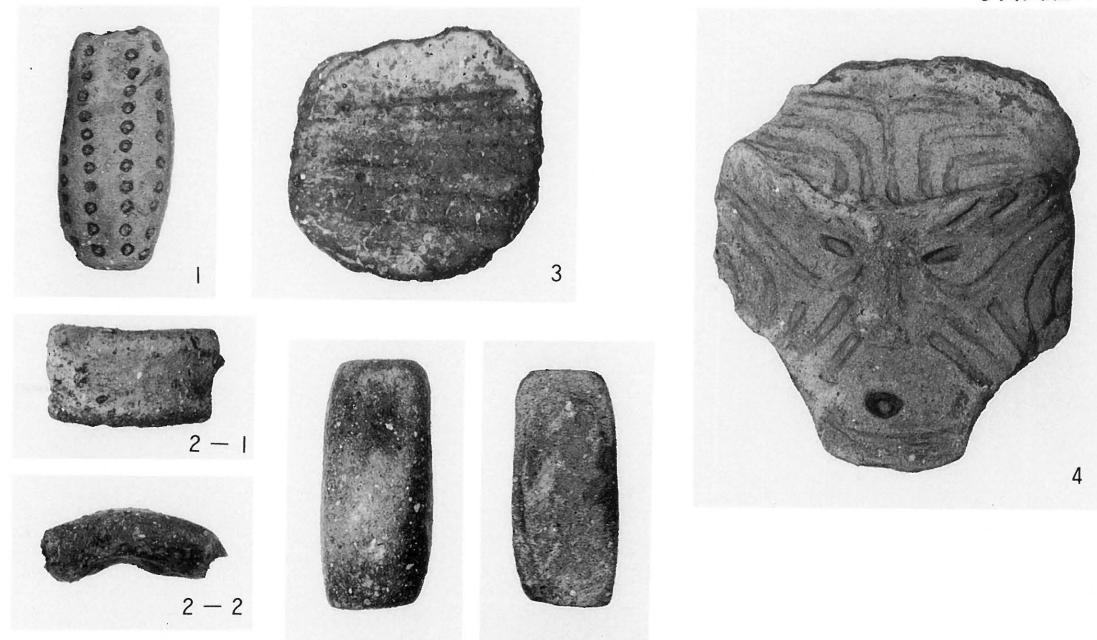
縄文土器 5





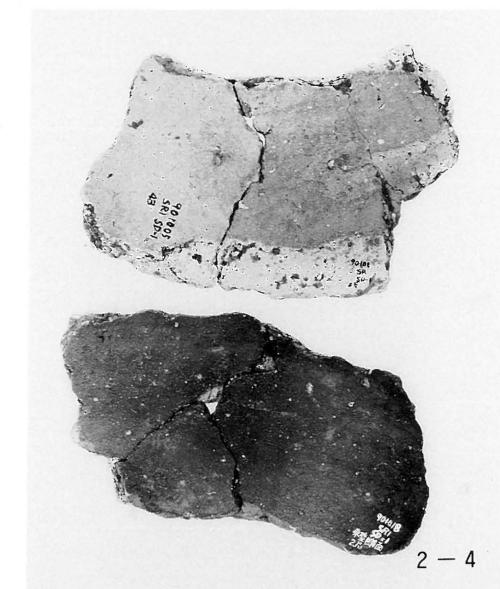
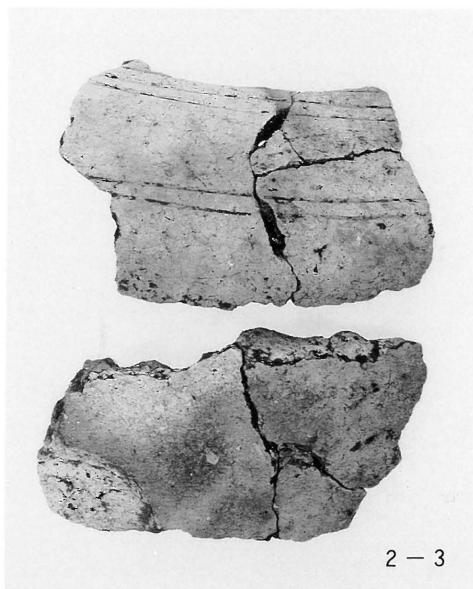
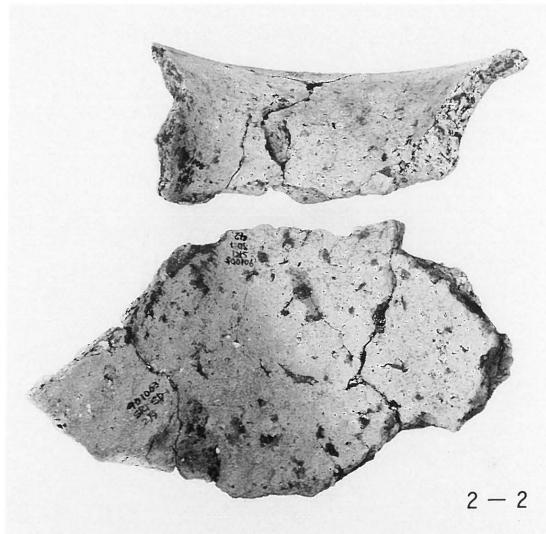
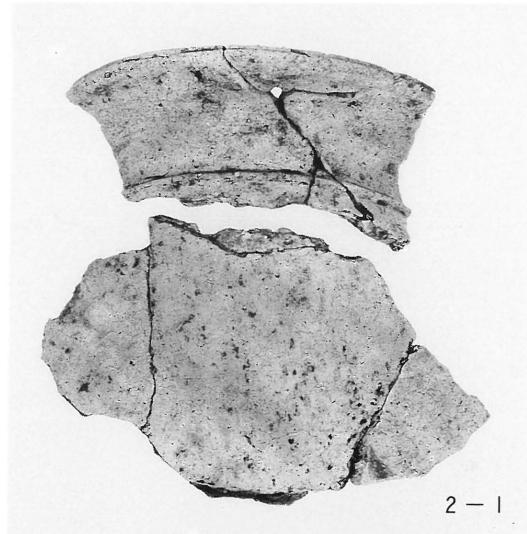


写真図版15

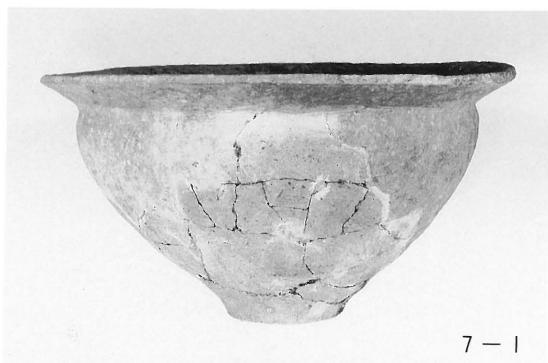


土製品・弥生土器 1

写真図版16



弥生土器 2



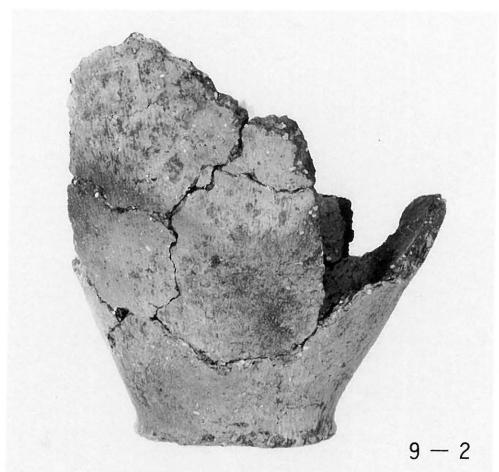
7-1



9-1



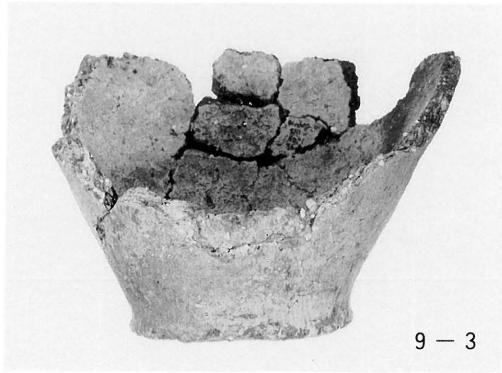
7-2



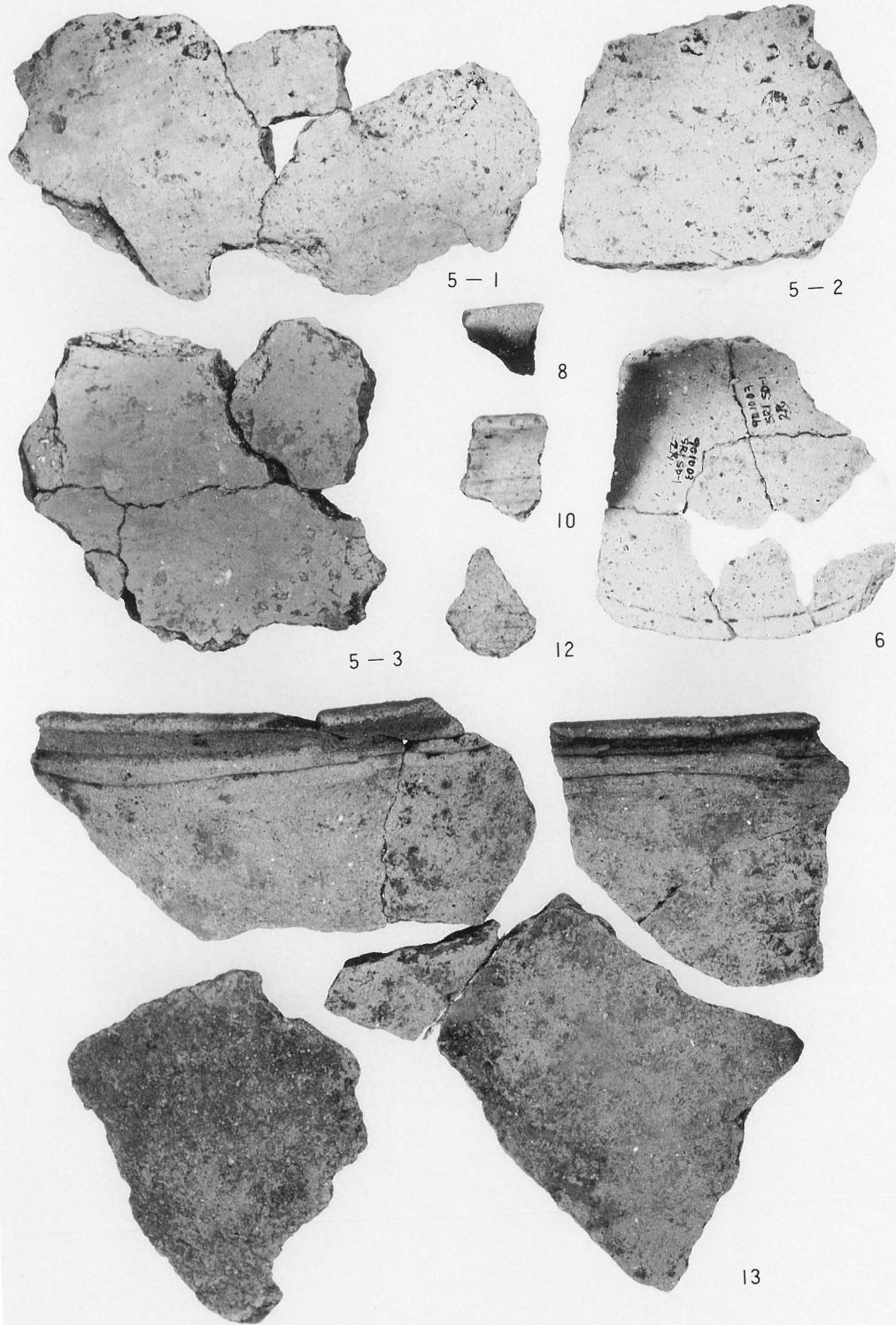
9-2



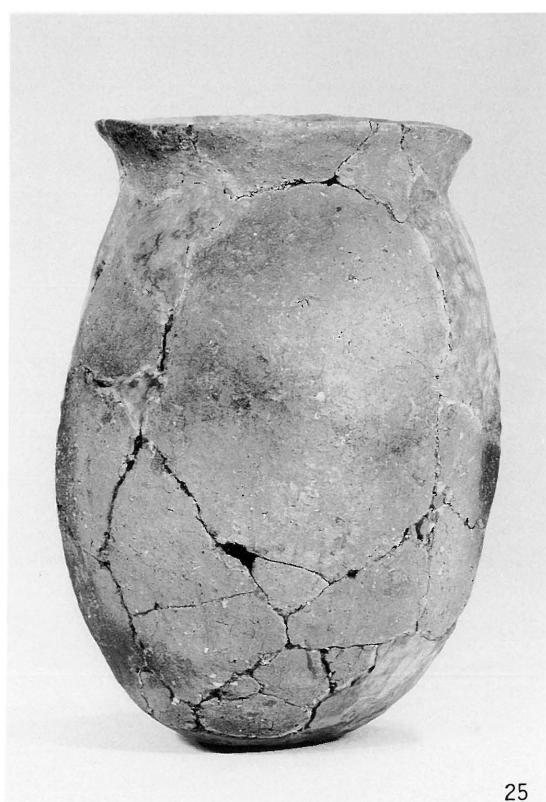
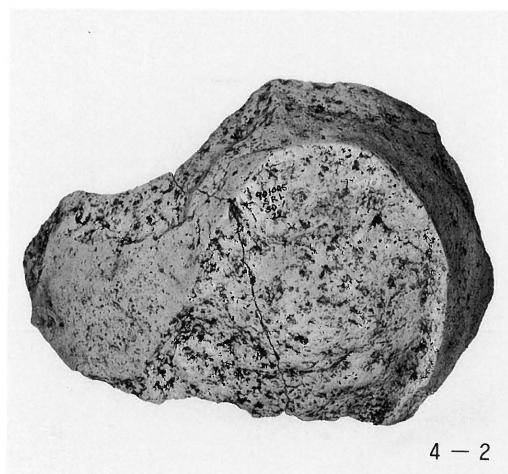
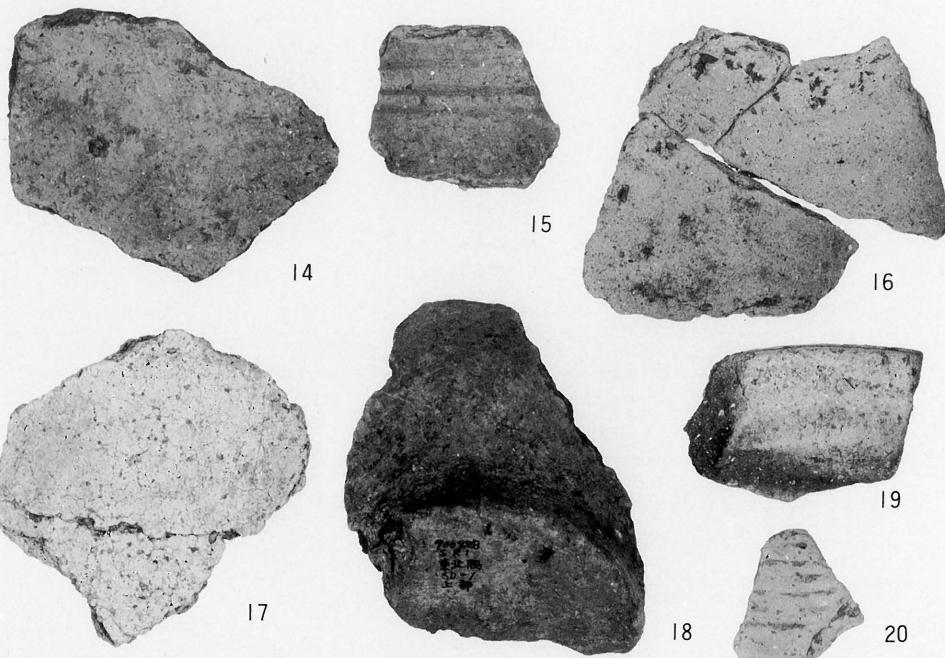
11



9-3



弥生土器 4



弥生土器 5・土師器 1

写真図版20



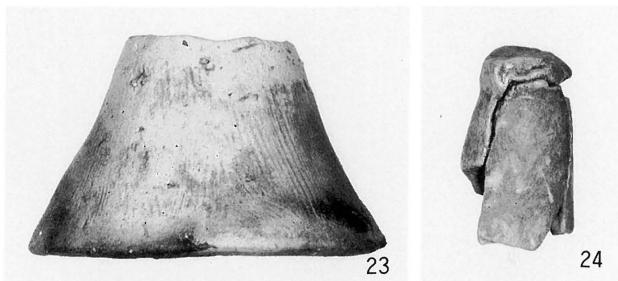
21



22

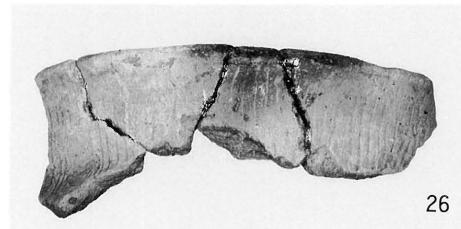


27

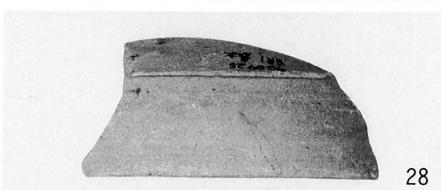


23

24



26



28



29



31



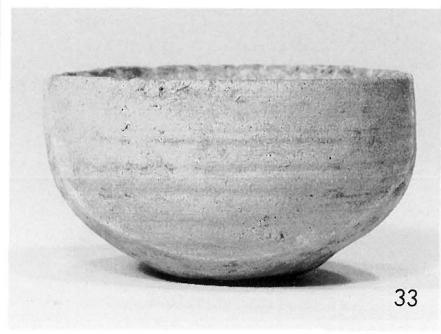
34



32

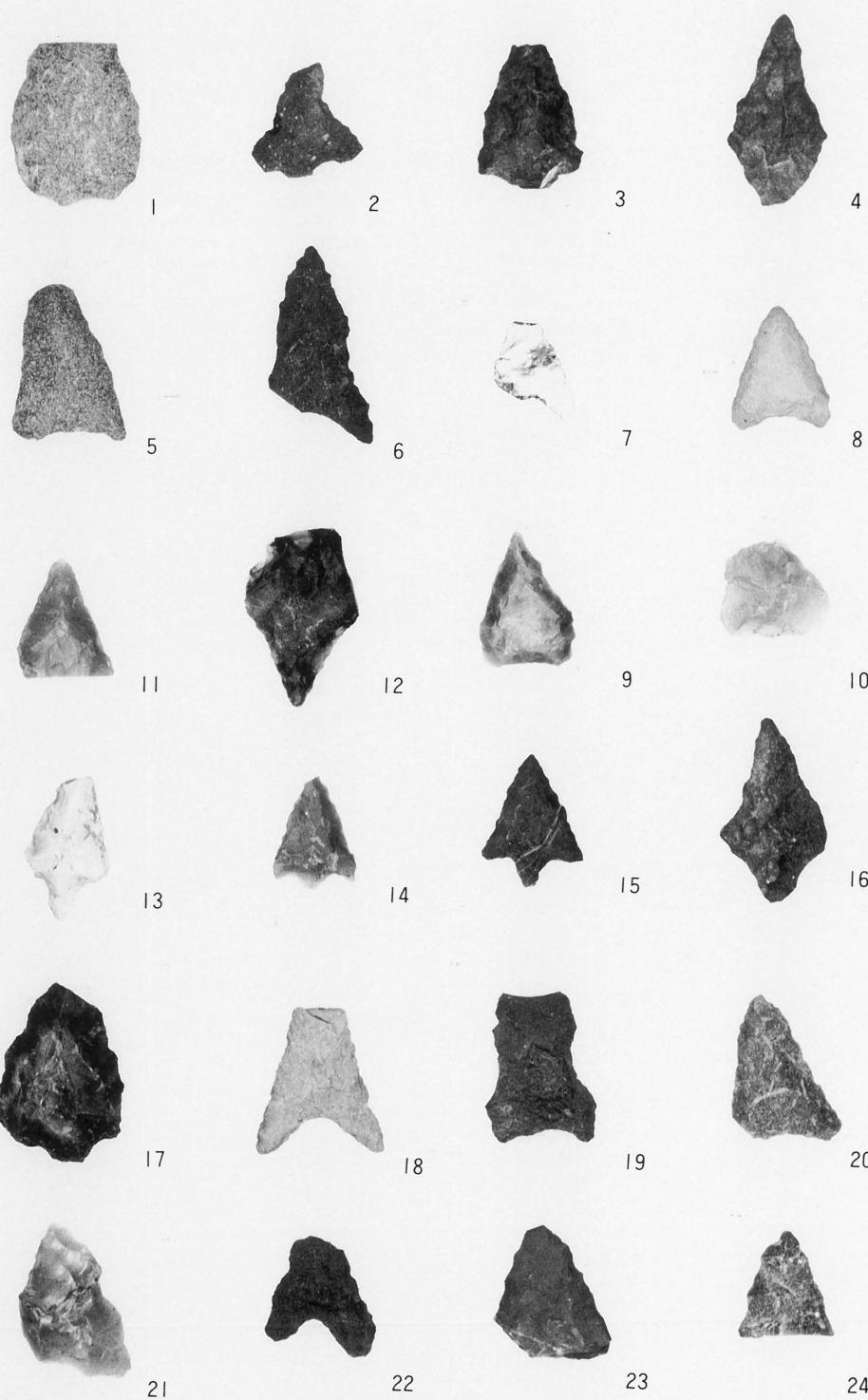


30

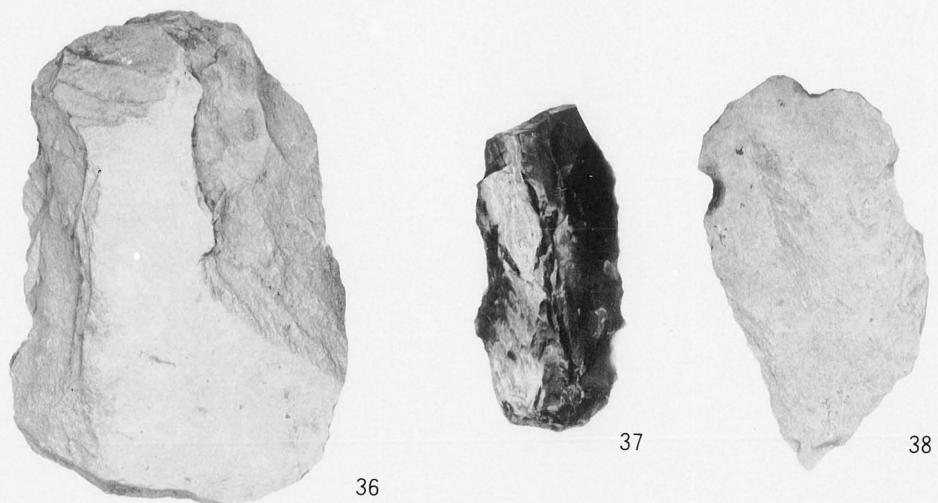
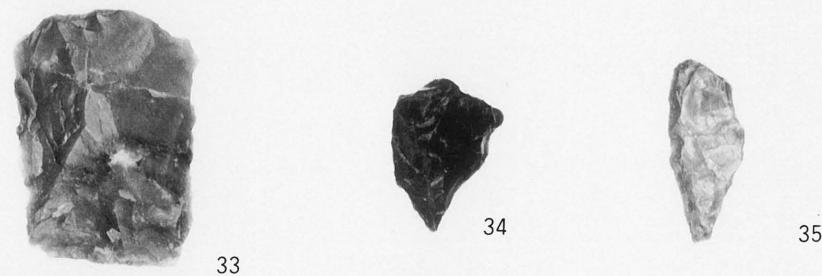
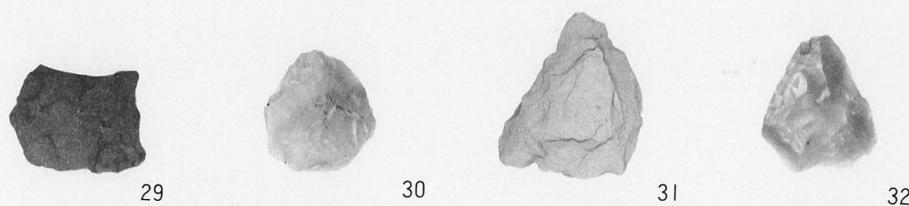


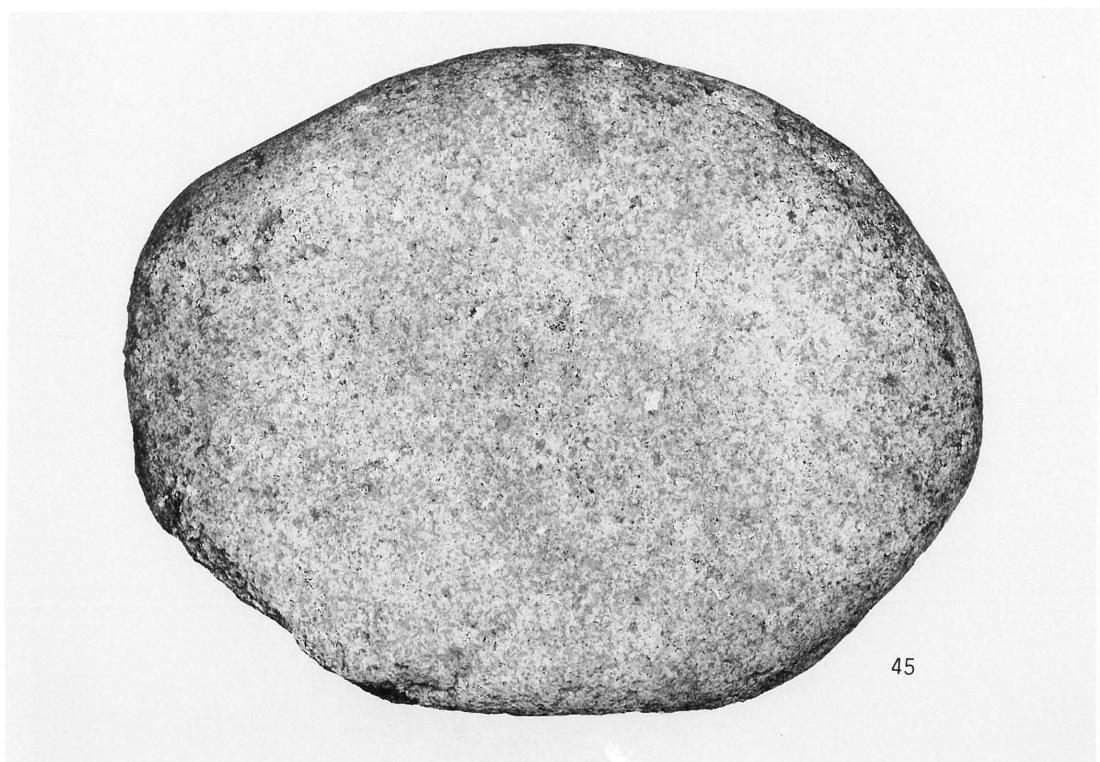
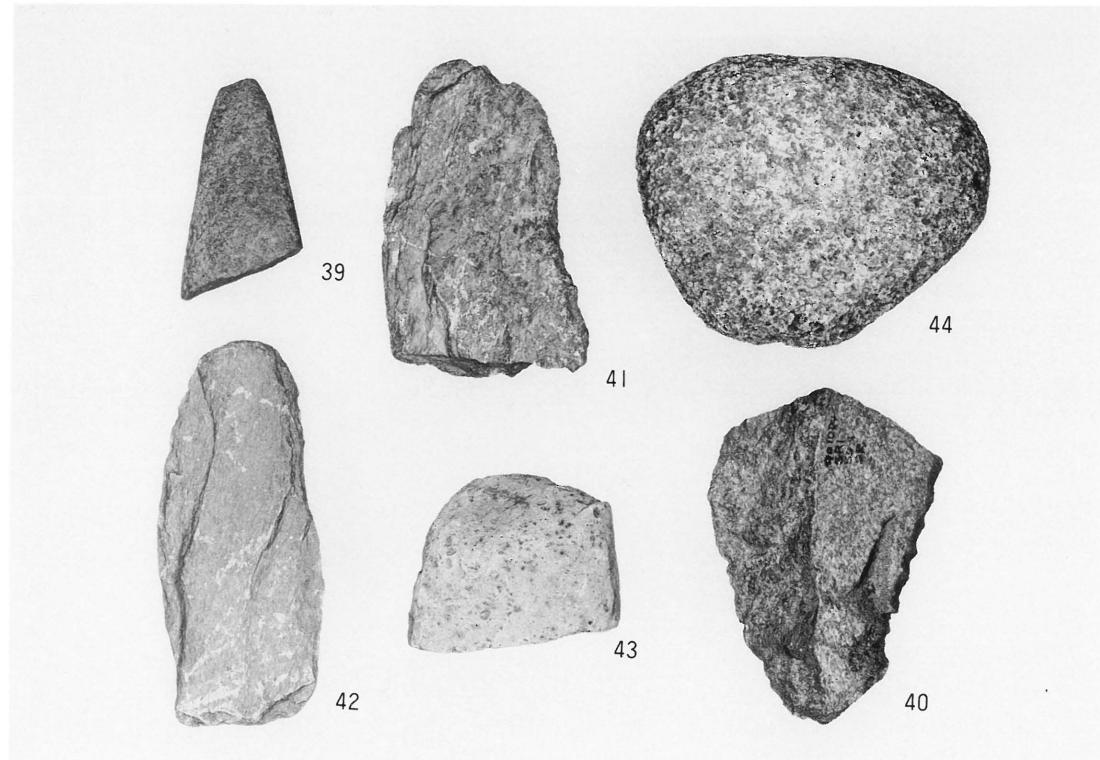
33

土師器 2・須恵器 1

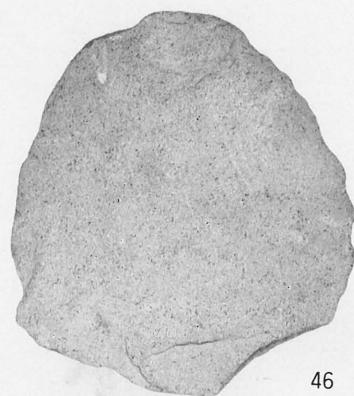


出土石器 1 (1 / 1)





出土石器 3



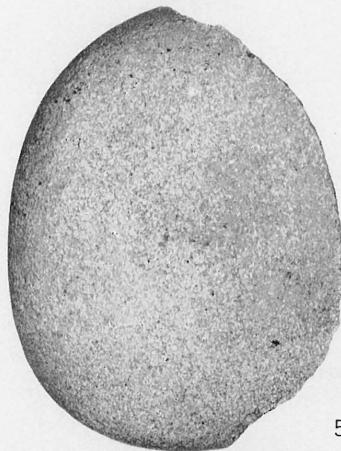
46



47



48



51



49



50



52



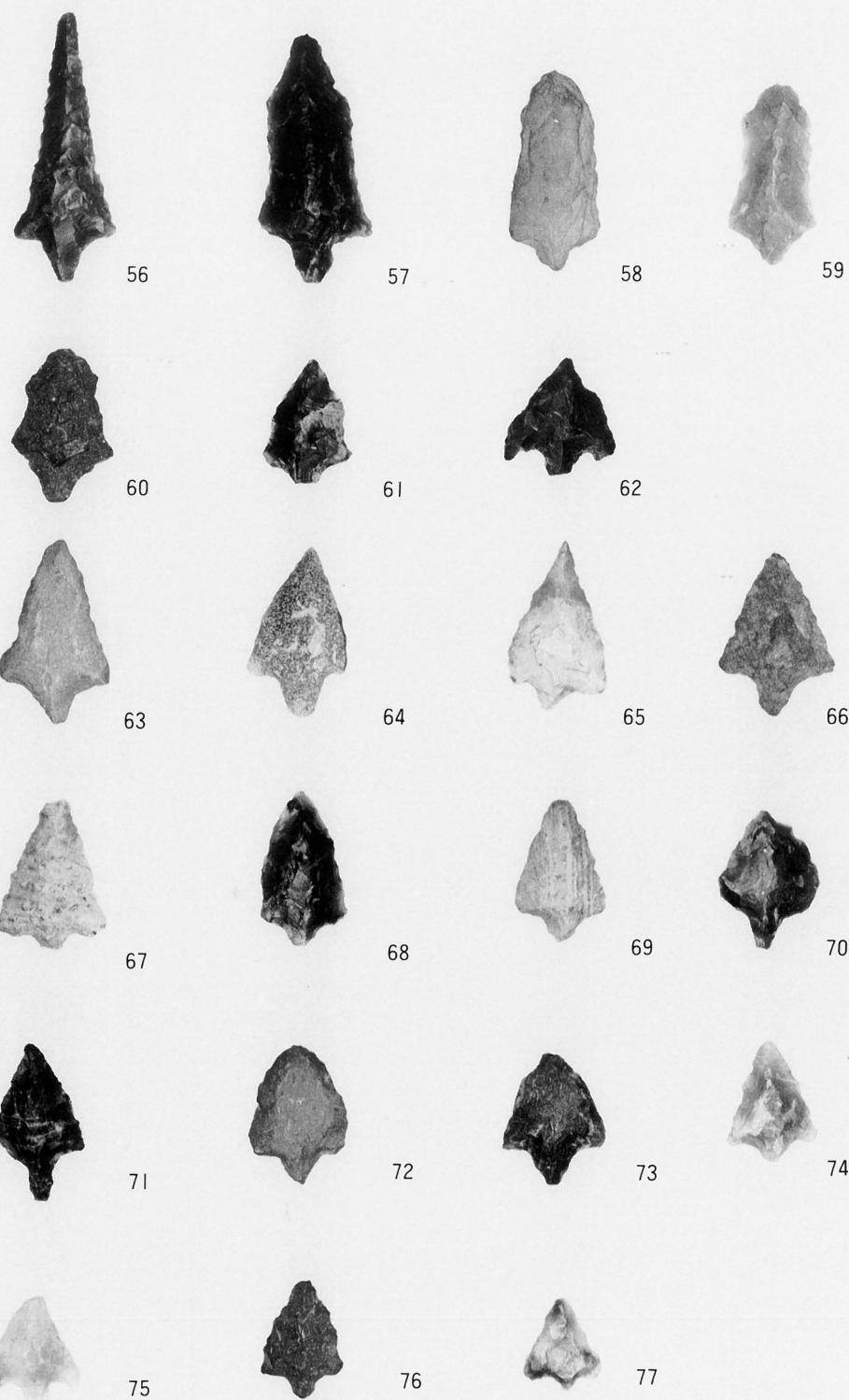
53

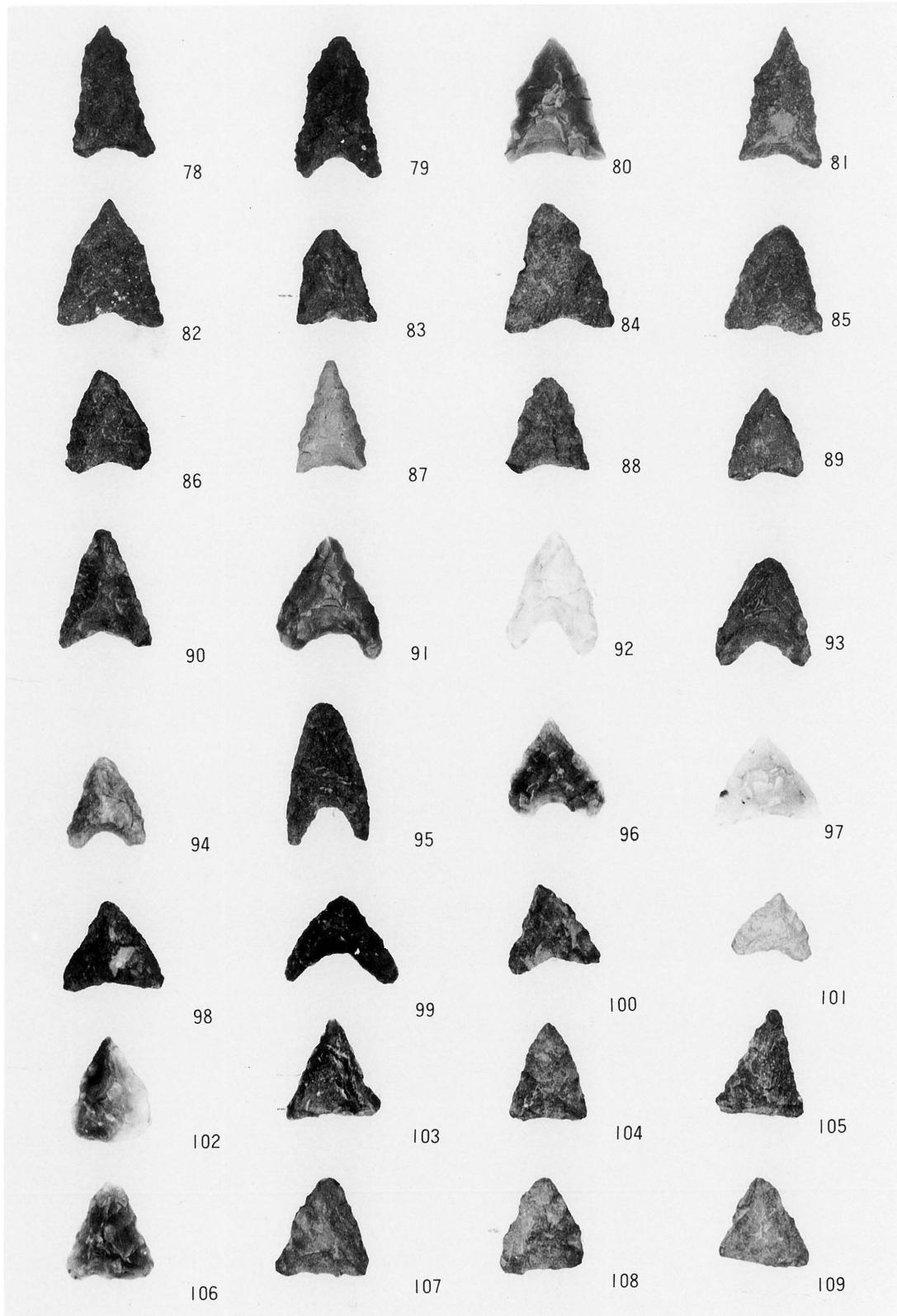


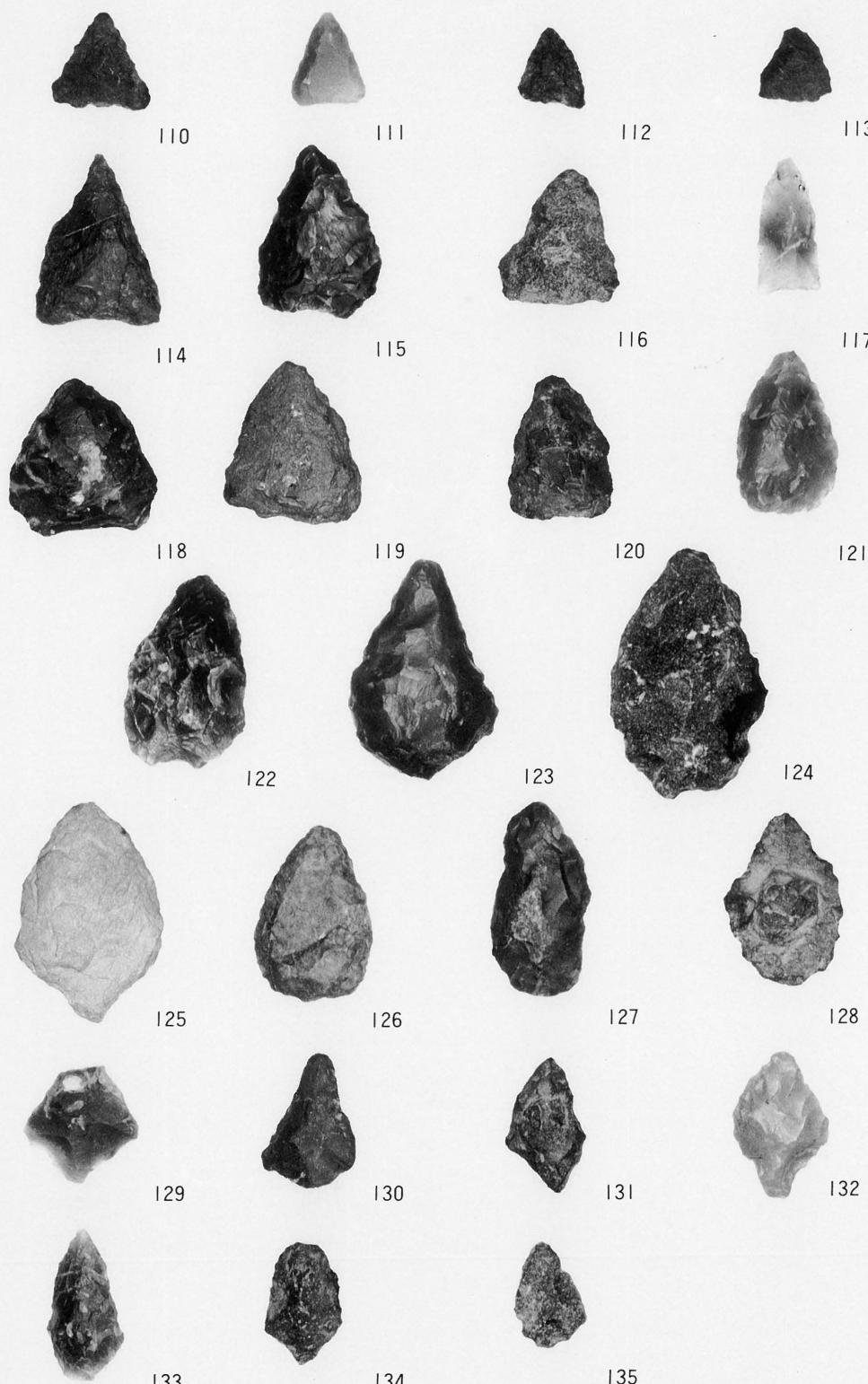
54



55







採集石器3 石鏃 (1/1)



136



137



138



139



140



141



142



143



144



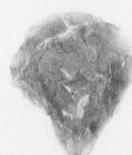
145



146



147



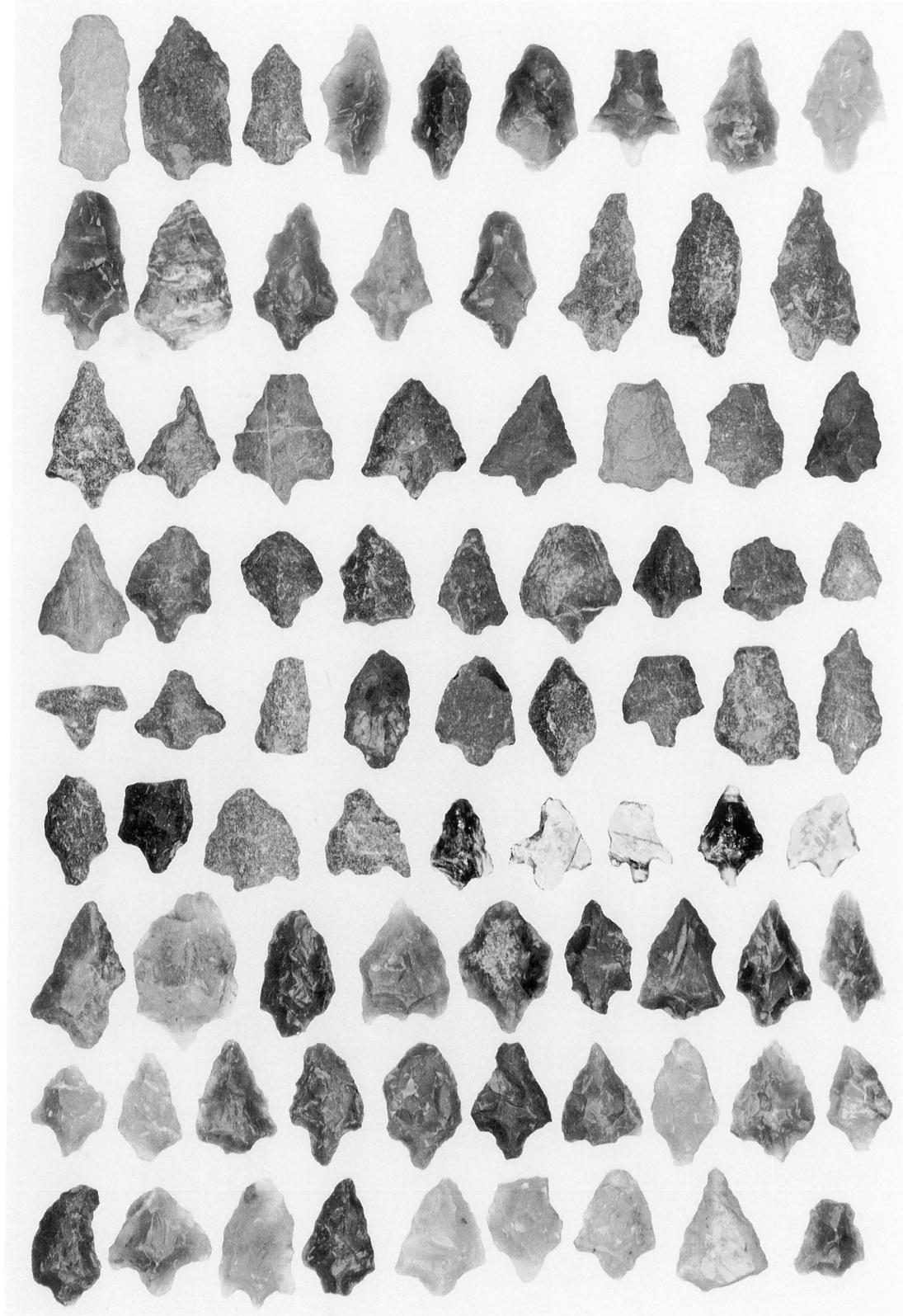
148



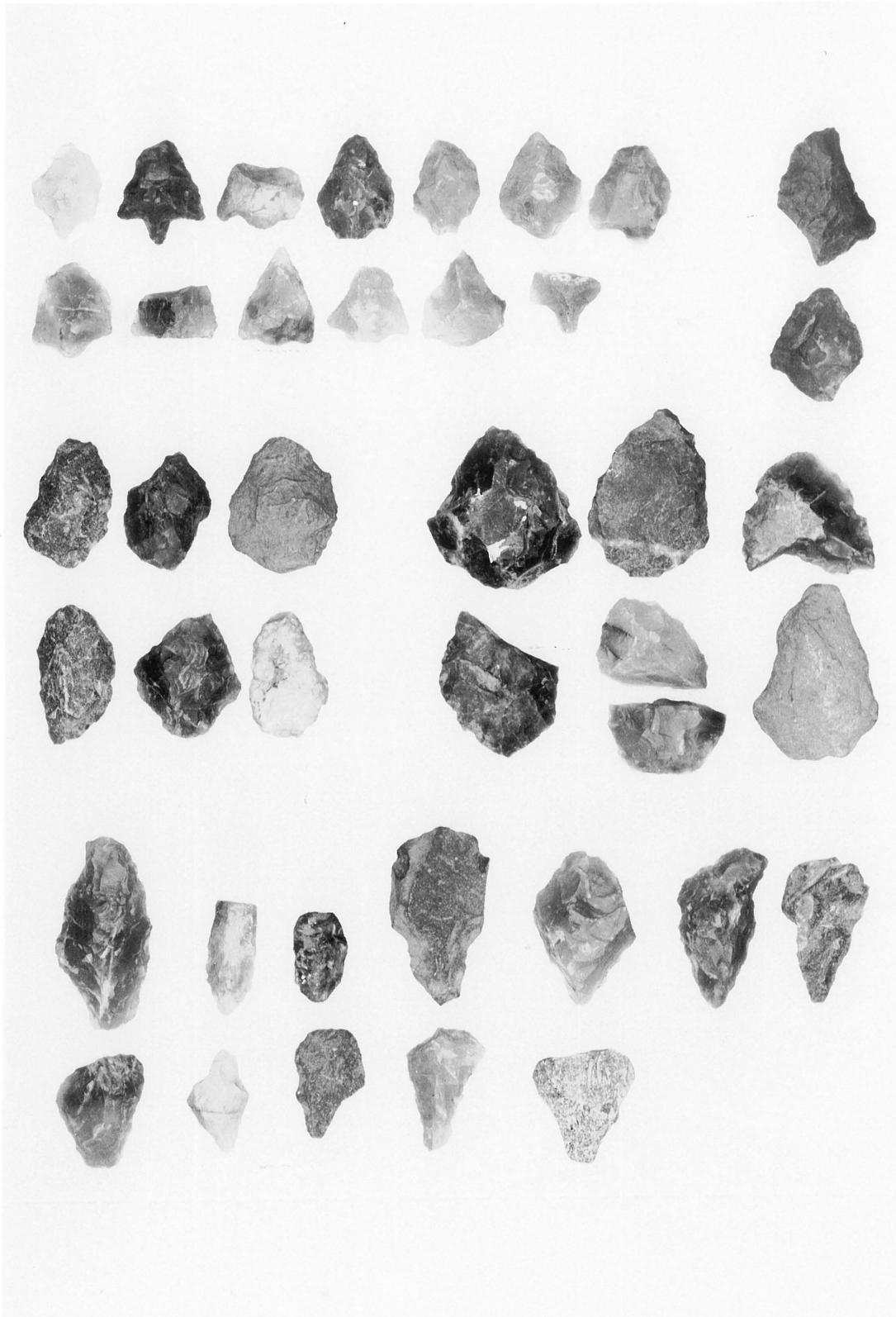
149



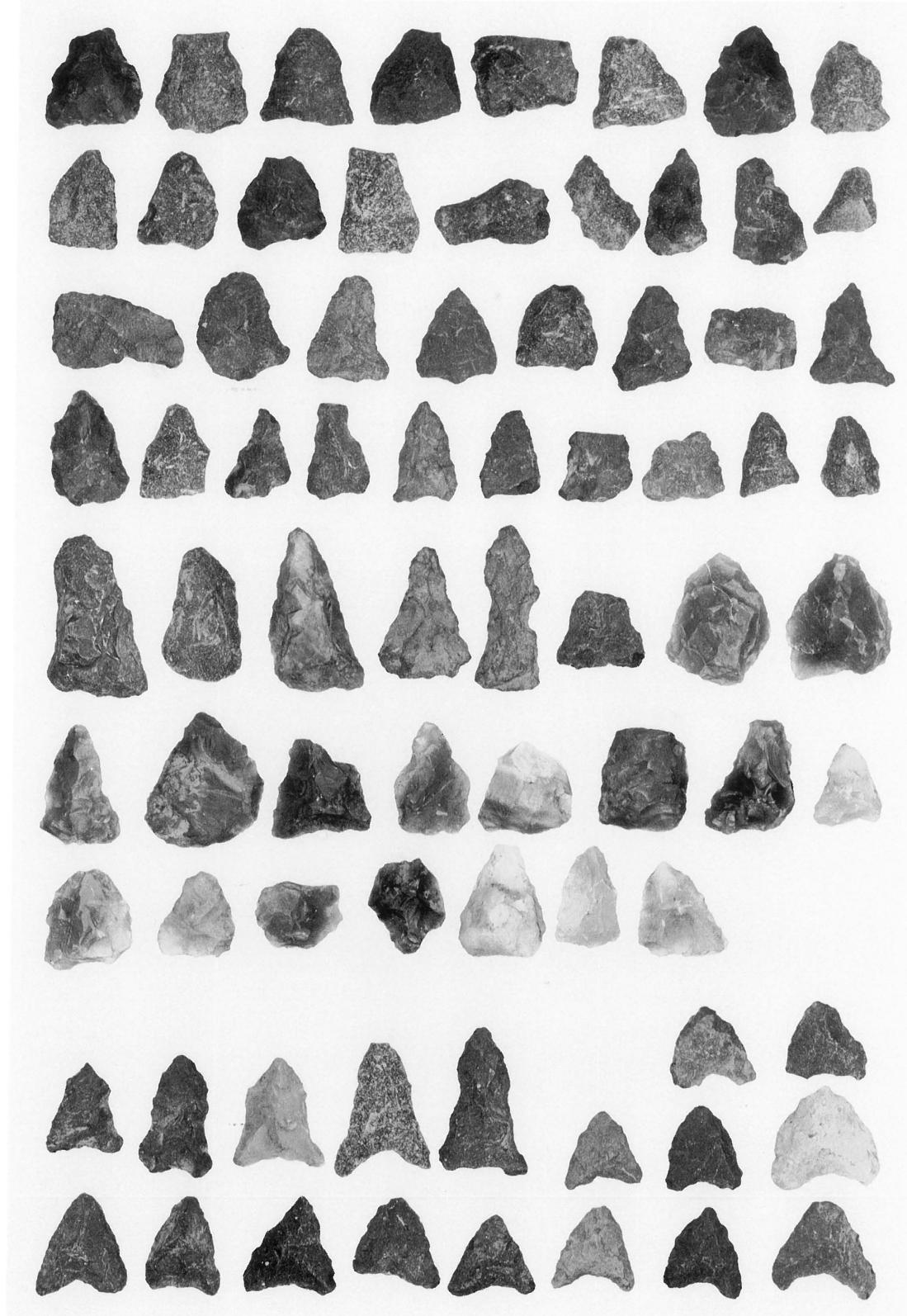
150



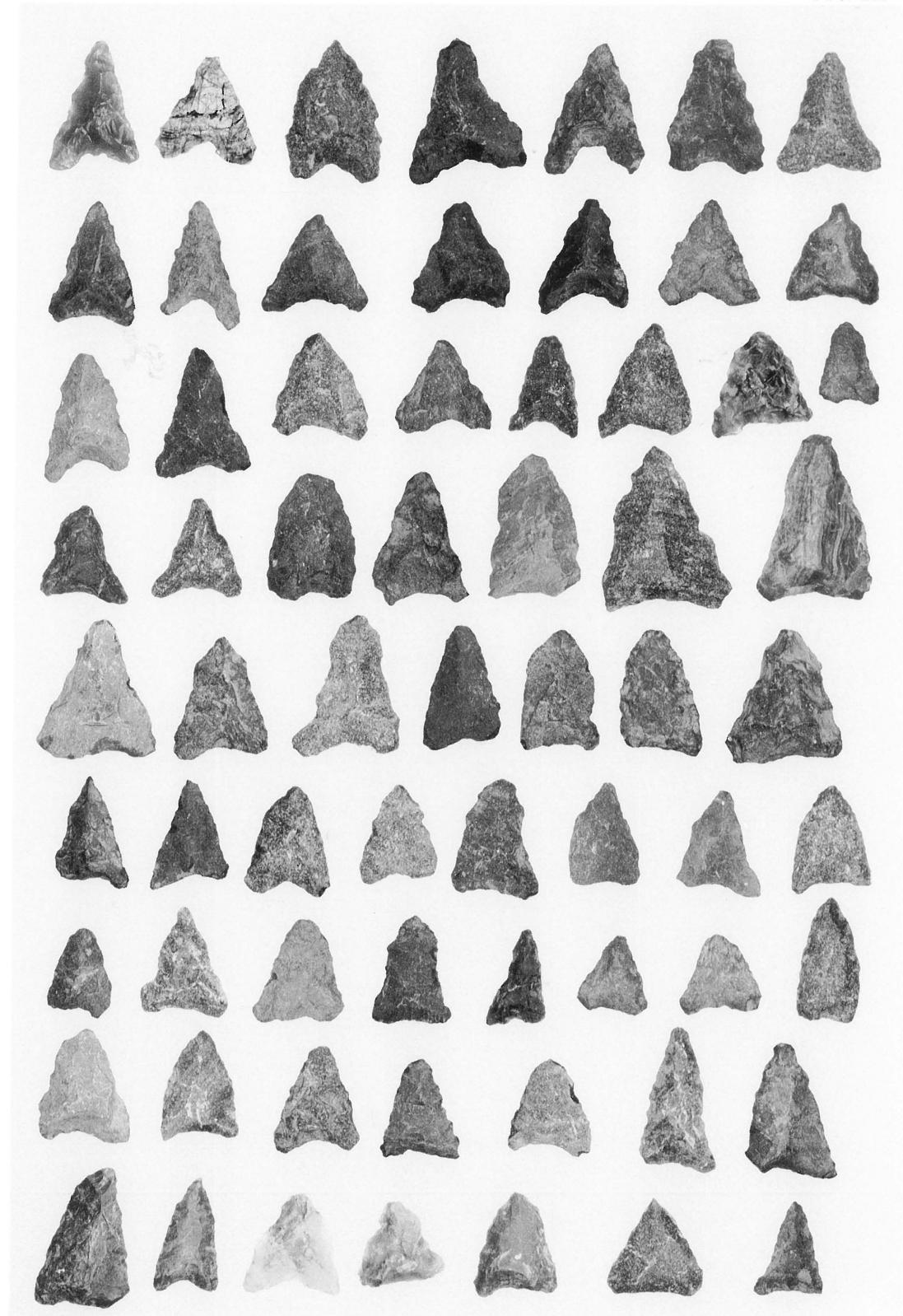
採集石器 5 石鏃 (1 / 1)



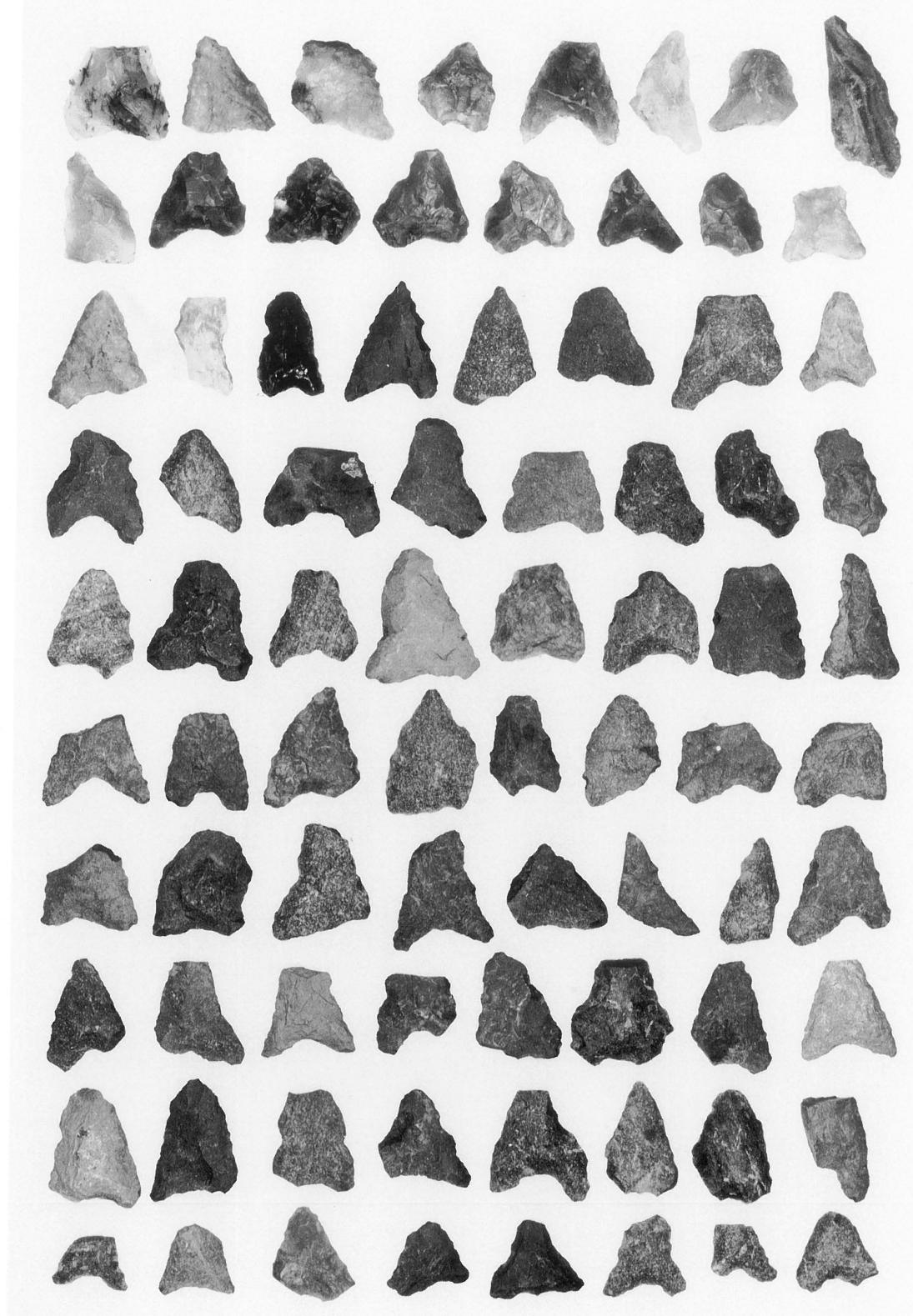
採集石器 6 石鏃・石錐 (1/1)



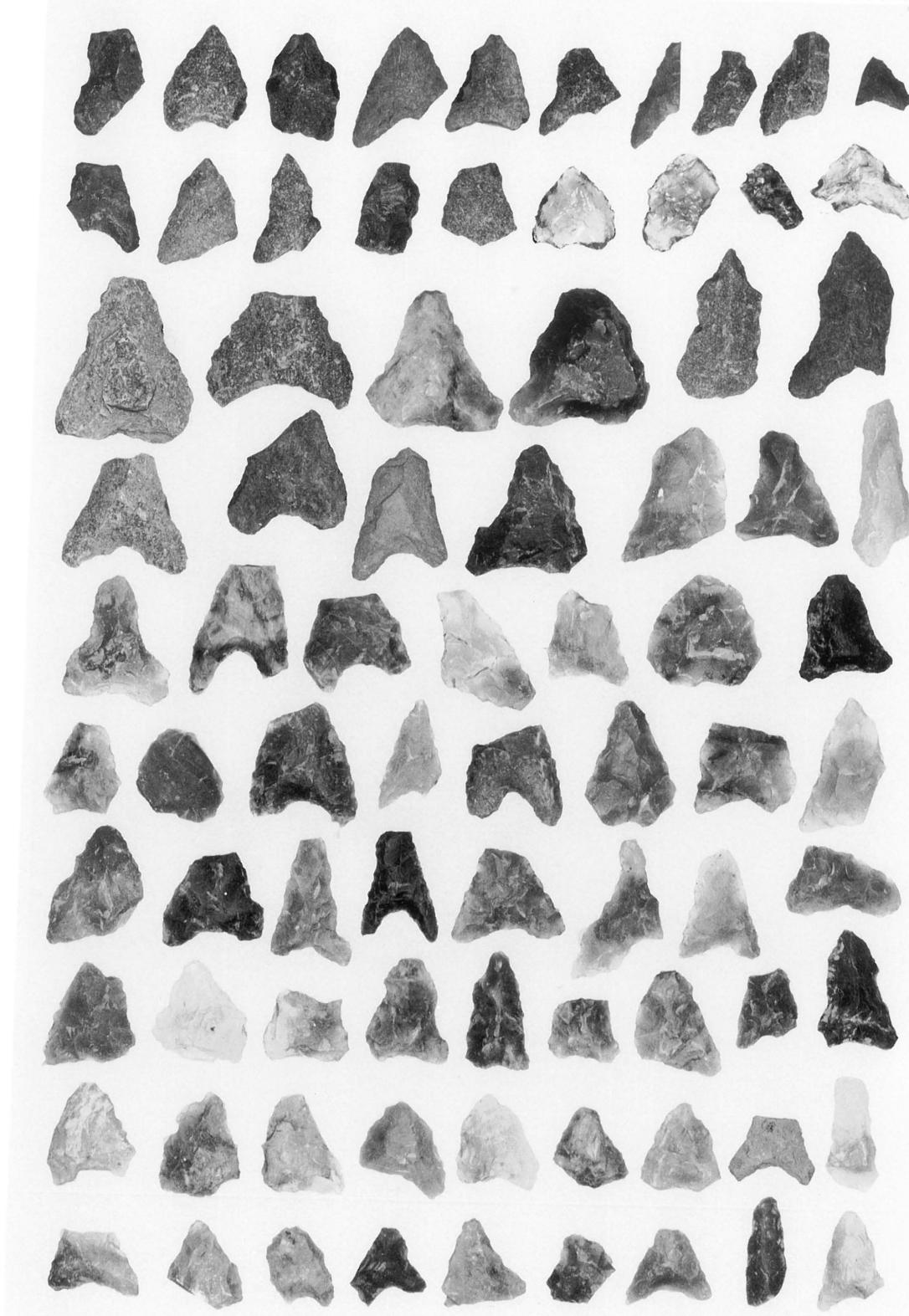
採集石器 7 石鏃 (1 / 1)



採集石器 8 石鏃 (1 / 1)



採集石器 9 石鏃 (1 / 1)



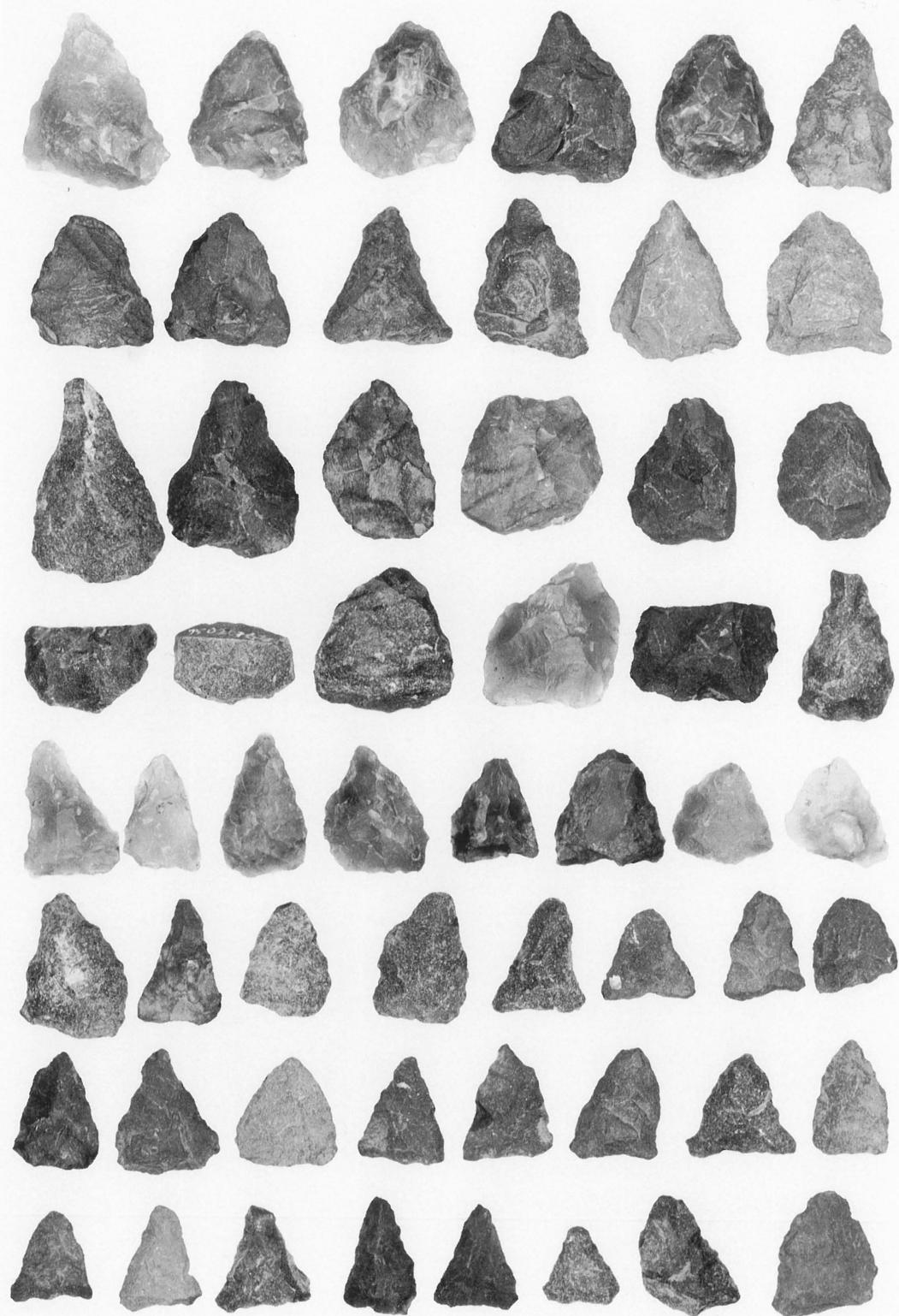
採集石器10 石鏸 (1 / 1)



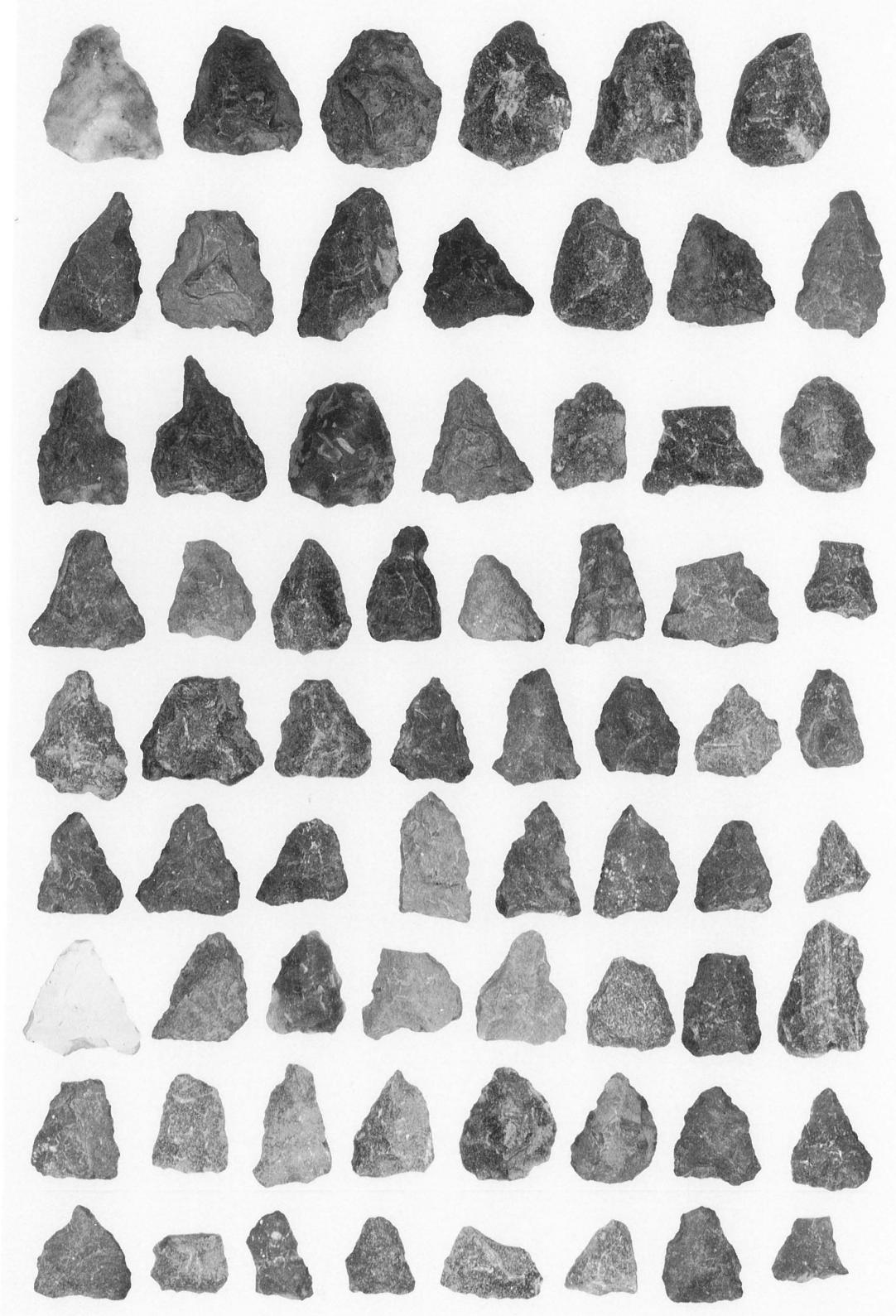
採集石器11 石鏸 (1 / 1)



採集石器12 石鏸 (1 / 1)



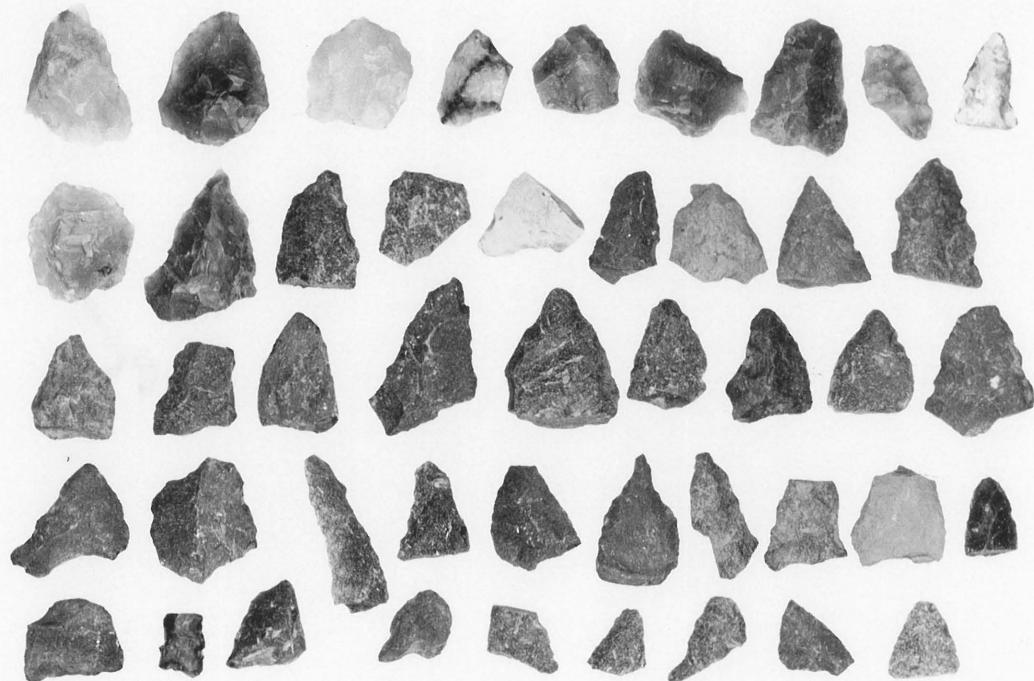
採集石器13 石鎌 (1 / 1)



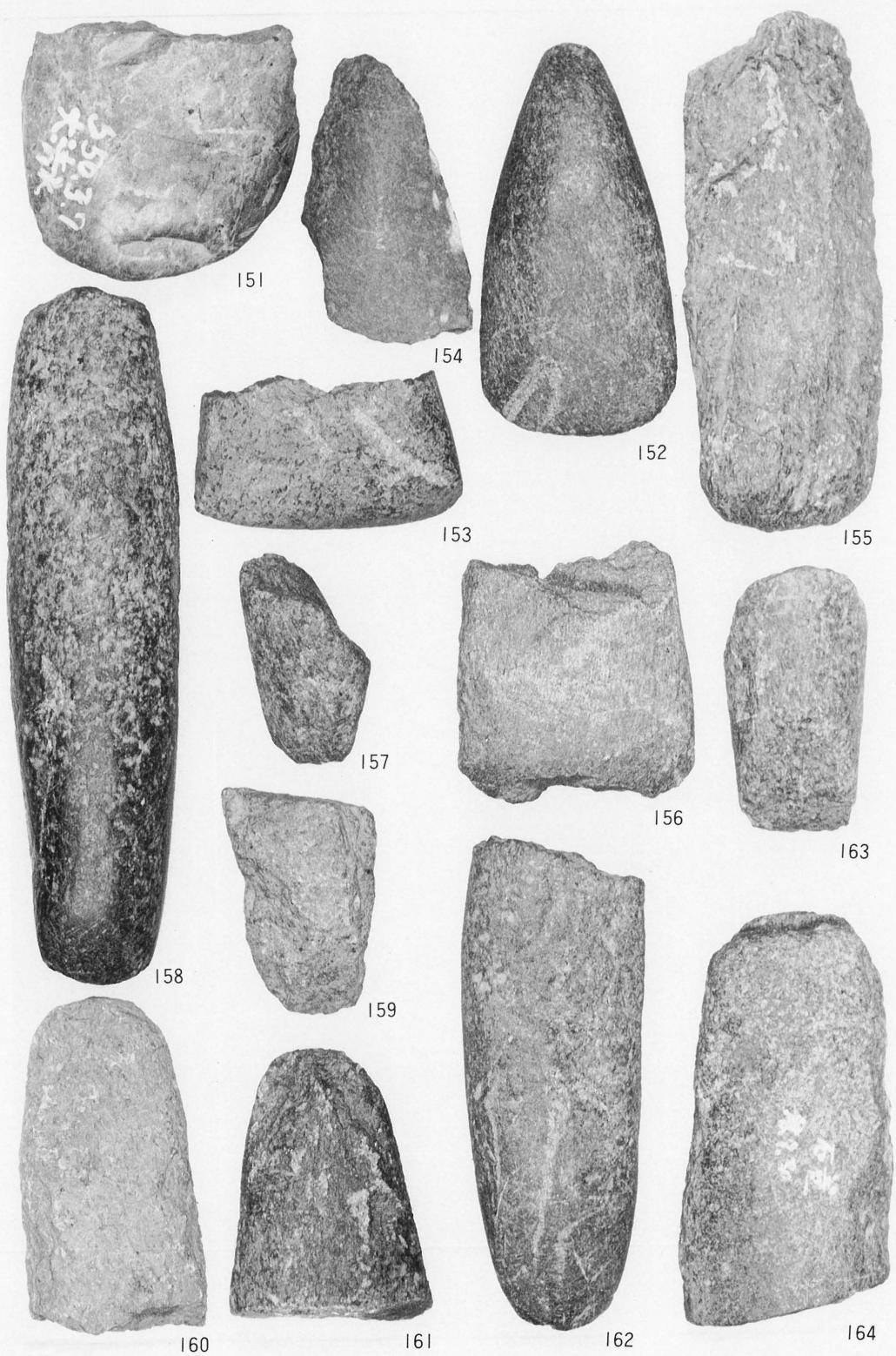
採集石器14 石鏸 (1 / 1)



採集石器15 石鏟 (1 / 1)



採集石器16 石鏟 (1／1)



採集石器17 磨製石斧 (1 / 1)



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



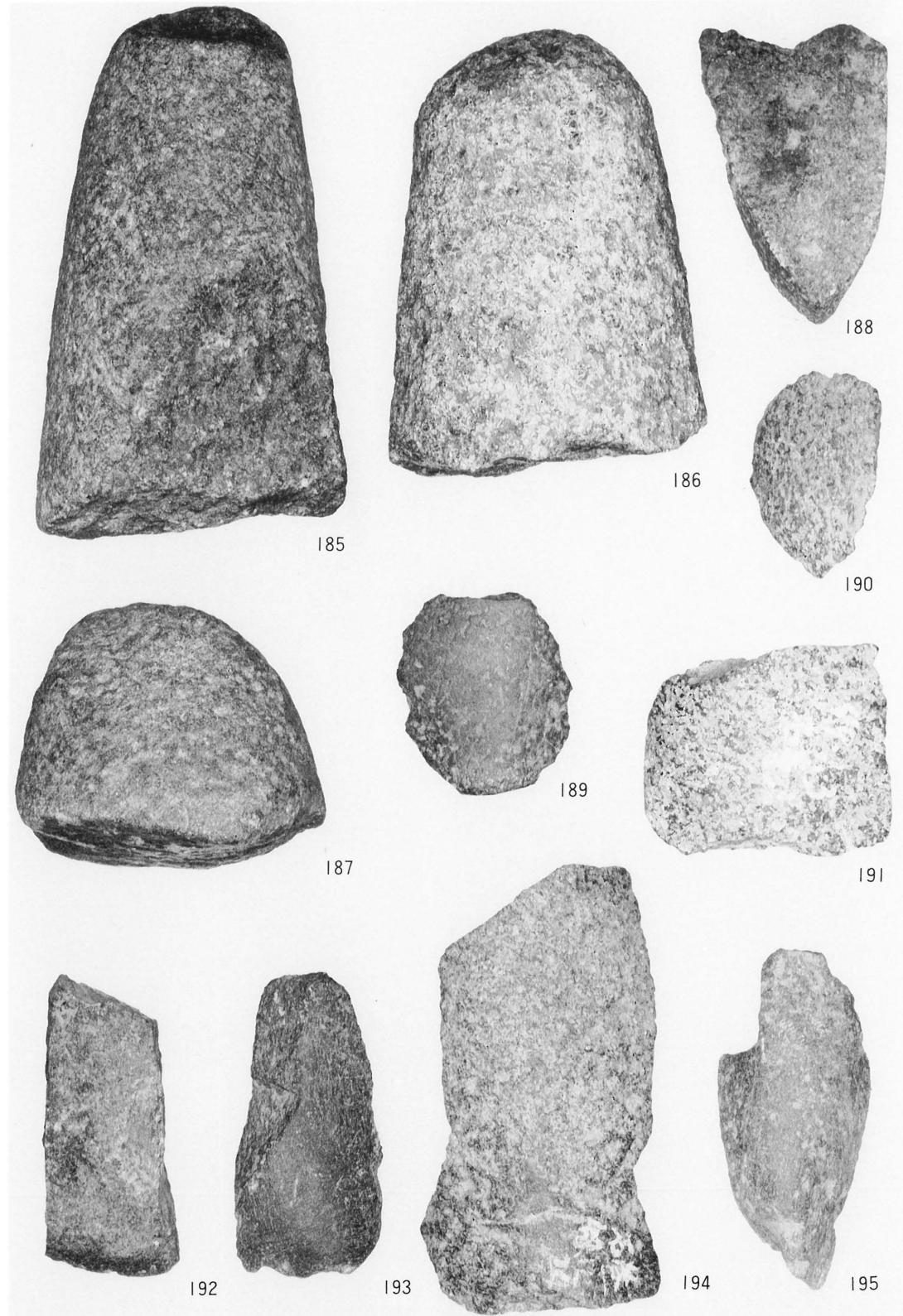
182



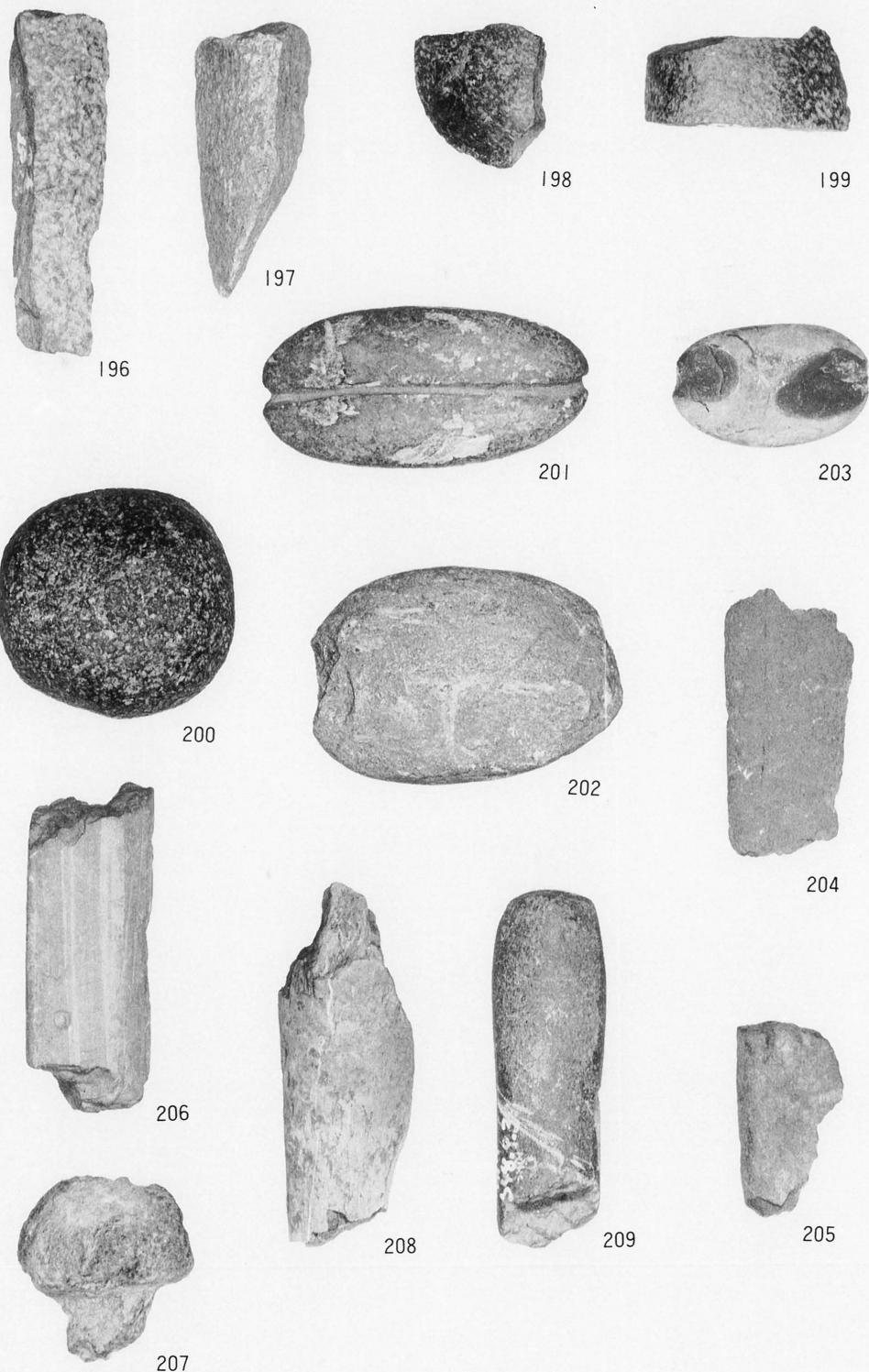
183



184

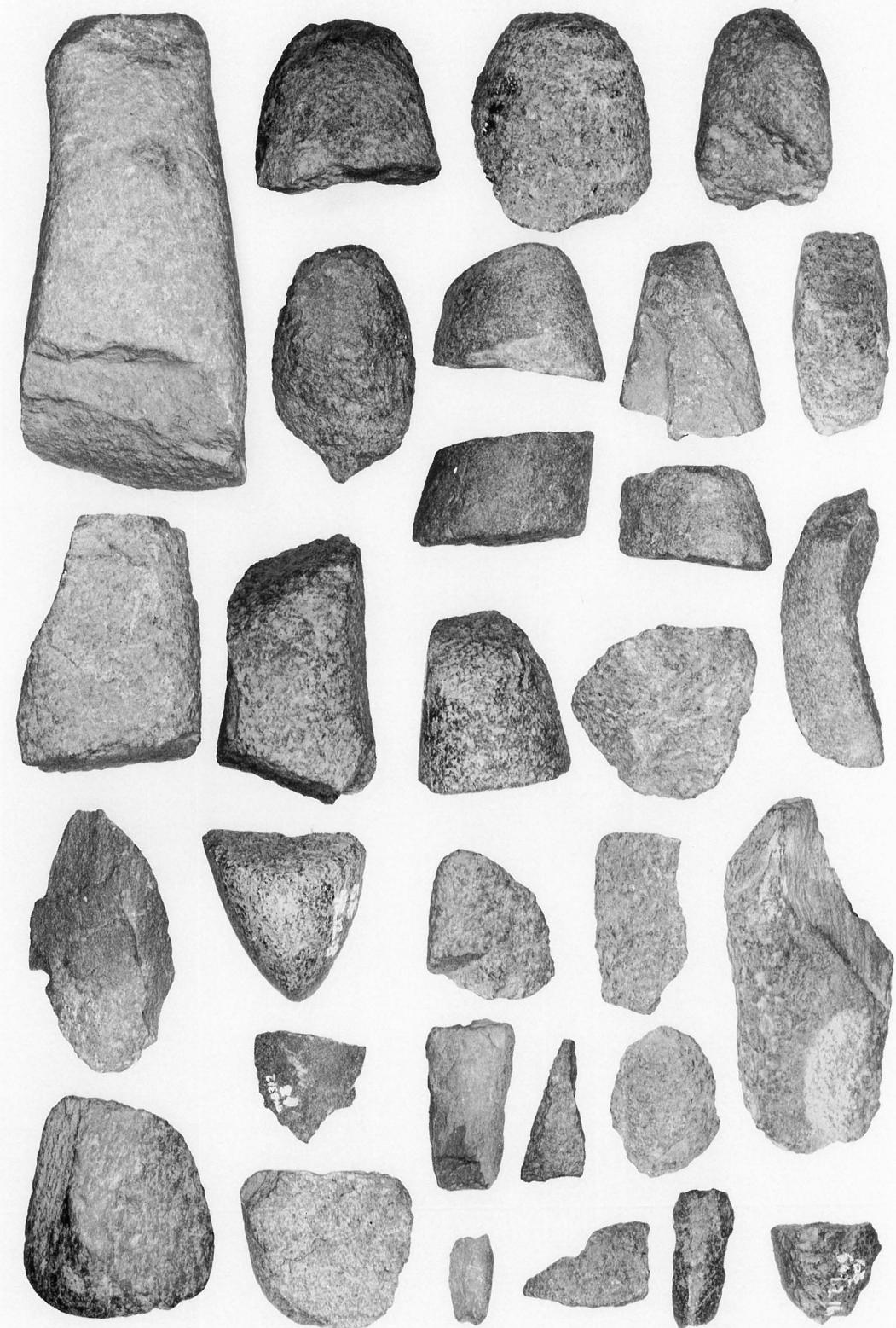


採集石器20 磨製石斧 (2 / 3)

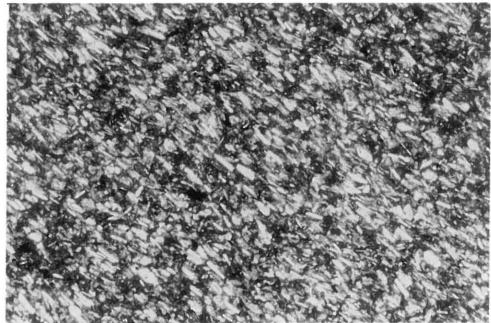
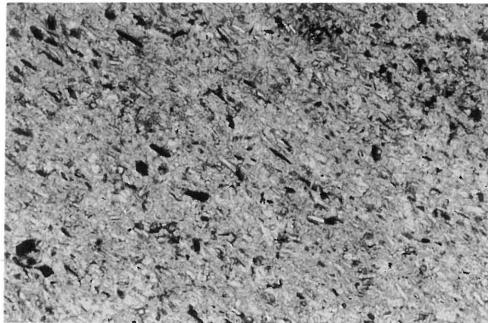


採集石器21 磨製石斧・石錘・石棒等 (2/3)

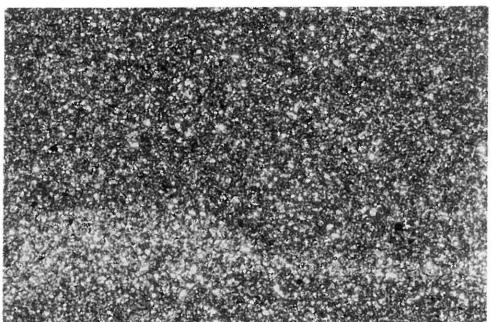
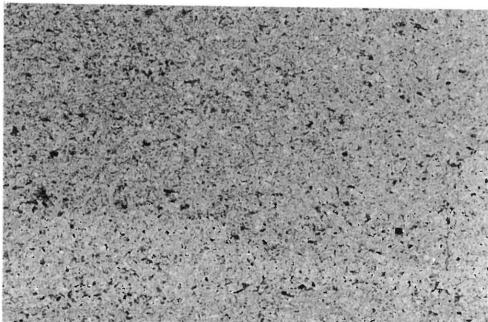




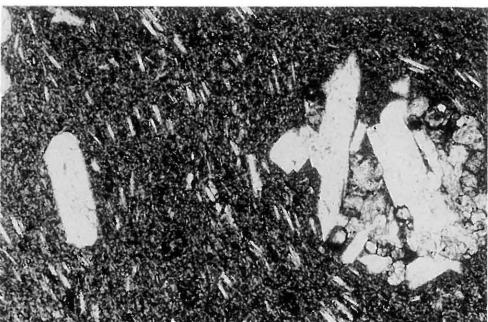
採集石器23 磨製石斧 (2 / 3)



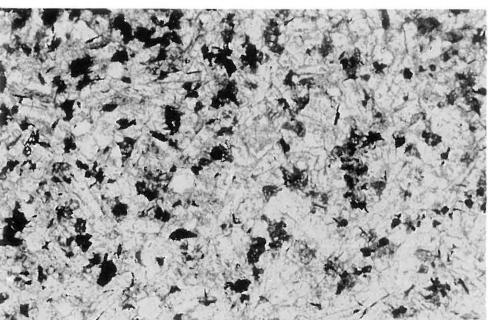
安山岩1（左：単ニコル、右：直交ニコル、 $\times 40$ ）



チャート（左：単ニコル、右：直交ニコル、 $\times 40$ ）



玄武岩（左：単ニコル、右：直交ニコル、 $\times 40$ ）



ヒン岩（左：単ニコル、右：直交ニコル、 $\times 40$ ）

岩石薄片偏光顯微鏡写真（すべて直交ニコル、 $\times 40$ ）

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集

白石遺跡

平成5年3月31日

発行 豊橋市教育委員会 ©

豊橋市埋蔵文化財調査事務所

〒441 豊橋市橋良町字向山4-40

印刷 井上タイプライター